

単元設定のねらい

単元の構成

配当 時間	「教材のねらい」 「教材名」	学習指導要領の指導事項	言語活動例
7	<ul style="list-style-type: none"> ● 論点を明確にする 「若者に友達プレッシャー」 ● 内容や構成・論理の展開を捉える 「他者を理解する」 ● 要旨を把握する 「自分を捉え直す」 ● 学びを深める 「身体（の）疎外」 	<p>言葉イ 論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。</p> <p>言葉ウ 文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めること。</p> <p>情報ア 主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めること。</p> <p>読むア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、論点を明確にしながら要旨を把握すること。</p> <p>読むカ 人間、社会、自然などについて、文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて、新たな観点から自分の考えを深めること。</p> <p>読むキ 設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりすること。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ❖ウ 学術的な学習の基礎に関する事柄について書かれた短い論文を読み、自分の考えを論述したり発表したりする活動。
4	<ul style="list-style-type: none"> ● 内容や構成・情報を整理し活用する 「情報を整理する」 	<p>言葉イ 論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。</p> <p>書くア 実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決めると。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ❖ア 特定の資料について、様々な観点から概要などをまとめる活動。

学習のねらいと教材の配置

●単元のねらい

読むこと 教材
<ul style="list-style-type: none"> ・ 論点を明確にすることを目的として、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、また筆者の思考の筋道を明らかにしながら、その主張を正確に把握することを目指した学習を展開するために設定した。 ・ テーマとして、「自己・他者」の問題を探究することを目指した。三つの文章を読むことを通じて学習者が、現代社会における「自己」「他者」の問題を論じることの意味を深く追究するとともに、教科書18ページの問いに答えるために自分なりの「自己」観や「他者」観を形成し、さらに、これからの社会を生きる上で「自己や他者」のように向き合うのか、「社会に対してどのように向き合っていく必要があるのか」を考えていく契機としたい。

書くこと 教材
<ul style="list-style-type: none"> ・ 実際に自分の論を構築する上で、説得力をもたせるために、引用の仕方を書くことを目指す。 ・ 引用するために、目的や意図に応じて、さまざまな立場の書き手による、さまざまな論点の文章や資料に広く目を配り、必要な情報を収集する。そして、情報を整理した上で過不足なく抜き出し、自分の主張を明確にする方法を習得させることを目指したい。 ・ 読むことの学習で使ったテキストをもとに、要旨を捉えた上で、「何を情報として用いるのか」「何を引用すれば、より説得的な文章にすることができるのか」を考えさせたい。



●教材の配置と学習活動の目標・内容 「データや事例に着目して読む」「若者に友達プレッシャー」

★論点を明確にする

- ・ 段落の組み立てを捉え直しながら、「議論の中心となる問題点」や筆者の説得の仕方を学ぶ。
- ・ 筆者が取りあげた「若者」の行動を整理するとともに、「若者」の行動の分析をおして見えてくる現代社会の問題点を明確にする。

★筆者の主張に着目して読む 「自分を捉え直す」 ★要旨を把握する

- ・ 各段落の中心になる文に着目して、一般的な「自己」観と筆者が考える「自己」観との違いを比較しながら、筆者の主張を明確にし、要旨を把握する能力を高める。
- ・ 筆者が自分の考えを適切に伝えるために、具体例として何を取りあげ、論証を試みているかを説明する。

★文章の構成や展開に着目して読む 「他者を理解する」 ★書き手のものの見方や論の進め方を捉える

- ・ 筆者の取りあげる事例を分析し、「他者」の捉え方を整理しつつ内容や構成・論理の展開を捉える能力を高め、筆者の考えを明確に捉える。
- ・ 「私には他人の痛みというものがどうしてもわからないんです……」という言葉を二度も引き合いに出していることの意味や効果を説明する。

★自分の考えを書く 「情報を整理する」 ★書き手の立場や論点などの観点から情報を収集、整理し、説得力のある文章を書く

- ・ さまざまな立場の書き手による論点の文章や資料に広く目を配り、必要な情報を収集、整理した上で過不足なく抜き出し、自分の主張を明確にする方法を習得する。

論点を整理する

若者に友達プレッシャー

◆辻大介

採録のねらい

●資質・能力の観点から

第一単元「論点を整理するために」の冒頭である本教材では、まず、文章全体の「論点を明確にする」ことを読むことの中に据えて学習を進めることをねらいとしている。

本教材は新聞夕刊に掲載されたエッセイであり、長さも短めで、論旨もはっきりしており、一読でその主旨がつかめるように書かれた文章である。また、その論理展開も、はじめに「便所飯」という、センセーショナルな言葉を探るトピックから文章をはじめ、次いで、筆者自身による千人規模の意識調査の結果を紹介しつつ、「便所飯」の背景にある若者の意識から「友達プレッシャー」の存在を明らかにする。そこから、そうした若者の意識がなぜ生じているかを社会的、また歴史的視野を交えて考察し、最後に「友達プレッシャー」に襲われている若者たちの解放のための提言をする。

以上のように論理的展開でありながら、起承転結の構成ももっており、読みやすく説得を増すための工夫がなされている。また、論点である「友達プレッシャー」が前半の具体的叙述の中から象徴的な表現として登場するなど、明快でありつつ、読解チャレンジのしがいもある文章である。

学習指導のポイント

- ・事例の調査結果、背景の考察、提言という文章展開をつかみ、文章全体としての論点を把握できるようにする。

●テーマの観点から

本単元「論点を整理するために」に取められた文章は、「自分自身」と、自分自身を規定してくる「他者」についてのものである。この「若者に友達プレッシャー」は、「友達がいなくてはならない」「友達がいないように見ればならない」「友達関係に気がつかない、空気を読み、友達に合わせなければならぬ」という、現代の若者がさらされている苛烈な人間関係の圧力「友達プレッシャー」についての確に指摘したものである。

現在の学習者たちは、この文章が書かれた二〇〇八年よりもさらにSNS等による「見られる」自分、見られ方に対応した自分」による自己のあり方への比重を高めており、青年期に形成すべき「アイデンティティ」の確立に向けては、さらに困難な状況に置かれていると言える。

本教材の読みを通して、学習者たち自身の自己と他者とのあり方を再認識し、同輩集団の閉鎖性の問題や、同輩集団以外との多様な関係を取り結ぶ環境を整えることの意味を考えることを通して、自己のあり方や息苦しい関係性の改善へ向けた視野を育てたい。

学習指導のポイント

- ・筆者の認識と提言の内容の吟味を通して自身を再認識し、自己のあり方や息苦しい関係性の改善へ向けた視野を育てる。

概要

●筆者

辻大介（つじだいすけ）

社会学者。一九六五（昭和四〇）年。大阪府の生まれ。一九八四年、京都大学文学部入学。卒業後、一九八八年から九四年まで株式会社博報堂（広告代理店）に勤務。博報堂在籍のまま、一九九二年、東京大学大学院社会学研究修士課程進学。一九九五年、東京大学大学院社会学研究修士。同年東京大学大学院人文社会学系研究科博士課程進学。博士課程を中途退学し、一九九七年から東京大学社会学情報研究所助手、関西大学社会学部講師、助教授を経て、二〇〇七年から大阪大学大学院人間科学研究科准教授。

専門領域は社会学、コミュニケーション論、メディア研究。特に社会学の観点からコミュニケーションとメディアに関する研究を進める。理論面では語用論、分析哲学のフイクション論を研究し、実証面では若者の意識や行動の調査研究にも携わっている。近年、ネット右翼と呼ばれるインターネット上の言説の分析、研究や、インターネットがもたらした民主主義の分断の問題に積極的に取り組み、注目されている。

主な著書に、『ネット社会と民主主義』、『コミュニケーション論をつかむ』など、翻訳に『友情化する社会——断片化のなかの新たな（つながり）』（デボラ・チェンバース）などがある。

●出典

「朝日新聞」（二〇〇八年八月三〇日付・夕刊）による。
教科書掲載にあたり、筆者の承諾を得て文章と表記の一部を改めた。

●要約

【二〇〇字以内】

現在の日本の若者たちは、常に自分に向けられるピア・グループ（同輩集団）からの視線を恐れている。人間関係への敏感な気づかいを求められ、その敏感さゆえに過度なまでの友達プレッシャーにさらされている。「便所飯」はその典型であり、人目を気にする伝統的な日本社会のあり方が、物質的豊かさが達成されて人間関係にシフトしたのである。今彼らに必要なのは、同輩集団以外の多様な関係を取り結ぶ環境を整えていくことだ。（一九八字）

【二〇〇字以内】

現在の日本の若者たちは人間関係への敏感な気づかいに迫られ、その敏感さゆえに過度なまでの友達プレッシャーにさらされている。今彼らに必要なのは、同輩集団以外の多様な関係を取り結ぶ環境を整えていくことだ。（二〇〇字）

●表現の特色

1 具体から抽象、そして提言へ

筆者が耳にした「便所飯」という言葉から話をスタートし、その背景にある「一人に見られたくない意識」の実態を、調査結果から明らかにし、その意識がどうして生まれたのかを考察していく展開をとっている。最後に現状をふまえた提言を行うことで、引き締まった明瞭な文章を展開している。

2 衝撃的な言葉の象徴的使用

冒頭で「便所飯」というキャッチーで衝撃力を持ち、若者の人間関係のあり方を象徴する言葉を題材に取りあげ、以降の考察がすべて「便所飯」が発した由来につながることで、単なる導入以上のはたらきをもたせている。

学習指導の展開

●学習指導要領の指導事項

知識及び技能

言葉イ 論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。

思考力、判断力、表現力等

読むア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、論点を明確にしなが重要旨を把握すること。

◆言語活動例

読むウ 学術的な学習の基礎に関する事柄について書かれた短い論文を読み、自分の考えを論証したり発表したりする活動。

●評価規準

知識・技能

・論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。

思考・判断・表現

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、論点を明確にしなが重要旨を把握している。

主体的に学習に取り組む態度

・論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしたり、文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、論点を明確にしなが重要旨を把握したりすることに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。

●学習指導案例

学習指導案

〇〇高等学校国語科 〇年〇組
授業者 〇〇〇〇

1. 学習活動 論点を整理する方法を学ぶ。
2. 教材名 「若者に友達プレッシャー」・その他の関連資料
3. 学習目標 本文を読むことを通して、文章展開の論理をつかむ方法を会得し、要旨を正確に捉え、適切に要約できる。

4. 評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。 (言葉イ)	文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、論点を明確にしなが重要旨を把握している。 (読むア)	論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしたり、文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、論点を明確にしなが重要旨を把握したりすることに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。
評価の実際	本文に用いられている語句を適切に用いている。 (記述の点検)	本文の内容について、適切に要旨を捉え要約している。 (記述の確認)	論点をふまえて話し合いに参加しようとしている。 (行動の分析)

5. 授業の展開 (2時間)

時	学習活動	評価
1	・教材文を読み、その内容を理解する。	本文に用いられている語句を適切に用いている。 (知識・技能、記述の点検)
2	・文章の論理展開をつかみ、要旨をまとめ、要約する。 ・本文の内容をふまえた話し合いを行う。	本文の内容について、適切に要旨を捉え要約している。 (思考・判断・表現、記述の確認) 論点をふまえて話し合いに参加しようとしている。 (主体的に学習に取り組む態度、行動の分析)

●学習指導の展開例(2時間扱い)

時間	目標	時間	学習活動と指導内容	指導上の留意点
第1時限	<ul style="list-style-type: none"> ・論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにする。 	<p>導入</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 「友達プレッシャー」とはどんなものだと思うか、尋ねる。 2 作者と発表年を確認する、 3 本文を通して読み、初読の感想を交流する。 <p>展開1</p> <ol style="list-style-type: none"> 4 第一段を読み、「便所飯」の概念を確認し、同感できるか話し合う。 5 第二段を読み、筆者の調査の内容と結果を確認する。 6 第三段を読み、「友達プレッシャー」についてまとめる。(学習活動1)。 7 第四段を読む 筆者の提言内容を読み取る。 <p>展開2</p> <ol style="list-style-type: none"> 8 教科書22ページの脚問に取り組み。 9 本文を通じて筆者がどのような主張をしているのかを説明する。(学習活動2)。 <p>評価規準</p> <ul style="list-style-type: none"> ・論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。 	<p>学習活動と指導内容</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 学習者のイメージを引き出し、読解のレイダネスをつくる。 2 十五年以上前の新聞記事であることを確認する。 3 B6サイズ程度の野線用紙に感想をメモ書きし、発表し合う。意味のわからない語句などはノートにメモする。 4 概念の確認や同感できるかの話し合いは短時間でよい。本文読時に感想で既に出ている場合は、省略してもよい。 5 一人であることよりも、そう見られることを恐れていることを確認する。 6 脚問なども活用し、「友達プレッシャー」の意味内容と、それが生まれてきた歴史的経緯を分けて確認する。 7 筆者が「環境を整える」ことを提言していることに注目させる。 8 本文全体を見直し、「トイレ」がどのような居場所であったかを確認させ、取り組ませる。 9 「なぜ」を問う問いであることを認識させ、筆者の提言に至る根拠を本文全体の中から探す。適宜、小グループなどでの話し合いを交えるとよい。 	<p>指導上の留意点</p>

時間	目標	時間	学習活動と指導内容	指導上の留意点
第2時限	<ul style="list-style-type: none"> ・文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、論点を明確にしながら要旨を把握する。 ・論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにした 	<p>展開3</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 本文を四つの段に分け、それぞれに小見出しをつける。 2 要約文を完成させ、要旨をまとめる。 3 「情報を整理するために」に取り組みを通して、学習を振り返る。 <p>まとめ</p>	<p>学習活動と指導内容</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 小見出しをつける作業を通して四段の関係性を認識する。いくつかのパターンが出てくる可能性があるが、合理的であれば広く許容する。 本文が、純粹な論説文というより、新聞記事としてのわかりやすさを優先させていることをつかむ。 2 教科書23ページの「読解するために 要約・要旨」を読み、要約と要旨の違いを理解する。紙面の下段にある要約から統ける形で、全文の要約文を完成させる。また、第四段にある筆者の提言を核として、要旨をまとめる文をつくる。 要約・要旨ともに提出物とする。時間に余裕があれば発表させてもよい。 3 第二段の調査結果を本文から抜き出してノートに列挙し、調査の規模・時期・内容のうち、どこまでが文章に載せられ、何が省略されているかを話し合う。 <p>評価規準</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、論点を明確にしながら要旨を把握したりすることに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとする。 	<p>指導上の留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、論点を明確にしながら要旨を把握している。 ・論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしたり、文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、論点を明確にしながら要旨を把握したりすることに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。

学習の具体と教材の解説

●全体の構成

段落	ページ・行	要旨
第一段	初め～19・7「…のどとい う。」	「便所飯」という言葉 昼休みに一緒に食事する相手のいない学生が、ひとりである姿を周囲に見られないよう、トイレの個室にこもって 食事を取る「便所飯」という若者言葉は、本当にある話のようだ。「気持ちわかる」という学生も少なくない。(序 説)
第二段	20・1「かといって…」 20・15「…なりがちだ。」	人間関係に神経をつかう若者たち 若者たちへの調査データを見ると、若者たちが恐れているのは、一人であることよりもむしろそこに向けられるピ ア・グループ(同輩集団)の視線だ。その視線のプレッシャーの中で若者たちは人間関係にかなり神経をつかってい る。(具体的考察)
第三段	21・1「こうした…」 15「…残されていない。」	問題は過度な友達プレッシャー 人目を気にする伝統的な日本社会のあり方が、物質的豊かさが達成されて人間関係にシフトしたのだ。高校までの 間は同輩集団に閉ざされ、苛烈なプレッシャーとなっている。(理論的考察)
第四段	22・1「今、必要なのは…」 「終わり」	若者に必要なこと 今若者に必要なのは、同輩集団以外の多様な関係を取り結べる環境を整えていくことだ。(提言)

〔段落分けについて〕

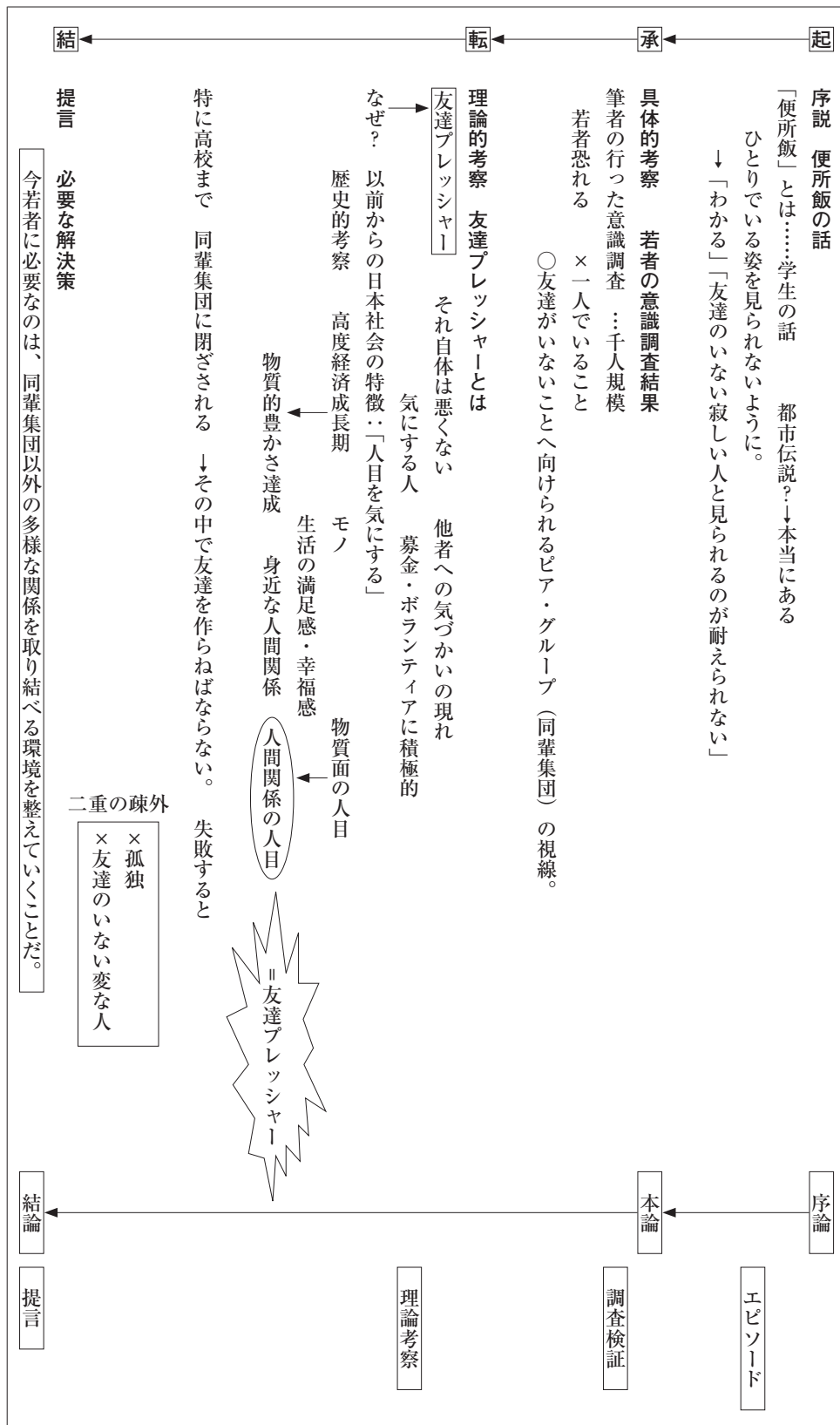
この文章は、新聞の夕刊にコラムとして掲載されたものであり、広義には「評論」に入る論理的文章である。新聞のコラムということで、短めで、読者を最後までスムーズに導く工夫がなされている。

初めに具体的なエピソードから入り、次に調査結果を紹介しながら具体例を足して、若者の神経質な対応を述べ、第三段ではそうした日本の若者の性質がどこから来ているかを理論的に考察し、第四段では、現状に対して解決

のための現実的な提言をして終わっている。評論でありながら「起承転結」的な展開も併せもっているのが特徴で、読者を無理なく文章の最後まで連れていくことのできる展開となっている。

三段に分ける場合は、第一段と第二段をまとめて序論とし、第三段を本論、第四段を結論とする考え方もできるだろう。また、第一段と第二段を具体的思考、第三段を理論的思考、第四段を提言としてまとめることも可能だ。

●展開図



● 語句・文脈の解説

● 第一段（初め〜19・7…のどという。）の要旨
「便所飯」という言葉
昼休みに一緒に食事する相手のいない学生が、ひとりである姿を周囲に見られないよう、トイレの個室にもって食事を取る「便所飯」という若者言葉は、本来にある話のようだ。「気持ちほわか」という学生も少なくない。

「19ページ」

1 「便所飯」 「便所飯」とは、「昼休みに一緒に食事をする相手のいない学生が、ひとりである姿を周囲に見られないよう、トイレの個室にもって食事を取る」ことを指す。この言葉が最初に使われたのがいつかは正確にはわかっていないが、二〇〇五〜〇六年頃、インターネット上の学生間でスラングとして使われ出したといわれる。本文が「朝日新聞」に掲載されたのが二〇〇八年八月三〇日。その後、二〇〇九年七月六日の朝日新聞夕刊一面トップに、「友達いなくて便所飯？」「一人で食べる姿、見られたくない」という記事が、トイレの個室で便座に腰かけておにぎりのようなものをばくついているイラストと共に掲載され、翌日のTVのワイドショーなどでも取りあげられ、その現象の審議も含めて話題となった。「朝日新聞」では、二〇〇九年に法政大学の尾木直樹教授（当時）が大学生四百人を対象に行ったアンケート調査の結果に基づき、二〜三%の回答者が「便所飯」の経験があると答えていることを報じた。その後もたびたび調査が行われ、サンリフレホールディングスが二〇一三年一月から二月にかけて行った調査では、回答した二四五九人のうち、自宅または学校、会社などの公共のトイレで食事した経験がある人は全体で二%で、内訳としては二〇代が一九%、三〇代が三三%、一〇代が一一%という順位になった。二〇代の「便所飯経験者」は女性が八〇%と圧倒的に高く、公共トイレでの経験者も多かった。便所飯の扱いや可否についてはさまざまな議論があるが、「便所飯」という行為が一定数存在することは認知されてきたと言っよい。

3 （語句）真偽のほど 真実か虚偽（うそ）かという具合。「真偽のほどは疑わしい」のように、ややネガティブな表現として使われる。

3 都市伝説 都市化の進んだ現代において口承されている話。出所が明確でなく、多くの人に広まっている噂話である。事実無根な場合が多い。「都市伝説」という言葉が日本に登場したのは一九八八年、J・H・ブルンヴァン『消えるヒッチハイカー』内に登場する「Urban Legend」という造語の訳語だとされている。翻訳したのは民俗学者の大月隆寛、重信幸彦であった。

〈板書例〉

便所飯の話

「便所飯」とは……学生の話 都市伝説？↓本当にある

ひとりである姿を見られないように。

↓「わかる」「友達のいない寂しい人と見られるのが耐えられない」

指導の要点

・タイトルとの関係で筆者が何を問題としているのかを捉える。

発問・脚問

「19ページ」

問 タイトル「若者に友達プレッシャー」とあるが、「友達プレッシャー」とはどういうものだと思うか。

答 ・友達がいないといけないというプレッシャー

・友達に合わせないといけないというプレッシャー など

解説 学習者にとっては実感のわくタイトルだと思われる。本文を予想する感しで、自由に出させ、軽く扱っよい。

問 都市伝説(3)とはどういうものか、定義を答えよ。

答 都市化の進んだ現代において口承されている話。出所が明確でなく、多くの人に広まっている噂話である。事実無根な場合が多い。

解説 ここで他の具体例を追い始めると、際限なく出てくる可能性が高い。ネットで広まった噂などはすぐに「都市伝説」だとラベルが貼られ、それもまた急速に忘れ去られていくことが多い。都市伝説について探求していくことも実り深い学習になるが、今回の本筋から外れるので、ここではあまり深く扱わないほうがよい。

●第二段(20・1「かといって…」～20・15「…なりがちだ。」)の要旨
 人間関係に神経をつかう若者たち
 若者たちへの調査データを見ると、若者たちが恐れているのは、一人であることよりもむしろそこに向けられるピア・グループ(同輩集団)の視線だ。その視線のプレッシャーの中で若者たちは人間関係にかなり神経をつかっている。

「20ページ」

2 私が昨年十月に、二十～四十代の男女約千人を対象に行った人間関係に関する意識調査 該当の調査については未詳だが、辻氏は同様の調査をこの時期何度か行っていて、二〇〇九年一月一日付「友だちがいないと見られることの不安」(月刊少年育成)五四巻一号)では、二〇〇八年十一月に行つた一〇七三人規模の調査で、「一人である」ことより、「友だちがいないように見られる」ことを耐えがたく感じている割合が高い。」という結果を得たとしている。

8 ピア・グループ(同輩集団) 年齢・社会的立場・境遇などがほぼ同じ人たちが構成されるグループ。ピア(Peer)は、同等(同格)の人、同僚、貴族・上院議員などの意味をもつ英語。ピア・グループという言葉としては、主に児童期に典型的に現れる友人関係のあり方とするのが一般的で、同輩集団や仲間集団とも言う。日本では「同じような立場の人によるサポート」といった意味で用いられる「ピアサポート」が最近よく聞かれるようになった。

8 同輩 年齢、経歴、地位などの同じ者。学校では同じ学年どうしを指すことが多く、社会では就職時期が同じだったり、同じ地位だったりする同僚に関して使われる言葉。ピアサポートの場合は、がんや犯罪被害など、同じような体験をした人どうしの好ましい関係として使われることが多いが、本文の場合は、学校や大学での「同質な仲間」という意味合いで使われている。

11 (語句) 場違い 「その場にふさわしくないこと。また、そのさま」の意。「本場の産でないこと」の意で用いることもある。

13 空気を読む 「その場の雰囲気から状況を推察する。特に、その場で自分が何をすべきか、すべきでないかや、相手のして欲しいこと、して欲しくないことを憶測して判断すること。『実用日本語表現辞典』によれば、「その場の雰囲気を察すること、暗黙のうちに要求されていることを把握して履行すること、などを意味する表現」。二〇〇七年頃、「空気読めない」を「KY」と表現することが流行し、

そのまま定着した感がある。稲増龍夫・法政大学教授(当時)は、二〇〇八年版『知恵蔵』の中で、「現代においては『場の空気』を瞬時に読み取る状況判断能力が重要視されることを物語っているが、過度になると『主体性を喪失し周囲に迎合する』こととなり、これも問題である。ある意味、集団同調圧力が強い日本社会ならではの問題かもしれない」と述べている。

〈板書例〉

若者の意識調査結果

筆者が行った意識調査 …千人規模

若者が恐れるのは

← ×一人であること

○友だちがいないことへ向けられるピア・グループ(同輩集団)の視線。

指導の要点

・筆者が、自身の調査をふまえて、どのような主張をしているかを捉える。

発問・脚問

「20ページ」

問 大学内では一人で昼食を食べることが耐えられずに便所飯をする学生が、大学から離れた街中の飲食店であれば一人で食べるのも苦にならない(1)のはなぜか。

答 ・若者たちが恐れているのは一人であること自体よりもむしろ、そこに向けられるピア・グループ(同輩集団)の視線であるから。

・若者たちが恐れているのは、友達がいらないことよりもむしろ友達がいないうに周りから見られることだから。

問 「友だちがいないように見られるのは耐えられない(10)若者たちにはどんな特徴があるか。

答 「自分のふるまいが場違いではないか」と気にかけて、「何かするときには人の目を考慮」し、「友達と意見が食い違ったら相手に話を合わせる」傾向が強い。自分自身の気持ちや感情よりも、周囲の雰囲気に合わせ、空気を読む傾向が強い。

問 「空気を読む(13)とはどういうことか

答 その場の雰囲気を察知して、暗黙のうちに要求されていることを把握し、その通りに行動すること。

解説 日本の若者は、自分自身の考えや気持ちとは違って、その場の雰囲気を優先する傾向をもつことを確認する。主体性を奪われ、苦しむ可能性についても気づくことが多い。

●第三段(21・1「こうした…」～21・15「…残されていない。」)の要旨

問題は過度な友達プレッシャー
人目を気にする伝統的な日本社会のあり方が、物質的豊かさが達成されて人間関係にシフトしたのだ。高校までの間は同輩集団に閉ざされ、苛烈なプレッシャーとなっている。

「21ページ」

1 人間関係への敏感な気づかいはそれじたいが悪いことであるわけではない。ここまでの例を見ると、自分の考えや気持ちを出し、好ましくないことのように思える。しかし筆者は、「友達がいないように見られるのは耐えられない」者は、募金やボランティアの参加に積極的であったことを指摘し、「これもまた、他者への気づかひの現れの一つだろう」と積極的に評価している。確かに募金や無償のボランティア活動は、自分自身の利害や自分自身に関わることよりも他者の利益を優先する考え方であり、その意味では「他者への気づかひ」とも言える。一方で、自分よりも他者を優先する場合、「自分の当面の利益よりも、今困っている他者の利益を優先してしまう場合」という信念に基づいて行動している場合と、ただ自分自身よりも場の雰囲気や他者の感情を優先してしまう場合とは、決定的な違いがある。この違いに関して本文では触れていないが、それは「主体性」という問題に属し、今回の問題と密接ではあるが今回は別の問題として扱うことにしたのだと思われる。

4 問題は、その敏感さゆえに、過度なまでの友達プレッシャーがはたらきかねないことにある。本文のタイトルにもなっている「友達プレッシャー」という言葉がここで初めて出てくる。筆者のスタンスは、周囲に合わせることに神経をすり減らす若者の姿を、「彼らの主体性の欠如」という個人の責任に帰すのではなく、「過度なまでの友達プレッシャーがはたらきかねない」という社会的現象として捉えようとするものである。個人個人の性質や能力に帰す自己責任論では構造的な社会問題は解決できないということとは、貧困問題や健康問題、差別に関わる問題などでも明らかになってきている。個別に見れば個人的な努力によって解決できる——あるいは解決すべき——問題に見えても、それが大きな構造的問題になっている場合は、その構造自体を見つめ、分析して解決策を考えなくてはならない。こうした方向性での解決策の提言は、最終段落でも行われる。

6 プレッシャー「元々「圧力」の意味で、物理的用語であるが、広く心理的用語として使用される。

6 なぜこのようなプレッシャーが強くはたらくようになったのか 評論などではしばしば、問題を提示してそれを追究する形式で文章を進めていく形式をとる。本文では、ここで唯一の疑問文形式の文を登場させ、ここから因果関係を追いかけて考察を深めていくことを示している。

6 人目を気にすること自体は、以前から日本社会の特徴とされてきたことだ。今まで述べてきた人の目を気にし、周囲への気づかひに追われる生き方自体は、日本社会の特徴として古くから言われてきた。「郷に入っては郷に従え」や「出る杭は打たれる」など、個人よりも集団を優先し、いわゆる同調圧力の強いあり方は、伝統的なものであったと言えるだろう。

7 高度経済成長期 主に一九五〇年代半ばから一九七三年までの期間。特に一九六〇年代の日本の経済成長率が年平均一〇%を超え、当時世界に類のない急速な経済成長を遂げたことをいう。石炭から石油へのエネルギー変換、池田勇人内閣〈所得倍増〉計画に始まり、合成繊維、プラスチック、家庭電器などの技術革新、石油化学コンビナートなど大型化・集中化が進行し、自家用車の普及や、スーパーマーケットなどの流通革命も進んだ。所得向上は家庭電化など経済的に豊かな国民生活をもたらした一方で、物価上昇、大都市圏の過密と農村などの過疎、そして公害など負の遺産も生じさせる結果となった。

10 意識の向かう先が人間関係にシフトするのだ 高度経済成長期には、物質的豊かさが幸福の基準として作用し、家電や車などをもつこと、持ち家に住むことなどが関心の中心だった。しかし、一九八〇年代後半あたりから物質的欲求は次第に飽和へと向かい、一九九〇年代に入るとバブル景気の終焉によって日本の経済的優位が揺らぐに伴って、精神的欲求へと意識の中心がシフトした。そこで欲求の中心となってきたのが、人間関係だったのである。

11 特に高校までの間は、学級を中心とした同輩集団の中に閉ざされ、苛烈な友達プレッシャーと化す 豊かさの欲求の中心が人間関係に向かうと、いかに自分の周りに豊かな人間関係を構築しているかが関心の中心となる。どれだけ多くの広範な友人たちと、いかに良好な人間関係を築けているかが幸せの尺度となり、友達作りが絶対に失敗できない過酷な試練となる。

14 二重の意味で疎外されるのである 「疎外」とは、「疎んじ、仲間外れにすること」の意で、「二重の意味」とは、友達がいないことにより人間関係から疎外され、さらに、ただ孤独だけでなく「友達のいない変な人」という周囲からの蔑みのまなざしにさらされることで「友達のいる普通な世界」からも疎外されてしまうことを指す。

発問・脚問

「21ページ」

問 「人間関係への敏感な気づかひは、それじたいが悪いことであるわけではない(1)」のはなぜか。

答 人間関係に敏感な人は、募金やボランティア活動への参加などに積極的で、それは他者への気づかひの現れでもあると考えられるから。

問 「人間関係への敏感な気づかひ(1)」が悪く作用する例として、どのようなことが想定されるか。

答 過度なまでの友達プレッシャーがはたらくこと。

問 「友達プレッシャー(4)」とはどのようなものか。

答 ・「まともな人間でいるためには友達がいないといけない」という圧力。
・「友達とうまくやっていくために、何でも友達に合わせるようになってはならない」という圧力。

解説 本文では「友達プレッシャー」について改めて定義はしていないので、解答例のようにいくつかの可能性が考えられる。「友達がいないように見られるのは耐えられない」ということからは前者の答えが「友達と意見が食い違ったら、相手に話を合わせ

る」などから後者の答えが導かれる。後者は仲たがひにより友道を失うことをおそれていることから、前者の答えのほうがより根源的だと言える。

問 「プレッシャーが強くはたらくようになった(6)」のはなぜか。

答 高度経済成長期には人々の見る目への関心は物質的なものに関心が集まっていたが、物質的な豊かさが満たされると、今度はいよいよ身近な人間関係によって生活の満足度や幸福感が左右されるようになり、人々の意識の向かう先が人間関係にシフトしたから。

脚問 「二重の意味で疎外される(14)」とはどういうことか。

答 友達がいないことで人間関係から疎外されるだけでなく、「友達のいない変な人」という視線にさらされることで、さらに疎外されてしまうということ。

解説 高校までの学校の中では、学級を中心とした同輩の中に人間関係が閉ざされるため、その中で友達が作れないと、孤独になるだけでなく、「普通の人」という世界からははじかれるという意味で、二重の疎外状態が生まれるということである。

14 その視線から逃れる場所は、それこそトイレの個室くらいしか残されていない。「その視線」とは、先述の「二重の意味」での「疎外」をもたらす「同輩集団」の友達プレッシャーの視線である。日本の伝統的な「人目を気にする」ことは、時代とともに人間関係に関心の中心が移り、同年齢の同輩集団の中で友達をつくることに失敗すると「友達のいない変な人」という視線に苛まれる。同輩集団は学校の同年齢集団の中に常に周りにいて互いを監視する視線となり、学校内でその視線から逃れられる場所は「トイレの個室」くらいしかない、というのだ。近年、若者の「居場所」や人間関係からの避難場所(アジール)の必要性が言われるようになってきているが、学校の中でも盗難やいじめの防止、外部からの不審者侵入対策として職員巡回や監視カメラが導入されるなど、視線の届かない場所が減少しており、人目を気にせずにいられる場所はそれこそ「トイレの個室くらい」なのも事実である。

〔板書例〕

友達プレッシャー それ自体は悪くない

◀ 他者への気づかいの現れ

◀ 気にする人 ……募金・ボランティアなどには積極的

◀ なぜ? 以前からの日本社会の特徴…「人目を気にする」

◀ ……高度経済成長期 ↓生活の満足感・幸福感・物質的豊かさ達成

◀ 身近な人間関係 人間関係の人目への関心が高まる ⇨友達プレッシャー

……特に高校まで 同輩集団に閉ざされる

↓その中で友達を作らねばならない。 失敗すると「二重の疎外」

指導の要点

・取りあげた問題に対する筆者の考えとその根拠を捉える。

●第四段(22・1)「今、必要なのは…」(終わり)の要旨
若者に必要なこと
今若者に必要なのは、同輩集団以外の多様な関係を取り結べる環境を整えていくことだ。

〔22ページ〕

1 今、必要なのは、子どもたち若者たちが、同輩集団以外の多様な関係を取り結べる環境を整えていくことではないか「友達プレッシャー」や「便所飯」の解決策として子どもたちにコミュニケーションスキルの向上を強いるのではなく、閉鎖的、相互監視的「同輩集団」に閉じ込められることからの解放が提案されている。ここで注意しなければならないのは、筆者が社会(大人)に求めているのは「環境の整備」だということである。

4 社会は広い。そこにはトイレの個室に代わる居場所が、誰にとっても必ずあるはずだ 同輩集団以外の例としてあがっているのは「一人暮らしのお年寄り」、「長期入院の子ども」である。彼らは社会の中において「多数派」だとみなされていない人、つまり、同輩・同質のプレッシャーの外にいる人たちである。もしも、例が「ベンチャー企業で成功した若い実業家」だったり、「外国で環境保全のために活躍する国際機関のメンバー」だったりした場合、社会的には「多数派」に属する人であり、人間関係の範囲は広がっても、子どもたち若者たちの「同輩視線」からの解放にはならない。もう一つ注意したいのが、筆者は、子どもや若者が「一人暮らしのお年寄り」や「長期入院の子ども」を自分よりも弱い人間として認識することで「人に認められ必要とされる」と考え、居場所を見いだすと考えているのではない、ということである。これらの例は、自分たちのいる狭い世界に対して外からの視線を投げられる存在、「社会の広さ」を提示してくれる存在としてあげられていることを、しっかりと押さえておきたい。

指導の要点

・本文の論理展開をふまえて筆者の提言の内容を捉える。

発問・脚問

〔22ページ〕

問 筆者が「今、必要なのは」(1)として述べていることを整理せよ。

答 子どもたち若者たちが、同輩集団以外の多様な関係を取り結べる環境を整えていくこと。

解説 読解問題としては至って簡単な問いだが、語句の解説にもあるように、個人の努力ではなく環境を整えることを解決策だとしていることに注目させたい。

脚問 「トイレの個室に代わる居場所」(4)とはどのようなものか。

答 同輩集団からの苛烈な「友だちプレッシャー」から逃れ、それ以外の集団と多様な関係を取り結べる場所のこと。

解説 「その視線から逃れる場所は、それこそトイレの個室くらいしか残されていない」(21・14~15)とあり、「トイレの個室」は「その視線」からの避難所(⇨アジール)である。では、「その視線」とは何か。友達のいないクラスメートを「友達のいない変な人」と烙印を押して排除するような視線である。つまり「同輩集団からの苛烈な友達プレッシャーの視線」というわけである。

「学習活動」「情報を整理するために」の解説

（18ページ）

！もし、自分がラジオ番組のパーソナリティーだったとして、次の文章のような投稿があったら、どのようにコメントしますか。考えてみよう。

！書いたコメントを読み合い、自分が投稿者だったら納得できると思えるものを選んでみよう。

【ねらい】

本単元の教材で共通して取りあげられている話題である「他者」との関係について考えさせるを通して、「若者に友達プレッシャー」「自分を捉え直す」「他者を理解する」の読解や学習活動に向けての構えをつくることをねらいとしている。

【解説】

単元全体のウォーミングアップになっているだけでなく、単元末の「書く」教材である「情報を整理する」と連動した内容にもなっている。したがって、ここで扱っておくことによって、単元全体の学習を駆動していく役割をもった活動である。また、この活動を行うことで、教科書が「三つの『読む』教材＋一つの『書く』教材」が組み合わされた単元によって構成されていることを、学習者とともに実感することができるようになっている。

ウォーミングアップの活動であり、内容的にも交流を行いながら進めるかどうかは判断が必要であると考えられる。したがって、あまり時間を割かず軽い扱いとして教材文に接続するとよいだろう。

学習活動1 「友達プレッシャー」とはどのようなことか。まとめよう。

【ねらい】

タイトルにも用いられている「友達プレッシャー」の概念をつかむことで、文章の主題を的確に捉え、文章の論点を明確にする力をつける。

【解答例】

友達プレッシャーには大きく分けて二つある。一つは、「友達がいないように見られることはあつてはならない」というプレッシャー、もう一つは「空気を読み、友達に合わせなければならぬ」というプレッシャーである。

【解説】

通常、キー概念となる言葉は繰り返し本文中に現れ、定義が説明された後で具体例が提示されて説明されていくが、「友達プレッシャー」は本文に二回（21・4、12）しか現れない。また、「友達プレッシャー」の概念は、「友達プレッシャーとは…」という形で明示されておらず、文脈から読み取ることが必要となる。

本文中で目につくのは「友達がいないように見られるのは耐えられない」という趣旨の表現だ。「友達のいない寂しい人に見られそうでも耐えられない」（19・5）、「友達がいないように見られるのは耐えられない」（20・5、10、21・2）と四回も繰り返される。友達プレッシャーの自身は、「友達はいなければならぬ」というプレッシャーであり、より正確に言えば、実際に友達がいるかどうかではなく、「友達がいないと思われてはならない」方にウエイトがある心性である。そしてその「思われる」ということは、見られる「視線」によってなされることであり、若者はピア・グループ（同輩集団）からの視線をプレッシャーとして感じることがわかる。

ただ、「友達プレッシャー」は、「友達がいないように見られるのではないか」だけでなく、「自分のふるまいが場違いではないか」「何かするときには、その環境整備を担う主な責任主体は大人である。

本課題は、文章の内部論理だけからでは「今、必要なのは、同輩集団以外の多様な関係を取り結ぶ環境を整えていくことではないか」という答えに必然的に導かれるとは言えず、他の解決策が提示されてもおかしくない。また学習者は、文章がはたらきかけている相手が自分たちよりもむしろ大人であることに気づきにくい。主体的に文章を読む習慣がついている学習者ほどその傾向があるため、自分たちでなく大人に環境を整備せよとはたらきかけているこの提言を、正しく読み取ることが難しくなる可能性がある。

しかし、解答例に書いたように、同輩集団の均質性へのプレッシャーが「友達プレッシャー」の正体であるならば、その外に、同輩集団とは異なった関係を結ぶ集団を多様に用意できれば子どもたち若者たちが救われることが期待できるので、その論理を答えればよい、とした。

情報を整理するために

・筆者が行った「人間関係に関する意識調査」（20・3）から、どのようなことが得られたかをまとめ、話し合ってみよう。

【ねらい】

表やグラフでなく文章として説明されている調査結果の叙述を、「情報」として捉え、客観的に処理する意識を養う。

【解答例】

調査概要 筆者・辻大介氏が二〇〇七年十月に、二十〜四十代の男女、約千人を対象に行った意識調査。うち、二十〜二十四歳の若年層の回答。

・「一人で部屋にいたり食事したりするのは耐えられない」 十六％
・「周りから友達がいないように見られるのは耐えられない」 四十三％
より高い年齢層よりも高い割合。

得られたこと 若者たちが恐れているのは、一人でいること自体よりもむしろ

人の目を考慮し「友達と意見が食い違ったら、相手に話を合わせる」「友達メールにはすぐ返信」など、場の空気を読み、友達に合わせなくてはならない、というプレッシャーとしてもはたらいている。

定義されていない中で、「友達プレッシャー」の概念を二通り見つけ、関連づけてまとめることが求められるので、文脈を丁寧に読み解いていくことが求められる学習活動である。同時に、「友達プレッシャー」の意味をつかむことで文章の主題（テーマ）を的確に捉えることができ、文章全体の論点が「友達プレッシャー」の存在とその解決への提言であることが導かれる。

学習活動2 「同輩集団以外の多様な関係を取り結ぶ環境を整えていくことではないか」（22・1）と言えるのはなぜか、説明しよう。

【ねらい】

筆者の提言部分、つまり筆者の言いたいこと（＝主旨、または要旨）をつかみ、その主張へとつながる論理構造を読み取る力をつける。

【解答例】

子どもたちや若者を苦しめる「友達プレッシャー」は、主に学校の同輩集団という限られた完成性に閉じ込められた中で人間関係を作っていかななくてはならないからであり、その閉鎖的な同輩集団以外の場所を用意することで、同輩集団による均質な関係外の、多様な人間関係を築くことができるようになることを期待できるから。

【解説】

語句の解説で述べたように、この提言は、友人との人間関係に関して苛烈な「友達プレッシャー」を感じている子どもや若者たちに対して、個人のコミュニケーションスキルをアップすることではなく、周囲の人間が環境を整えることを提案している。明示こそしていないが、「友達プレッシャー」の生じる場所として学校などでのピア・グループ（同輩集団）を想定しているの

ろ、そこに向けられるピア・グループ（同輩集団）の視線。

・若者たちは人間関係にかなり神経をつかっている。

例）「友達がいまいやうに見られるのが耐えられない」者の傾向

「自分のふるまいが場違いではないか」「何かするときには人の目を考慮」「友達と意見が食い違ったら、相手に話を合わせる」「友達のメールにはすぐ返信」等あり。また、募金やボランティア活動参加に積極的。

・人間関係への敏感な気づかいは、それじたいが悪いことではない。

【解説】

文章中で紹介された調査結果を抜き出して並べるだけでも、情報として改めて読み取れるものとなる。注意すべきは、この文章内では調査の全体像や全ての質問とそれへの回答などが明らかにされず、調査の正式名称も書かれていないので、読者は検証のしようがない。したがって、筆者を信用する・しないという判断を読者は迫られることになる。話し合い学習の中では、結果への感想だけでなく、データの信頼性などについても話し合わせたい。

参考資料

教材研究・授業研究のための文献

・『コミュニケーション論をつかむ』辻大介（二〇一四年・有斐閣）
 ・『友情化する社会——断片化のなかの新たな（つながり）』デボラ・チェンパース、辻大介ほか訳（二〇一五年・岩波書店）

読書指導・発展学習のための文献

・『つながりを煽られる子どもたち——ネット依存といじめ問題を考える』土井隆義（二〇一四年・岩波ブックレット）

論点を整理する

自分を捉え直す

◆平野啓一郎

採録のねらい

●資質・能力の観点から

第一単元「論点を整理するために」の二番めに位置する本教材は、「要旨を把握する」ことを中心に据えて学習を行っていく。

「自分を捉え直す」は、二〇一二年に新書として発刊された『私とは何か―「個人」から「分人」へ』を再構成したものである。「分人」という自己を捉える新しい概念を提唱し、従来の「アイデンティティ」から「分人」へと自己を捉える概念を転換させようとしたもので、「分人」の説明と「アイデンティティ」批判が文章の要点である。

本文は、長さも七ページ弱と教科書掲載の評論としてはやや短めで、全体が予め四つのパートに分かれており、構成もつかみやすい。扱う話題が自己像の把握という抽象的なものだという難しさはあるが、具体例は日常的な話題でわかりやすい。抽象度が高く理解には一定の手順が必要な「分人」という新概念を、読みやすい文体と実感しやすい具体例でわかりやすく述べたものであり、形而上的話題の文章の読解能力を育てるのに、恰好の教材と言える。

学習指導のポイント

- ・ 本文から筆者の主張を捉える。
- ・ キーワードを対比的に捉えることで文章の内容や構成を捉える。

●教材価値などの観点から

本単元の冒頭教材「若者に友達プレッシャー」に続き、現代を生きる若者にとって身近でかつ切実な問題である自意識を見直していく文章である。教材冒頭にあるように、昨今はとかく「コミュニケーション能力」を要求されるようなイメージがつきまといている。そうした大人社会からの画一的な自己像の要求もあってか、OECD（経済協力開発機構）の調査では、先進国における日本の若者たちの自己肯定感の低さが際立つ結果が出ている。

筆者は唯一無二の「アイデンティティ」を求める発想では問題は解決しないとし、自分を多角的に捉える「分人」概念を提唱する。そのことによって、自己が他者との関係で初めて成り立ち、自分の存在には他者の存在を必要とするということが、分人主義の自己肯定の最重要点だと述べる。

ほとんどが思春期のただ中にいる高校生にとって、「自分」は彼らが直面する際の難問の一つである。その問いに光を当て、通常とは異なる発想から考える可能性を示唆する本教材は、ぜひ彼らに読んでほしい文章である。

学習指導のポイント

- ・ 筆者のいう「分人」の内実を読み解く。
- ・ 「分人」主義が自己肯定を高めるといふ主張の根拠を捉える。
- ・ 筆者の主張の意図を捉え、自己の捉え方について考えを深める。

概要

●筆者

平野啓一郎（ひらのけいいちろう）

一九七五（昭和五〇）年。愛知県生まれ。京都大学法学部卒。一九九九年、大学在学中に文芸誌「新潮」に投稿した『日蝕』により第一二〇回芥川賞を受賞。以後、一作ごとに変化する多彩なスタイルの小説を発表し、外国での翻訳も多い。二〇〇四年、文化庁の「文化交流使」としてパリに一年間滞在した。

主な著書に、小説『葬送』、『決壊』、『ドーン』、『空白を満たささい』、『透明な迷宮』、『マチネの終わりに』、『ある男』、『本心』等、エッセイに『本の読み方スロー・リーディングの実践』、『小説の読み方』、『私とは何か「個人」から「分人」へ』、『カッコいい』とは何か』などがある。

・ 平野啓一郎公式サイト … <https://k-hirano.com>

●出典

『私とは何か ―「個人」から「分人」へ』（二〇一二年・講談社現代新書）による。

教科書掲載にあたり、筆者の承諾を得て文章と表記の一部を改めた。

*本教材文は、この新書の本文の五か所から抽出した部分を、順番を入れ替えながらコラージュして構成されたもので、わかりやすくするために、一部の表現を直している。その意味では、本教材は『私とは何か ―「個人」から「分人」へ』のスーパーダイジェスト版だと言える。

●要約

【二〇〇字以内】

私とは何かというアイデンティティの問いは、「本当の自分」があるという幻想に基づくものである。私という存在は、他者との相互作用の中にあり、唯一無二の「個人」ではなく、相手によってさまざまに変わる、複数の分割可能な「分人」である。自分を愛するためには他人の存在が不可欠だという逆説が、分人主義の自己肯定の最も重要な点であり、「本当の自分」の幻想から離れ、現代人の実情にかなう思想を作ってゆくべき時だ。（一九八字）

【二〇〇字以内】

私という存在は、他者との相互作用の中にあり、唯一無二の「個人」ではなく、相手によってさまざまに変わる、複数の分割可能な「分人」である。「本当の自分」の幻想から離れ、現代人の実情にかなう思想を作る時だ。（二〇〇字）

●表現の特色

出典書のとがきの中で「難解な用語を極力排し、わかりやすさを第一に心がけた」とあるように、「分人」は筆者の「造語」であるが、日常的な具体例などを豊富に使い、語りかけるような言葉遣いが用いられることで、わかりやすくなっている。

また出典の欄で述べたように、本教材は出典本の断片を抜いて構成したコラージュとなっている。つまり、「分人」を理解できるよう短く再構成した出典本のダイジェスト版であるが、もともと一文が短く、それらをつなげながら大きなまとまりを構成する文体であるため、不自然さがほとんど感じられない。

学習指導の展開

●学習指導要領の指導事項

知識及び技能

言葉ウ 文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めること。

思考力、判断力、表現力等

読む力 人間、社会、自然などについて、文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて、新たな観点から自分の考えを深めること。

●評価規準

知識・技能

・文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めている。

思考・判断・表現

・人間、社会、自然などについて、文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて、新たな観点から自分の考えを深めている。

主体的に学習に取り組む態度

・文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めたり、人間、社会、自然などについて、文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて、新たな観点から自分の考えを深めたりすることに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。

学習指導案

〇〇高等学校国語科 〇年〇組
授業者 〇〇〇〇

1. 学習活動 論点を整理する方法を学ぶ。
2. 教材名 「自分を捉え直す」・その他の関連資料
3. 学習目標 教材文を読むことを通じて、論点を整理し要旨を把握することができる。

4. 評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めている (言葉ウ)	人間、社会、自然などについて、文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて、新たな観点から自分の考えを深めている。 (読む力)	文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めたり、人間、社会、自然などについて、文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて、新たな観点から自分の考えを深めたりすることに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。
評価の実際	キーワードを手がかりに本文の構造を適切に捉えている。 (記述の点検)	「本当の自分」「分人」「他者」のあり方を適切に捉えた上で本文の要旨をまとめている。 (記述の確認)	本文の内容に対する自分の考えを、話し合いを通じて広げたり深めたりしようとしている。 (行動の分析)

5. 授業の展開 (2時間)

時	学習活動	評価
1	・本文通読。 ・筆者の主張を適切に捉える。	キーワードを手がかりに本文の構造を適切に捉えている。 (知識・技能、記述の点検)
2	・「学習活動」にそって本文の要旨を捉える。 ・キーワードを手がかりに、筆者の主張をまとめる。	「本当の自分」「分人」「他者」のあり方を適切に捉えた上で本文の要旨をまとめている。 (思考・判断・表現、記述の確認) 本文の内容に対する自分の考えを、話し合いを通じて広げたり深めたりしようとしている。 (主体的に学習に取り組む態度、行動の分析)

●学習指導の展開例（2時間扱い）

第2時限		時間
目標		目 標
展開3	<ul style="list-style-type: none"> ・人間、社会、自然などについて、文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて、新たな観点から自分の考えを深めたり、人間、社会、自然などについて、文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて、新たな観点から自分の考えを深めたりすることに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人間、社会、自然などについて、文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて、新たな観点から自分の考えを深めたり、人間、社会、自然などについて、文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて、新たな観点から自分の考えを深めたりすることに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとする。
まとめ		
5	<ul style="list-style-type: none"> 1 前回の学習を振り返り、本時の目標（要旨を把握する）を確認する。 2 第四段を読み、段落の役割を確認する。 3 「情報を整理するために」に取り組み。 4 「学習活動3」に取り組み。 5 学習を振り返る。 	<p>学習活動と指導内容</p> <p>1 本文全体を再度通読し、全体を見直しながら、前回の学習内容を確認する。</p> <p>2 まとめの段落における、筆者の主張について確認する。</p> <p>3 「筆者の指摘する」に注目して、「アイデンティティ」について批判的に書いてあるところを文章全体から拾ってまとめる。三つの言葉については、前時で学習したこと確認しながら筆者の主張（主旨）をまとめる。それぞれノートにまとめてから発表し合ってもよい。</p> <p>4 前時の学習のまとめから唯一無二の「本当の自分」と、人ごと場面ごとになる「分人」とが本来矛盾した概念であることを確認する。ここでの「本当の自分」とは、現実として自分の存在しているあり方であることを理解する。グループなどで話し合わせ、発表して共有するとよい。</p> <p>5 筆者の主張する「分人」について、考えたことをノートなどにメモする。</p>
評価規準		
思考・判断・表現	<ul style="list-style-type: none"> ・人間、社会、自然などについて、文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて、新たな観点から自分の考えを深めたり、人間、社会、自然などについて、文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて、新たな観点から自分の考えを深めたりすることに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人間、社会、自然などについて、文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて、新たな観点から自分の考えを深めたり、人間、社会、自然などについて、文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて、新たな観点から自分の考えを深めたりすることに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。
主体的に学習に取り組む態度		

第1時限		時間
目標		目 標
導入		<ul style="list-style-type: none"> ・文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深める。
展開1		
展開2		
評価規準		
知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> ・文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めている。 	
1	<ul style="list-style-type: none"> 1 「自己」についての概念を想起する。 2 文章を読み、概要を把握する。 3 第一段の筆者の主張を読み取る。 4 「学習活動1」に取り組み。 5 「学習活動2」に取り組み。 6 脚問「その逆説とはどういうことか。」に取り組み。 7 「アイデンティティ」「分人」「本当の自分」の概念を確認する。 	<p>学習活動と指導内容</p> <p>1 軽くよい。「キャラ」「性格」「本当の自分」など、生徒に出させて交流し、本文読解へのレディネスを作る。</p> <p>2 通読し、本文が四段に分かれることを確認する。</p> <p>3 短い段落なので読み取りは容易。ただ、その内容は不明であることを確認し、本文の続きで述べられることを予測する。</p> <p>4 第二段全体から、人間は唯一無二の個人ではなく分人であるという筆者の考えを、「アイデンティティ」、「分人」「本当の自分」等のキーワードから確認し、ノートにまとめる。発表させてもよい。</p> <p>5 「捏造」の意味を確認し、「ここでも」の「ここ」の内容を読み取ったなら、なぜ「本当の自分」の想定が「捏造」なのか、考えさせる。グループで協力しつつ答えさせせてもよい。</p> <p>6 第三段の例から、「他者」と「分人」の具体的内容を読み取る。なぜ他者の存在が自分を愛するために必要か、話し合わせてもよい。</p> <p>7 本日の学習で考えた三つの概念を確認する。</p>
指導上の留意点		

学習の具体と教材の解説

●全体の構成

段落	ページ・行	要 旨
第一段	初め～24・5「…ゆくべき時である。」	私とは何か？ 私とは何かというアイデンティティの問いは、旧態依然とした発想では解決できない。現代人の実情にかなう思想を、一から作ってゆくべき時だ。(序論・話題提示)
第二段	25・1「人間には…」～27・1「…ではないのだ。」	分人という考え方 人は相手によって変化する。唯一無二の個人ではなく複数の「分人」である。さまざまな他者と接しているそれぞれの分人は、長い時間をかけた相手とのコミュニケーションの中で生まれ、関係性の中で変化する。「本当の自分」には実体がないが、「分人」には実体がある。(本論1「分人」の概念提示)
第三段	27・2「しかし、…」～30・5「…重要な点である。」	分人と他者 人が一人で考えることをする時には、さまざまな分人を入れ替わり立ち替わり生きながら考えることをしており、私という存在はつねに他者との相互作用の中にある。誰それという時の自分が好きというように、自分を愛するためには他人の存在が不可欠なのである。(本論2 分人と自己肯定)
第四段	30・6「分人はすべて、…」～終わり	分人と「本当の自分」 分人はすべて「本当の自分」である。「私」とは何か、というアイデンティティの問いは、「本当の自分」があるという幻想に基づくものである。(結論 アイデンティティの問いへの訣別)

〔段落分けについて〕

出典の項にも書いたが、本文は新書の各章に散らばっていた文章を抽出し、順序も入れ替えてつづ再構成されたものであり、当初からひと続きの文章ではないため、やや難解な展開になったことも否めない。

教材に再構成するにあたり、文章の始まりと終わりに「アイデンティティの問題をもってきている」「アイデンティティの問い」の限界性を提示した第

一段、個人の「アイデンティティ」、即ち「本当の自分」を否定し、代わりに「分人」を提示する第二段、「分人」は一人で思考している時も有効であり、自己肯定のための重要な概念であることを示す第三段、そして「アイデンティティの問い」の幻想性を指摘する第四段となっている。話題提示から概念説明、話題の回収、と展開していつていと捉えればよい。

●展開図

<p>I (序論・話題提示)</p> <p>現代社会 II「コミュニケーション能力」圧力 多くの人→アイデンティティの悩み …現代人の実情にかなう思想が必要</p> <p>II (本論1「分人」の概念提示)</p> <p>○「人間にはいくつもの顔がある」ここから肯定を …相手との長いコミュニケーションによってできる。</p> <p>○ 複数の分割可能な「分人」である …関係性の中で変化しうる。</p> <p>○ 相手しだいで自然とさまざまな自分(分人)になる …分人には実体がある</p> <p>× 唯一無二の(分割不可能な)「個人」</p> <p>× どこかに「本当の自分」があると考える × 「本当の自分」と キャラ・仮面・ペルソナ …「本当の自分」は実体がない・幻想である</p> <p>III (本論2 分人と自己肯定)</p> <p>Q 一人で考えている時の自分は誰か？</p> <p>Q 対人関係でないから「本当の自分」？</p> <p>× 一人の時は首尾一貫した自分が考えごとをしている。×本当の自分を捏造</p> <p>A ○ さまざまな分人を入れ替わり立ち替わり生きながら考えている。</p> <p>(例)・直前に会った人との分人のまま考えている。・頭の中の天使と悪魔・脳内会議</p> <p>○ 私という存在は、つねに他者との相互作用の中にしか存在しない</p> <p>(例) Aさんと会っている時の自分は好き Bさんと…、Cさんと…、文学作品を読んで…</p> <p>もし、好きな分人が一つでもあればそれを足がかりに生きていく</p> <p>○ 自分を愛するためには、他者の存在が不可欠 ↑ 分人主義の自己肯定</p> <p>IV (結論 アイデンティティの問いへの訣別)</p> <p>○ 分人はすべて本当の自分</p> <p>× 幻想で実体のない「本当の自分」を探すように苦しんできた。↑それがアイデンティティの問いだ。</p>	<p>●全体の構成</p> <p>学習の具体と教材の解説</p> <p>●全体の構成</p> <p>●全体の構成</p>
---	--

● 語句・文脈の解説

● 第一段（初め〜24・5「：ゆくべき時である。」）の要旨
私とは何か？
私とは何かというアイデンティティの問いは、旧態依然とした発想では解決できない。現代人の実情にかなう思想を、一から作ってゆくべき時だ。

「24ページ」

- 1 コミュニケーション能力 対人的なやり取りにおいて、お互いの意思疎通をスムーズにするための能力のこと。最近では話し言葉上で「コミュ力」と約される場合もある。経団連が二〇一八年に発表した「新卒採用に関するアンケート調査結果」では、新卒採用の際に選考で重視する点として「コミュニケーション能力」が十六年連続で一位となっていた。また帝国データバンクが二〇二二年に行った「企業が求める人材像アンケート」結果でも、コミュニケーション能力が一位となっている。
- 2 (語句) 声高 「こわだか」と読む。声を高くはりあげるさま。声が大きいきさま。
- 2 アイデンティティ 発達心理学者のE・H・エリクソンが提唱した概念。『最新 心理学辞典』(二〇一三年・平凡社)では、「アイデンティティ identity」とは『わたしはわたしである』とか『わたしはわたしらしく生きている』といった確信に近い感覚である。『わたし』という自己の属性には名前、身体的特徴、性格、価値観、社会的役割、身分など多様な側面が含まれるが、アイデンティティの感覚とは単なる自己概念や自己定義ではない」として、エリクソンは「アイデンティティの感覚とは『内的な斉一性 sameness と連続性 continuity を維持しようとする個人の能力と、他者に対する自己の意味の斉一性、連続性』と一致したときに生じる自信」と定義したとある。これは、今日の一般的な概念よりも本来複雑な概念であるが、エリクソンは、人生を八つの段階に分け、そのうち青年期の課題としてアイデンティティの確立をあげた。また、青年期から成人期に至るまでの期間をアイデンティティ確立のための心理社会的猶予期間（モラトリアム）と呼び、ここでは社会の中で自分の適所を見するための自由な役割実験（role experimentation）を行うことが重要であると述べている。筆者のいう「分人」は、「唯一の自己」への対立概念としてあげられているが、エリクソン自身があげた本来の「アイデンティティ」は、むしろ分人概念をも含み（または、経て）形成されていく「わたしはわたし」という確信に近いと言えそうだ。

- 4 (語句) 旧態依然 旧のままで少しも進歩発展のないさま。
- 4 旧態依然とした発想 (こ)ここでは、「私とは何か？ 自分はこれからどう生きていくべきなのか？」という問いに答えるための「発想」を指すと考えられる。ただし、この後の文章が「アイデンティティの問い」(30・11)を否定する方向で進むため、「旧態依然とした態度」とは、そのような「問い」を自分に課してしまう行為そのものを指していると考えられる。
- 4 現代人の実情にかなう思想 本文では、「分人」のあり方に、前近代や近代とは違った「現代人」のあり方に関する言及はない。ただ、具体例や考察している対象が、主に現在の社会とその中間人間であるので、「現代人」と言ってもよい。そもそも「青年期に『自分は誰か』という問いが生まれる」というエリクソンの考えは近代とともに生まれたと言ってよく、身分制度のあった中世以前は、その問い自体が存在し得ない状況であった。その意味で本文は、近代によって措定された「自我」「アイデンティティ」は現代においてはその有効性を失っており、「分人」概念にとって代わられるべきだと主張しているものとも捉えられよう。

〈板書例〉

現代社会⇨「コミュニケーション能力」圧力
↓
多くの人⇨アイデンティティの悩み
⇨現代人の実情にかなう思想が必要

指導の要点
・筆者が問題としている事柄を捉える。

発問・脚問

「24ページ」

問 「旧態依然とした発想」(4)とはどのようなものか。

答 コミュニケーション能力を高めるために、アイデンティティについて悩み、私とは何かを追い求めること。

解説 解答例は第一段をまとめた形にしたが、難しければ断片的な解答でもよい。読んだ範囲では「アイデンティティ」の悩みに答える発想」が解答になるが、本文を読み進めていった時に、それ以外のものが解答になる可能性もまだ捨てきれない。

●第二段(25・1「人間には…」〜27・1「…ではないのだ。」)の要旨
分人という考え方

人は相手によって変化する。唯一無二の個人ではなく複数の「分人」である。さまざまな他者と接しているそれぞれの分人は、長い時間をかけた相手とのコミュニケーションの中で生まれ、関係性の中で変化する。「本当の自分」には実体がないが、「分人」には実体がある。

「25ページ」

2 「どこに行ってもオレはオレ」では、めんどうくさがられるだけ 「どこに行ってもオレはオレ」とは、この文脈の中では「自分のスタイルを譲らず相手に合わせない」というニュアンスで使われている。それは本来の意味での「アイデンティティをもつ」ということとは異なっている。

5 (語句) 唯一無二 ただ一つだけあって二つとないこと(さま)。唯一無二の親友」等の表現で「同じものを他に求めても得られないほど、貴重なこと」の意味で使われることも多い。

5 (分割不可能な) 個人 individual individual は「分離した」という意味の dividual に否定の「を」を付けて、分離できない、これ以上分けられないという意味を起源にもつ言葉。personal が一般的な「個人の」という意味で用いられるに対し、individual は、たくさん人がいる集団の中で一人一人に着目した「個々の」「個人の」「個人的な」という意味になる。

6 (分割可能な) 分人 dividua 前項のように、dividual は分離したという意味の英単語であるが、これを「個人」に代わる概念「分人」として利用したのが、本文の筆者である平野啓一郎である。出典である「私とは何か ―「個人」から「分人」へ」のあとがきの中で筆者は、「分人」という造語は dividual の直訳で、dividual は自身が考え出した造語だと思っていたが、存在する英単語だと知人から教えられたと書いている。

7 (語句) 首尾一貫 「首尾」は、初めと終わり、最初と最後のことで、初めから終わりまで、態度や方針がずっと同じで変わらないこと。意見や主張などをひとすじに貫いて、矛盾がないこと。

8 自我 ego の翻訳。『日本国語大辞典』(小学館)には、「①自分。自分自身。我(われ)。②哲学で、他人や外界と区別された認識、行為の主体であり、しかも体験内容が変化しても同一性を保持して、作用、反応、体験、思考、意欲の働きをする意識の統一体。我(われ)。エゴ。③心理学で、意識の主体。自我意識。精神分析では、人間の行動を調整し現実に適応させるものと規定している。これは幼

児期に自覚されはじめるが、確立するのは青年期とされている。」とあり、かなり複雑な意味をもって。筆者が「自我(＝「本当の自分」として)いるのは②の意味であり、「アイデンティティ」を保つ主体」の意だと考えられる。

9 キャラ 英語のキャラクター(character)を省略した言葉。最近では、コミュニケーションの場におけるふるまい方に関する類型的な役割を意味し、「まじめキャラ」、「へたれキャラ」、「癒やしキャラ」のようにさまざまなものがある。「キャラ」は現代の高校生を含む若者、また最近では若者に限らず大人社会の中でも、職場などで固定的・類型的役割を個人個人に割り振り、その「キャラ」の範囲内で言動することが課される傾向なども出てきており、研究も盛んに行われている。

9 ペルソナ 本当の自我とは別のものとして、便宜的につくりあげられた二つの自己像である。小説や映画においてスパイなどが潜伏先で演じる敵側の人格などを想像すると、わかりやすい。
9 価値の序列をつける以外にない 例えば一人の人間が、父として赤子に対する時、課長として部下に対する時、ビジネス相手と接する時、行きつけのラーメン屋で親しい主人と話す時などで、相手から見た印象はかなり違うことだろう。ある一つの場面での自分を「本当の自分」だとすると、それ以外の時の自分は作られたキャラ、または仮面、ペルソナ等になり、本当の自分からどれくらい離れているかで序列づけられてしまうことになる。

12 誰とも「本当の自分」でコミュニケーションを図ることができなくなる どんな場面でも人はその場に合わせ、相手に合わせて行動するため、不動の確たる「本当の自分」を想定してしまうと、すべてがその場に合わせた仮面でのコミュニケーションということになってしまう。

14 (語句) 眨める 自分より劣った者とみなす。みさげる。さげすむ。軽蔑する。
14 それは、他者と自分とを両方ともに不当に眨める錯覚であり、実感からも遠い 人間はもっと誠実なものだという思いが筆者の根底にあることをうかがわせる。

「26ページ」

2 インタラクティブ interactive 相互に作用するさま。双方向的。対話的。

8 他者と接しているさまざまな分人には実体があるが、「本当の自分」には、実体がない この場合の「実体」とは何か。私たちが誰かと接する時は必ず相手に合わせて自分の対応やあり方を変えている。例えば、乳児に対する時、店員として客に対する時、病院で患者として医師に対する時、家庭で年長いた親や祖父母に対する時では、全く別の人間であるかのように人物像が変化するように見える。そ

発問・脚問

「25ページ」

問 「人間にはいくつもの顔がある(1)とはどういうことか。

答 相手しだいで、自然とさまざまな自分になるということ。

解説 単純に問題部以下の文脈を読めば解答できる問題であるが、「いくつもの顔」が「相手によって変わるさまざまな自分」であるということをおさえておくことに意義がある。

問 「本当の自分(8)とはどのようなものか。

答 唯一無二の、分割不可能な自我。

脚問 「この考え方(11)とは何か。

答 人間は常に首尾一貫した、分けられない存在であり、本当の自分である自我は一つだけで、あとは、表面的に使い分けられたキャラや仮面、ペルソナ等に過ぎないという考え方。

解説 自我は一つだけ、という解答でも概ねよいが、本文の次段落を読むと、自我が一つだけという内容に加え、他は表面的に使い分けられたキャラや仮面、ペルソナ等という内容も付け加えておきたい。

「26ページ」

脚問 「キャラや仮面(1)と「分人」との違いは何か。

答 「キャラや仮面」は本当の自分とは別に表面的に使い分けられる偽りの自分で、いったん決めてしまうと硬直的なものだが、「分人」は相手しだいでさまざまな変わるそれぞれの自分のことで、こちらが一方的にこうだと決めて演じるものではなく、あくまでも相手との相互作用の中で生じ、また、関係性の中で変化し得るものである。

解説 本文の核となる「分人」という言葉の概念を「キャラや仮面」と対比して捉える問題である。重要な部分であるので、丁寧に読み取りたい。また、ここは「キャラや仮面」(26・1)を軸に、教科書25〜26ページにわたって、比較的広い範囲の文脈を追って対比構造を捉える必要がある。読解技術の習得としても重要な問いであるので、丁寧に解かせたい。

問 「「本当の自分」には、実体がない(8)とはどういうことか。

答 人はどんな場合でも相手に合わせた「分人」として現れ、行動するので、「本当の自分」が出現することは実際にはない、ということ。

脚問 「それ(9)とは何か。

答 「本当の自分」

解説 「本当の自分」は幻想に過ぎない、とい

のそれぞれの他者に対するあり方を、筆者は「分人」と呼んでいる。一方、「本当の自分」とは「そうした他者によって変わったりすることのない自分」のことを指すが、そのような「自分」が実際の社会生活の中で出現することはない、というのである。「一人きりの時は？」という当然の疑問には次ページで答えている。

13 だからこそ、どこかに「本当の自分」があるはずだと考えようとする「私たちは、たとえどんな相手であろうと、その人との対人関係の中だけで、自分のすべての可能性を発揮することはできない」のであるから、どの人と接している自分も、「自分のすべてではない」、すなわち「本当の自分ではない」ことになる。つまり、アイデンティティという考え方に縛られていると、自分自身であるもの（本当の自分）は誰との対人関係でも浮かびあがってこないの、どこかに本当の自分があるはずだ、それが相手との関係の制約によって発揮できないだけだ、と考えようとするのである。

「27ページ」

1 顔は、その自分によって演じられ、使い分けられているわけではない。「本当の自分」がどこかに存在し、コミュニケーションの際に相手に合わせて自分の「顔」を演じ分けているのではなく、異なる相手ごとに出てくる「顔」すべてが自分を構成する「分人」であり、「人間には、いくつもの顔がある」(25・1) のが本当なのだということである。

う筆者の主張を確認しておこう。ここでは補助発問で「本当の自分」の概念もおさえておきたい。

問 「どこかに『本当の自分』があるはずだと考えようとする」(13)のはなぜか。

答 私たちは、たとえどんな相手だろうと、その人との対人関係の中だけで、自分のすべての可能性を発揮することはできないから。

解説 自分のすべてを人は現実には発揮できず、常に相手に合わせて一部を出しているだけとも言える。常にこれが自分のすべてではないと感じるので、「本当の自分」をどこかに求めたくなるのである。

「27ページ」

問 「その自分によって演じられ」(1)の、「その自分」とは何か。

答 「本当の自分」

〈板書例〉

- 「人間には、いくつもの顔がある」ここから肯定を
 - ∴ 相手との長いコミュニケーションによってできる。
- 複数の分割可能な「分人」である
 - ∴ 関係性の中で変化しうる。
- 相手しだいで自然とさまざまな自分(分人)になる
 - ∴ 分人には実体がある
- × 唯一無二の(分割不可能な)「個人」
- × どこかに「本当の自分」があると考え
- × 「本当の自分」と キャラ・仮面・ペルソナ
 - ∴ 「本当の自分」は実体がない・幻想である

指導の要点

・筆者が主張する考え方について、その内実を捉える。

●第三段(27・2「しかし、…」～30・5「…重要な点である。」)の要旨
分人と他者

人が一人で考えごとをする時には、さまざまな分人を入れ替わり立ち替わり生きながら考えごとをしており、私という存在はつねに他者との相互作用の中にある。誰それという時の自分が好きというように、自分を愛するためには他人の存在が不可欠なのである。

「27ページ」

2 当然、一つの疑問に突き当たると「一人でいる時の自分こそが、『本当の自分』なのではないか?」(4)という疑問を指す。文章を展開させるための問いの提示で、以降はこの問いを追究する形で論が進んでいく。これまでの展開に鑑みて「まさにこの疑問である」と言えるほどの必然性はないようにも見えるが、「アイデンティティ」と「分人」を対立構造と捉え、「分人」が私たちのあり方であるとする筆者の考えに向かうには、このような問いが必要だったとも考えられる。評論(あるいは思想)とは、「どう問いに答えるか」以上に、「いかに問うか」が内容を決定するのである。

例えば、ここでは「人と会うことに自分は違う自分であり、本当の自分など存在しない」というのなら「なぜ自分は自分のことを『ほかでもない自分』だと思えるのだろうか」という問いや、それに対する「自分が自分であるということの核心、アイデンティティをもっているからだ」という答えが述べられる展開も考えられる。しかし本文では、この方向性は回避され、「一人でいる時の自分こそが、『本当の自分』なのではないか」という問いに向かっていく。

6 私自身、この問題をずっと考えてきた「分人」という発想が、急に思いついたものでなく、「唯一・本当の自分」があるはずだという考え方に違和感を覚え納得できなかった筆者の、実感に基づく思索の跡であることがわかる。

7 例えば、ここからは、一人でいる時の自分も誰と会った後か、あるいは誰の言葉を考えているかによって違う分人であることを、具体例を用いて説明している。学校で「変わり者」として疎まれていくという例、たまたま隣にもっと変わったアーティストが住んでいるという設定など、いかにも筆者らしい叙述である。学習者にとっては「わかりやすい」ものの、実感できるようなできないような例かもしれない。

学習者が悩む理由としては、「変わり者」として疎まれることではなく、疎まれるのを恐れて不本意

な言動を繰り返すことへの自己嫌悪である場合も多く、また「アーティスト」に悩みを相談できる機会などまじらない、というのがリアルな感覚である。ここは説明のための「例」であり、あまり揚げ足をとるべきではないかもしれないが、学習者の中には、こうした例の出し方や論の進め方に「いやらしさ」を嗅ぎ取って嫌う者も出てくるかもしれない。その際には、筆者の論を正確に読むことは別に、そうした批判もしてよいのが読むということであり、なぜそう感じたかを学習者自身に問い続けさせることも大切である。

「28ページ」

2 学校帰りのあなたは、学校での分人のまま、自分の個性について思い悩んでいる。一人の時にも「相手のいない自分だけの時の分人」になるのではなく、誰かという時と同じままの思考になっているのではないかというのである。

4 ポジティブ 肯定的というだけでなく、積極的、実証的などの意味をもつ。反対語は「ネガティブ negative」で、否定的、消極的等の意味がある。

6 さまざまな分人を入れ替わり立ち替わり生きながら考えごとをしているはず「一人でいる時には他人に対して合わせようとしないう首尾一貫した自分がある」のではなく、自己意識は、分人の絶えざる切り替えによって成り立っているというのである。

7 無色透明 色がなく、すきとおっていること。そこから、意見などが偏っていない、あるいは純粋で無垢な状態を指すこともある。ここでは、「誰の影響も被っていない」純粋な「本当の自分」のイメージを表現するために使われている。

8 (語句) 捏造 実際にはありもしない事柄を、事実であるかのようにつくりあげること。でっちあげ。捏造してはならない 誰の影響も受けない自己というものはあり得ず、コミュニケーションの際には相手に合わせるし、一人の時にも相手の影響は残るはずである。純粋な「本当の自分」というものは存在し得ないにもかかわらず、人はどこかに本当の自分があると思いたがるが、それは「本当の自分」を捏造しているだけだということである。

8 アニメなどで アニメやマンガなどで描かれる頭の中で複数の自分が話し合っている状態が、一人である時に考えごとをしている様子を表しているということ。頭の中の「天使」や「悪魔」という分人を通じ、その分人を入れ替えつつ考えごとを繰り返しているとしている。ここでも、その天使や悪魔の話し合いの場を設けている自分や、分人を統合している自我の存在には触れていない。筆者の考えでは、

発問・脚問

「27ページ」

問 「やはりそうではない」(6)とは、どういうことか。

答 分人が対人関係ごとに生じるものなら、一人でいる時の自分こそが「本当の自分」なのではないかということ。

問 「例えば」(7)から始まる例は、どこまでを指すか。

答 「ポジティブに考え直している。」(28・4)まで。

解説 具体例のエピソードが「勇気づけられたように考える。」(27・14)までであり、その考察が解答の箇所まで。それ以降は具体例と考察をふまえて一般化し、「一人でいる時の自分が本当の自分」ではないことを論じている。事例のエピソード・考察・一般化しての考察、の三段階を確認しておきたい。なお、別解としてエピソードの最後

(27・14)までと考えることもできる。

「28ページ」

問 「『本当の自分』という存在を、ここでも捏造してはならない」(8)のはなぜか。

答 私たちは、一人でいる時も首尾一貫した自分が考えごとをしているのではなく、さまざまな分人を入れ替わり立ち替わり生きながら考えごとをしているから。

問 私たちの存在が「他者との相互作用の中になしかなない」(12)とはどういうことか。

答 私たちは、誰かと会っている時はその時その時の分人として生きている。一人でいる時も無色透明な誰の影響も被っていない「本当の自分」が考えているわけではなく、常にさまざまな分人が入れ替わり立ち替わり生きているし、どんな時も他者との関係の中で自分を生きているということ。

解説 自分の存在が他者との相互作用の中しか存在しない、という考え方は現代思想の考え方であり、説明がやや難しい。本文を幅広く丁寧に読んでまとめさせたい。

「29ページ」

問 AさんからCさんまでの例は最後まで言い切っているのに、Dさんの例が中身を書かずに「……」(3)で終わっているのはなぜか。

答 「Dさんと、……」とすることで、以下、AさんからCさんまでの対応の違いを受けて、Dさん、Eさん、Fさん……のように、Dさん以降も一人ずつその人と会っている時の自分に対する評価が異なっていくことを表現している。

解説 表現についての発問である。どのような例をいくつあげるかは、その目的によって異なる。今回のように延々と続くことを

そうした超越的自我ではなく、それぞれの「分人」の集合体が自我であるということになるのだろうか。

10 (語句) 耽る ある一つのことばに夢中になる。熱中する。

12 他者との相互作用の中にしかない こうした捉え方は二十世紀の現代思想によく見られ、言葉の意味は言葉が発した人と受け取った人との間に発生する、といった考え方である。もし宇宙に最初からただ一人の人間しか存在していないなら、「他人」はいないので、他人と区別する意味での自分も存在しない。硬い、柔らかいという対概念も、そもそも相対的な比較物がなければ生まれない。そのような意味で「私」という存在は、他者との相互作用の中にしか存在しない。

13 (語句) 快活 きびきびしていて、元気なこと(さま)。

14 まんざらでもない、「まったくよくないというわけではない」「必ずしも嫌ではない」の意で。ある程度の満足を表現する言葉。

「29ページ」

8 もし、好きな分人が一つでも二つでもあれば、そこを足場に生きていけばいい この直前に「人は、なかなか、自分の全部が好きだとは言えない」とあり、ここに筆者の問題意識がそっと提示されている。自我や自意識のあり方を考察する場合に、「分人」を「アイデンティティ」と対立するものだとすると、論理的に無理が生じる。アイデンティティとは「自我(自己)の同一性」であって、この文章で筆者が否定している「本当の自分」とはそもそも異なるからだ。分人は、「自分を好きになれず」「本当の自分」の観念に脅されて苦しむ人を救うための、思考ツールなのである。

12 ボードレール 代表詩集であり退廃の美を歌った『悪の華』は、六編が公序良俗に反するとして罰金刑を受けるなど大衆的な話題をさらっただけでなく、ランボー、ヴェルレーヌ、マラルメなど、後の詩人に多大な影響を与えた。評論家としても活躍し、「モデルニテ」(近代性・現代性の意)の概念を提示し、十九世紀フランス芸術の重要なキーワードの一つともなった。

12 森鷗外 夏目漱石らと並び、近代日本文学を代表する小説家。本名、森林太郎。西欧詩の翻訳、文芸評論、浪漫的小説、歴史小説など、多彩な文学活動を展開した。また、陸軍軍医としても陸軍軍医総監を務めるなどした。主な作品に「舞姫」、「キタ・セクスアリス」、「青年」、「雁」、「山椒大夫」、「阿部一族」、「高瀬舟」などがある。ちなみに、一九七五年生まれの筆者が読書体験の代表としてボードレールと鷗外をあげていることは、かなり特徴的である。筆者の中・高校生時代には「高校生ならば日本近代文学の名作はひととおり読了しておくべき」といった教養主義の常識は過去のものとなって

いるはずなので、当時としても珍しい、かなりの読書家であったと思われる。

「30ページ」

1 自分を肯定するための入口 ボードレールの詩や森鷗外の小説を読むことで得た広い世界とのつながりの感覚が、周りと違う「変わり者」としての自分を肯定するきっかけになったということ。

4 自分を愛するためには、他者の存在が不可欠 誰かという時の自分の分人を好きになれれば、それは自分のすべてを全否定することではなくなる。その人という時の自分が好きだという友達が三人いれば、好きな自分の分人が三つあることになる。このようにして自分を愛していける、というのが筆者の主張である。

5 逆説 真理(結論)と反対なことを言っているようだが、実は一種の真理(結論と同じこと)を言い表している説。例えば「負けるが勝ち」など。ここでは、「自分を愛するためには、他者の存在が不可欠だということ」が逆説である。

5 分人主義の自己肯定の最も重要な点 「分人主義」という言葉が初めて出てくるが、唯一の本当の自分を「アイデンティティ」と考えて探し求めるのをやめ、対人関係の中で現に生じている自分の複数の人格をそれぞれ「分人」と捉えてその存在を認め、自分をその総体として捉えようとする「考え方の姿勢」のことである。「分人」という捉え方をする中で自己と他者とを結びつけ、その関係の中に自己を捉えることが可能となる。ここから、先述のように、他者の存在を通して自分を好きになれる可能性が開けるのである。

示す場合、三つ程度をあげ、以降は類似の内容が続くと示唆するにとどめる、という例の出し方について意識させたい。

問 「そこを足場に生きて行けばいい」(9)とはどういうことか。

答 自分の全部が好きになれなくても、好きな分人が一つでも二つでもあれば自己肯定感もてるはずだから、それを支えにしていけばいいという意味。

解説 日本の若者の自己肯定感の低さは内閣府の「子ども・若者白書」等でも指摘されているが、筆者はそれが「本当の自分」という呪縛によるもので、そこから解放するために「分人」という概念を提唱しているのである。

問 「それは、生きた人間でなくてもかまわない」(11)のはなぜか。

答 詩や小説などを読むことでも人生について深く考えられたり、自分の世界を広げたりして自分を肯定する糸口になるから。

解説 本を読むなどの経験も他者との関係性と捉え、そこにも分人の発生を認めている。実際に本や音楽、絵などの芸術作品に影響を受けて生き方が変わる例は多くあるので、高校生にも十分納得のいくものだろう。「生きた人間以外でも、それに応じて分人は発生するから」などでもよい。

「30ページ」

脚問 「その逆説」(5)とはどういうことか。

答 自分を愛するために、自分ではない他者の存在がどうしても必要であるということ。

解説 「逆説」の意味はページ上段の「語句・文脈の解説」を参照。人が自分を愛するためには、誰かという時の分人(自分)が好きだというように、必ず他者を経由することが必要だということである。

〈板書例〉

- Q 一人で考えている時の自分は誰か？
- Q 対人関係でないから「本当の自分」？
- × 一人の時は首尾一貫した自分が考えごとをしている。×本当の自分を捏造
- A ○ ささまざまな分人を入れ替わり立ち替わり生きながら考えている。
- (例) ・直前に会った人との分人のまま考えている。・頭の中の天使と悪魔・脳内会議
- 私という存在は、つねに他者との相互作用の中にしか存在しない
- (例) Aさんと会っている時の自分は好き Bさんと…、Cさんと…、文学作品を読んで…
- もし、好きな分人が一つでもあればそれを足がかりに生きていく
- 自分を愛するためには、他者の存在が不可欠 ↑ 分人主義の自己肯定

指導の要点

・筆者が主張する考え方について、その根拠を捉える。

発問・脚問

〔30ページ〕

問 「分人はすべて、『本当の自分』である」(6)とはどういうことか。

答 会う人ごとに入れ替わる「分人」は、仮面でもキャラでもなく、その人という時の「自分」であり、人はさまざまな「分人」が入れ替わり立ち替わりながら生きていくものであるから、すべての「分人」は偽りの自分ではなく「本当の自分」である。

解説 筆者の想定する「アイデンティティの問い」における「本当の自分」とは、唯一無二のどんな時でも変わらない確たる自己像を指す。一方、筆者の主張する「分人」は、会う人ごとに入れ替わり、自己のすべてではない。Aさんと会う時の「分人」とBさんと会う時の「分人」がかなり違う人間であることも十分あり得るが、そういう個々の「分人」がすべて「本当の自分」として存在する。それらの「分人」の総体が全体としての自分ということになる。

問 「それ(行)とは何か。

答 実際には存在しないにもかかわらず、どんな時でも変わらない唯一無二の「本当の自分」がどこかにあり、それを探さなければならぬとプレッシャーをかけられていること。

●第四段(30・6「分人はすべて、…」(終わり)の要旨
分人と「本当の自分」

分人はすべて「本当の自分」である。「私」とは何か、というアイデンティティの問いは、「本当の自分」があるという幻想に基づくものである。

〔30ページ〕

6 分人はすべて、「本当の自分」「分人」は相手によって入れ替わり、その度ごとに現れるものであるが、それは仮面やペルソナではなく、すべて私を構成する「本当の自分」だということである。

9 嘘す その気になるように仕向ける。特に、おだてて悪いほうへ誘い入れる。早くそうするように勧める。せきたてる。

11 それか、「私」とは何か、という、アイデンティティの問いである 私は何者なのか、私とは誰なのか、私とは何か、という問いは、多くの人にとって「唯一無二の『本当の自分』という幻想」となっており、それを見つけないといけない、または、その本当の自分で生きなければならぬというプレッシャーとなり、私たちを苦しめてきたというのである。筆者によれば「本当の自分」は「どこにも実体がないにもかかわらず、それを知り、それを探さなければならぬ」と四六時中囁かされている」という。言わば、「唯一無二の『本当の自分』の「呪い」からの解放が筆者の狙いであった。

〈板書例〉

- 分人はすべて本当の自分
- × 幻想で実体のない「本当の自分」を探すように苦しんできた。
- ⇒ それがアイデンティティの問いだ。

指導の要点

・筆者の主張の意図を捉える。

「学習活動」「情報を整理するために」の解説

学習活動1 筆者が「人間には、いくつもの顔がある。——私たちは、このことをまず肯定しよう」(25・1)と述べるのはなぜか、説明しよう。

【ねらい】

要旨を把握するためには、中心的概念をつかまなければならない。本文ではそれが「分人」であるが、その内容把握のために、まず前提となる私たちの自我のあり方について述べている。その前提を丁寧に読み取っていく学習課題である。まず、日常的な自己のあり方を筆者がどう捉えているかを読み解く。

【解答例】

私たちは、相手しだいで、自然とさまざまな自分になり、どこへ行っても全く変わらない自分ではないから。

【解説】

「なぜか」という問いは、さまざまな次元で答えることができる。解答例は「筆者のいう『いくつもの顔がある』とはどういうことか」を説明しているが、「筆者が……述べるのはなぜか」に注目するならば、筆者のこの叙述の狙いを答えることも解答としてふさわしい。その場合、「このことをまず肯定しよう」から、以下のようにも答えられる。

・筆者の提唱する分人という考え方の基本となっているのが、現実の私たちは唯一無二の個人ではなく、相手によって変わる複数の分人から成っているということだから。

・筆者の提唱する分人の考え方を述べていくには、まず、私たちは相手によってさまざまな自分になるという事実を読者と共有しておく必要

があったから。

以上の点をふまえた上で、解答例では最も文脈に即し単純な答えを掲げた。

学習活動2 『本当の自分』という存在を、ここでも捏造してはならない(28・8)のはなぜか、説明しよう。

【ねらい】

筆者の主張の中心概念である「分人」の対概念となる「本当の自分」を検証し、「本当の自分」は実は存在しないと筆者が主張していることをつかむ。

【解答例】

一人の時は誰も会っていないのだから首尾一貫して本当の自分が考えていると思いがちだが、実際は無色透明な本当の自分などはなく、さまざまな分人が入れ替わり立ち替わり生きながら考えごとをしているから。

【解説】

「学習活動1」の「なぜか」はさまざまな次元での答えが可能で、答えに迷うこともあっただろうが、「学習活動2」の「なぜか」は「捏造してはならない」と筆者が禁止用語を用いた意味を問うているので、比較的狭い範囲で考えられる。

「本当の自分」を捏造してはならないのは、一人で考えごとをしている時であっても「本当の自分」など存在していない、と筆者が考えるからである。

では考えているのは誰なのか。筆者によると、さまざまな分人を入れ替わり立ち替わり生きながら考えごとをしているという。問われている箇所の前にも、「学校帰りのあなた」と「アーティストの家から戻ってきたあなた」のようにそれぞれ異なる分人の存在を筆者は指摘し、一人である時でもアニメの脳内会議の場面的ように、さまざまな分人を通じて考えごとにと耽っていると主張する。

つまり、さまざまな分人の入れ替わる集合体が自分であって、それを認識

すれば「唯一」の「本当の自分」というありもしない自画像を捏造して幻の本当の自分探しなどしなくてよい、というのである。

学習活動3 「分人はすべて、『本当の自分』である」(30・6)とはどういうことか、まとめよう。

【ねらい】

筆者の主張の中心概念である「分人」がどのようなものかを、本文の展開に即してまとめめることを通して、要旨の把握の仕方をも身につけ、文章展開を意識する。

【解答例】

「私」という存在は、孤独に存在しているのではなく、必ず誰か他者との相互作用の中にある。私は他者との相互作用の中にしか存在しない。

「私」は当然相手との相互作用の中でさまざまな顔を見せる。どんな相手にも全く自分を変えないことはあり得ない。

相手との関係性でその都度現れる自分を「分人」と呼ぶなら、「私」は出会う他者ごとに入れ替わり、存在している。そして一人の時でも、実はさまざまな「分人」が切り替わりながら「私」は存在している。

唯一無二の「本当の自分」は存在せず、存在するのが相手によってその都度切り替わる「分人」としての私であるなら、分人こそが実際に存在する「本当の自分」であると言える。

【解説】

「まとめよう」という課題なので、解答例は四段階に論理をまとめ、長めの文章としてみた。授業によってはこれを表形式でまとめてもよいだろう。また、解答例の最終段落のみを解答として示してもよい。

ポイントは「『本当の自分』など存在しない」ことを強調してきた本文が、「分人はすべて、『本当の自分』である」と、「本当の自分」という概念を復活

させている矛盾をどう説明するかである。本文の前半で否定してきた「本当の自分」は「唯一無二」の不可分な自分であり、そうした単一の強固な自分など存在しないと筆者は述べている。存在するのは不可分な自分ではなく「分けることができる」「分人」であり、それは相手によってそれぞれ現れるものであった。相手ごとに「分人」は異なり、同じ相手でも時間とともに関係も変化し、分人も変わる。筆者の狙いは、自我の多面性の承認であり、その現れとしての「分人」を「かりそめ／ニセの自分」としてではなく、それぞれまぎれもない「本当の自分」(の、ある現れ)であると認めることにあった。

情報を整理するために

・「本当の自分」について、従来のアイデンティティと筆者の指摘するアイデンティティとに分けて整理してみよう。

【ねらい】

文章の主旨を的確に捉え、表現することができるようになるために、「アイデンティティ」などのキーワードの概念をつかみながら、論の展開を整理し、筆者の主張を整理、理解する。

【解答例】

従来のアイデンティティ

・唯一無二の「分割不可能な」個人(individual)。
・首尾一貫した、「本当の自分」

筆者の指摘するアイデンティティ

・唯一無二の分けられない存在だとすると現に相手に応じているような顔があるという現実と矛盾する。
・「本当の自分」(アイデンティティ)には、実体がない。「本当の自分」は幻想に過ぎない。

・唯一無二の「本当の自分」という幻想にとらわれてきたせいで、非常の多

くの苦しみとプレッシャーを受けてきた。それが「私とは何か」というアイデンティティの問いである。

【解説】

本文中から筆者がアイデンティティについて述べている所を見つけ、概念の説明としているところと、批判している(筆者の指摘)ところとに分けて整理していく。ただし、語句の解説の部分にも書いたように、この文章の「アイデンティティ」概念の扱いは、心理学的に正しいとはいいがたい点もある。

情報を整理するために

・次の言葉を手がかりに筆者の主張をまとめてみよう。

「本当の自分」

「分人」

「他者」

【ねらい】

文章の主旨を的確に捉え、表現することができるようになるために、「本当の自分」、「分人」、「他者」などのキーワードの概念をつかみながら、論の展開を整理し、筆者の主張を整理、理解する。

【解答例】

私という存在は常に他者との相互作用の中にあり、唯一無二の「個人」ではなく、相手によってさまざまに変わる複数の分割可能な「分人」である。「本当の自分」の幻想から離れ、現代人の実情にかなう思想を作る時だ。

(二〇〇字)

【解説】

三つのキーワードを入れつつ、要旨をまとめるものである。最も大切な三単語が手がかりとなっているので、本文全体からそれらキーワードの意味と相互の関係を読み取っていくことになる。

参考資料

教材研究・授業研究のための文献

・『カッコいいとは何か』平野啓一郎(二〇一九年・講談社現代新書)

平野啓一郎は、狭義の哲学者ではないし「批評家」でもない。しかし、この『カッコいいとは何か』では、「かつこいい」が誕生した年代を探り、そこから現在までの「カッコいい」の変遷、「カッコいい」とは何かについての多角的な考察を、新書版で四七〇ページあまりの分量で書きあげている。本書は「カッコいい」が一九六〇年代以降の「アイデンティティ」を巡る問いに大きな穴をあけているという問題意識に始まり、「かつこいい」という価値観と無関係に生きている人間は、今日、ひとりもない」という筆者の主張に従って、最終章では「カッコいい」のこれからが論じられる。

筆者の考察は、多角的でふんだんな具体例を駆使し、読みやすくわかりやすく実証的でもある。筆者がどのように思考を表現するかを知るには最もよい本と言えるかもしれない。「分人」概念も登場し、一貫した彼の人間観を知ることができる。

・『じぶん・この不思議な存在』鷺田清一(一九九六年・講談社現代新書)

平野啓一郎の主張に沿えば、「アイデンティティ」とは、現在の市場(「教育市場」、「家庭市場」を含む)において流通している「唯一無二の本当の自分」という強迫観念だということになる。一方で、「アイデンティティ」というものをもっと根源的に、かつわかりやすく説いた本を探るのであれば、この本がおすすりである。

自分の中にある部分的な自分をいくら集めても、その総体を自分だと考えても「これがじぶんというものの、かけがえのない不二の存在を証しているなどというには、あまりにも貧弱な論理であるのは、だれもが直観的に気づいている。」と鷺田はいう。一八〇ページ程度の本だが、「臨床哲学」

この要旨のまとめは少し難しい。筆者の主張は「アイデンティティ」、「本当の自分」の幻想から脱却し「分人」概念による新しい思想をつくることなので、解答例のようにまとめた。これは一〇〇字の要約と同じ分量となっている。

のスタンスから、生きる実感に基づいて「アイデンティティ」≡私とはだれか」にやわらかく、しかし鋭く迫っている。

読書指導・発展学習のための文献

・『私とは何か——「個人」から「分人」へ』平野啓一郎(二〇二二年・講談社現代新書)

教材本文の典拠であるが、一九〇ページほどと薄めで文章も読みやすく、読書経験の薄い高校生でも読み通せる内容と分量である。教材本文がこの本のカラーージュによる要約に近いものなので、新書を通して読んだほうがわかりやすい部分もあるだろう。

自我の確立に悩み「自分は誰だ」と問い続ける若者(高校生)たちに、「たった一つの本当の自分など存在しない。対人関係ごとに見せる複数の顔がすべて『本当の自分』だ」と語りかける(むしろ、「叫ぶ」に近い)筆者の言葉は、一種の安堵と希望を与えてくれるだろう。特に、インターネットの中と外、店員と客、「生徒」と「消費者」、「家族」と「自分一人」などの著しい乖離が進む高度消費社会、超監視社会の中に思春期を送る今の若者には、バラバラな断片と化した「自分」をそれぞれ分人として回収できるといふ考え方は、救いともなるはずだ。

しかし、それだけでは問題は解決しない。バラバラな分人をバラバラのまま接着しても、それはモザイクでしかなく、その「空虚」の苦しさこそが現在の若者や中・高校生が宙吊りにされている状況なのである。平野啓一郎の「分人」思想の「やさしさ」の本質、俗的通説に呑み込まれない「かつこよさ」にひたったら、次は鷺田清一へと進んでいきたい。

論点を整理する

他者を理解する

◆鷺田清一

採録のねらい

本教材は、「論点を整理するために」として設定された単元において、「内容や構成、論理の展開を捉える」ことを主眼として配置されたものである。正味七ページの評論は決して長いものではないが、昨今の学習者にとって、長さを感じる内容かもしれない。一行空きによって前後に分かれる構造になっており、それぞれのパートの内容を把握することが内容や構成、論理の展開をつかむやすくなるだろう。

最初と最後に印象的な言葉を配して、謎を解くかのような呼応関係になっており、読者を文章に誘う手法として巧みである。前半の「全人的理解」要請の背景への理解と根源的な「全人的理解」批判、後半の「他者への理解」のあり方への考察とを、具体例と論とを分けつつ、例の補強する論のあり方を吟味しつつ読み深めていきたい。

本教材の「他者」概念の把握や「理解」を動的過程と捉える思考は、学習者には斬新であり（学校教育でも、えてして「結果」としての理解を評価される）ことが多いためであろう。理解のためには丁寧な文章をたどり、本文以外の例も考えながら、徐々に理解を深めていくことが肝要である。そのことが学習者たちの思考の幅を広げてくれるはずである。

学習指導のポイント

・一定の長さの文章を、全体の話題と主旨を見すえて文章の構成や論理の流れをつかみながら、具体例と思考の関係をつなぎつつ読み取る。

テーマの観点から

持続可能性や多様性の重要さが叫ばれ、さまざまな分野でのマイノリティへの理解の大切さが言われる今日でも、相手への理解を、自分達の文脈の中に相手の主張を落とし込み、「共感」や「同情」によって相手を自分たちの世界観に包含(Inclusion)してしまう思考は日常的にあふれている。その中で、自分とは違う「他者」を、わからないままであっても理解しようとし続ける相手として、その存在を丸ごと排除せずに「他者性として認める」ことの重要性は、ますます増している。

本単元では一貫して「他者」をテーマに文章を読んできたが、他者を知ることはその知ろうとする行為を通して「自己」を知ることであり、自己を育てていくことでもある。個性や多様性が華々しくもあげられる一方、個性をもつことが強要されるような風潮もある現代で、学習者が、安直な結論や処方箋に飛びつくのではなく、勇気をもって根源的な思考をしつつ自分と他者とを認め愛してゆけるよう、丁寧な指導を心がけたい。

学習指導のポイント

筆者の主張とおして他者の存在に気づき、そのあり方を考え続けていける能力を育てる。

概要

●筆者

鷺田清一（わしだきよかず）

哲学者。一九四九（昭和二四）年。京都府の生まれ。関西大学文学部教授、大阪大学大学院文学研究科教授、同研究科長・文学部長、同大学理事・副学長を経て、大阪大学総長。のちに大谷大学教授、京都市立芸術大学学長を歴任。大阪大学および京都市立芸術大学の名誉教授。

専門は哲学、倫理学、現象学など、幅広い。「臨床哲学」の中心的研究・推進者である。哲学の生まれる人と人の対話、人が人を理解すること、ケアすること、人の話を「聴く」という力などに注目した生きる現場という意味での「臨床哲学」は、鷺田氏が提唱し、確立した概念と言ってよい。

著者は「モードの迷宮」、「聴く」ことの力、「じぶん・この不思議な存在」、「メルローポンティ 可逆性」ほか多数。現在、日本で最も多く読まれる哲学者の一人である。

ファッションについても研究しており、三宅一生、山本耀司、コシノヒロコなど、ファッションデザイナーとも親交が深い。

●出典

河合隼雄との共著『臨床とことば』（二〇一〇年・朝日文庫）より、鷺田清一の署名による「語り」と「声」の「語りについて」によった。教科書掲載にあたり、筆者の承諾を得て文章と表記の一部を改めた。

*二人の対談とそれぞれの文章からなる、「臨床心理学と臨床哲学」についての本で、特に「聴く」という行為の意味について、心理学と哲学の双方から、実際の人々の心や存在に寄り添いながら考え、語り、叙述したものである。

●要約

【二〇〇字以内】

ケアにおいて「全人的理解」が要請されるが、人は自分のことも自分では「全体」として理解できなく、人を全人的に理解することは不可能である。理解するということは、感情の一致、意見の一致をみることでなく、自分には了解しがない思いを、わからないままに身をさらし合う果てしないプロセスである。自分のことをわかろうと相手に関心をもち続けていることを確認できたとき、人は「わかってもらえた」と感じるのだ。（一九六字）

【二〇〇字以内】

人を全人的に理解することは不可能だ。理解とは感情や意見の一致をみることではなく、相手をわかろうとして自分をさらけ出すプロセスである。相手を受け入れようと時間をかけ、相手に寄り添うことは理解である。（九八字）

●表現の特色

1 具体と抽象の往来

「他者への理解とはどういうことか」というかなり抽象的な話題であるが、できる限り具体的に述べようとしており、具体例に即していたり、具体的な場面を想定して述べていたり、具体と抽象（形而上と形而下）を行き来し、融合する思考を試みているといえる。

2 反語的、比喩的表現の多用

感覚的な認識に関わる内容ということもあり、論理で押し切るのではなく反語的表現や比喩的表現を多用し、微妙なニュアンスを大切に論じている。なお、論理的にのみまとめようとすると難しい部分があるので注意したい。

学習指導の展開

●学習指導要領の指導事項

知識及び技能

情報ア 主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めること。

思考力、判断力、表現力等

読むキ 設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりすること。

◆言語活動例

読むウ 学術的な学習の基礎に関する事柄について書かれた短い論文を読み、自分の考えを論述したり発表したりする活動。

●評価規準

知識・技能

・主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めている。

思考・判断・表現

・設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりしている。

主体的に学習に取り組む態度

・主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めたり、設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりすることに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。

学習指導案

〇〇高等学校国語科 〇年〇組
授業者 〇〇〇〇

1. 学習活動 内容や構成・論理の展開を捉える。
2. 教材名 「他者を理解する」・その他の関連資料
3. 学習目標 本文に用いられている情報の関係性に注意して理解し、自分の考えを広げたり深めたりできる。

4. 評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めている。 (情報ア)	設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりしている。 (読むキ)	主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めたり、設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりすることに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。
評価の実際	筆者の主張について引用などを含む文脈に則して理解している。 (記述の確認)	「他者」「共振」「理解」などの用語を、必要に応じて調べながら、文章に即して理解している。 (記述の確認)	本文中の情報と筆者の主張との関係をまとめようとしている。 (記述の確認)

5. 授業の展開 (3時間)

時	学習活動	評価
1	・本文の通読、および前半の読解を行い、「学習活動1」を行う。	筆者の主張について引用などを含む文脈に則して理解している。 (知識・技能、記述の確認)
2	・本文の後半の読解を行い、「学習活動2・3」を行う。	「他者」「共振」「理解」などの用語を、必要に応じて調べながら、文章に即して理解している。 (思考・判断・表現、記述の確認)
3	・本文全体を読み返して、全体の構成や論理の展開を押さえ、「情報を整理するために」にトライする。	本文中の情報と筆者の主張との関係をまとめようとしている。 (主体的に学習に取り組む態度、記述の確認)

●学習指導案例

●学習指導の展開例（3時間扱い）

時間	目標	展開	評価規準	
第1時限	<ul style="list-style-type: none"> 主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深める。 設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりする。 	<p>導入</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 題名から「他者を理解する」とはどのようなことを考え、発表しあう。 2 本文を通読し、初発の感想を交流する。 3 本文のおおまかな構成をつかむ。 <p>展開1</p> <ol style="list-style-type: none"> 4 前半部分を再読し、前半部全体の話題をつかむ。 5 「全人的理解」についての筆者の意見を確認する。 6 「学習活動1」に取り組む。 7 「全人的理解」が要請された理由を読み取る。 8 「全人的理解」が不可能である理由を読み取る。 9 前半の要旨をまとめる。 	<p>学習活動と指導内容</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 「他者の理解」についての既存のイメージを交流し、筆者の認識と比較するベースをつくる。 2 本文を通読して自分のイメージと筆者の考えとを比較し、感想を述べる。 3 本文が前半と後半に分かれていることを確認する。それぞれに小見出しをつけさせてもよい。 4 「キーワード」を探させ「全人的理解」を導く。 5 筆者の「全人的理解」について、肯定と否定どちらの立場かを話し合わせる。 6 筆者は「感情の共振」と「他者の理解」の違いをどう述べているかを読み取り、「同一化」は「他者」が消されていることに気づく。 7 看護の現場での営みと反省から「全人的理解」が要請されたことを読み取る。 8 脚問「『全人的』というのは過酷な要請である」のはなぜか」に取り組み、筆者の主張を読み取る。 9 ノートなどにまとめさせる。 	<p>指導上の留意点</p>

時間	目標	展開	評価規準	
第2時限	<ul style="list-style-type: none"> 主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深める。 設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりする。 	<p>展開2</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 前時の学習を振り返る。 2 後半部分を通読し、話題を確認する。 3 「学習活動2」に取り組む。 4 「学習活動3」に取り組む。 5 筆者の考える「理解」とはどういうのかをまとめる。 	<p>学習活動と指導内容</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 前半の要旨を発表し合い、「共振」と「理解」の違い、「全人的理解」への筆者の批判的立場を確認する。 2 筆者の考える「理解」についての学習であることを確認する。 3 まず「学習活動1」での「共振」と「理解」の違いを押さえ、次に教科書37ページの読解から、「受け取ってくれたという感触」が大切だということを理解する。その後、脚問「『他者』としての『他者』とは…」に取り組み、筆者の他者の存在に対する考えを読み取る。 4 教科書38ページの脚問「なぜ『不思議』なのか」に取り組み、理解における非対称性を押さえ、「わからないままに身をさらし合う果てのないプロセス」とは何かを確認した後、そのことがなぜ「理解する」ことになるのかを後半全体から読み取る。 5 筆者の考える「理解」をノートにまとめる。 	<p>指導上の留意点</p>

評価規準

知識・技能

・主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めている。

思考・判断・表現

・設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりしている。

時間	目 標	展開	学習活動と指導内容	指導上の留意点
第3 時限	・主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めたり、設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりすることにに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとする。	展開3	1 「情報を整理するために」に取り組み。 2 本文全体を読み直し、文章の構成を考える。 3 筆者の論の進め方をまとめる。 4 本文全体を要約し、自分の感想を文章化することを通じて、学習を振り返る。	1 以下の手順で取り組む。 ① 「私には…」の言葉が文章の最初と最終段落にあり、サンドイッチ構造になっていることを確認する。 ② 最初の「『私には…』」は、筆者の評価のみが書かれて理由が述べられていないこと、最後の「『私には…』」は、その言葉がどんな場面で使われ、筆者が「好きだ」と最初に言った理由が明かされる構造になっていることを確認する。 ③ 「痛みがわからない」ながら、わかろうとしてそばに寄り添い続けることこそが「理解」であることが、二つの言葉の間に挟まれた本文で書かれたことだと確認する。 2 本文の前後半を、内容からいくつかの段落に分け、(それぞれ三つと指定してもよい) その分けた理由を発表し合う。 3 「他者への理解」を論じるために、具体的な言葉から入り、「理解」を求める「全人的理解」への批判を展開し、その上で自説を具体的場面を添えて考察していることに気づく。 4 二〇〇字程度に要約した上で、「他者を理解することについて、筆者の意見をふまえて自分の考えを文章(八〇〇字程度)に書く。
	評価規準	主体的に学習に取り組む態度	・主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めたり、設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりすることにに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。	

学習の具体と教材の解説

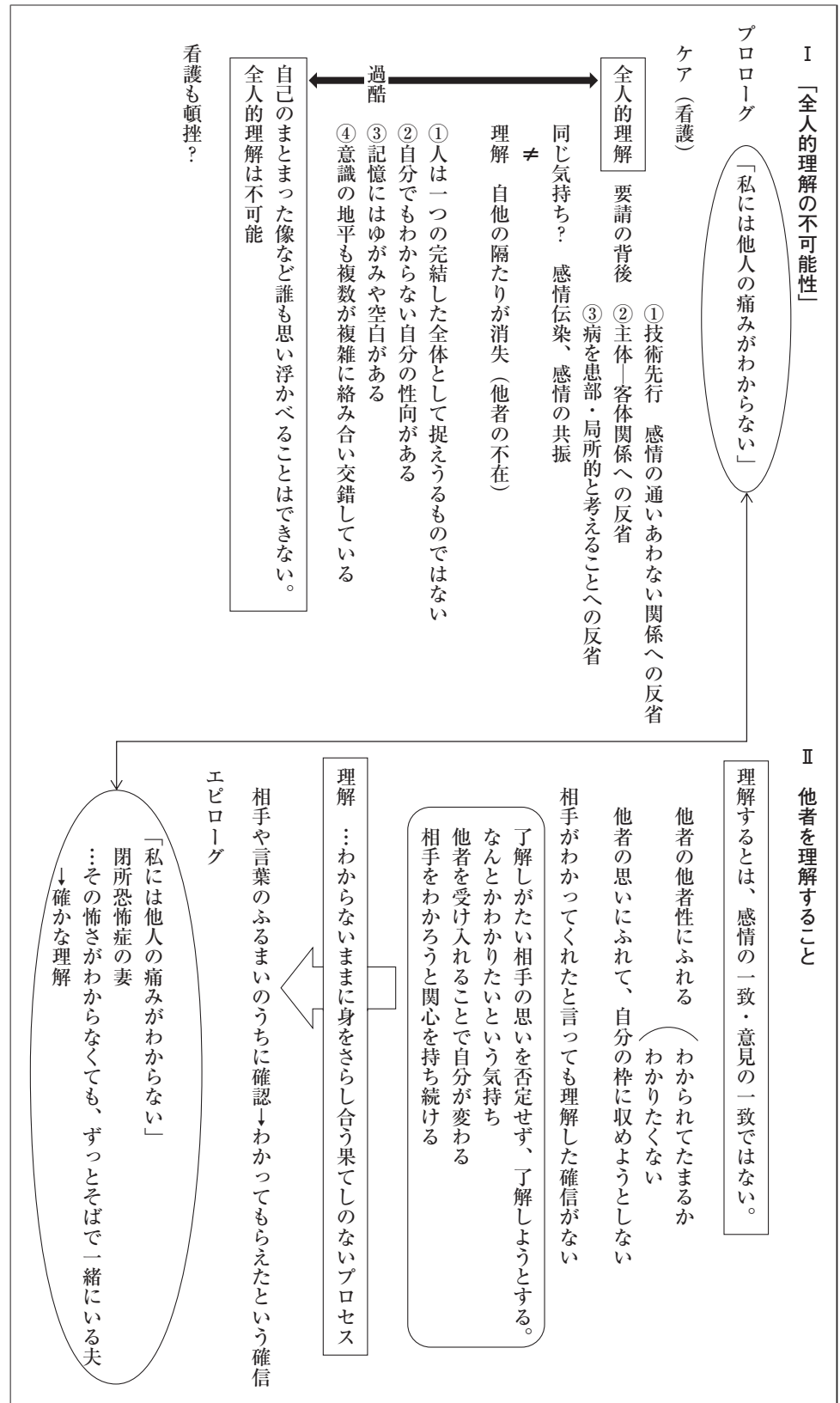
●全体の構成

段落	ページ・行	要 旨
第一段	初め〜33・2「…発言が好きだ。」	プロローグ 「私には他人の痛みがわからない」という率直な発言が好きだ。
第二段	33・3「ケアについて…」〜34・5「…されているからだ。」	「全人的理解」とは ケアにおいて「全人的理解」が要請されるが、それは他人と同一の気持ちになるということではない。
第三段	34・6「それに…」〜36・7「…ほんとうに。」	「全人的理解」の不可能性 人は一個の全体として捉えられるほどまとまった存在ではない。人は自分のことも自分では「全体」として理解できない。それなのに他者についてその全体を知ることなどできるだろうか。
第四段	36・8「裁判所で…」〜38・6「…とても不思議だ。」	理解が成り立つために大切なこと 理解するとは、感情の一致、意見の一致をみることでない。自分には了解しがたい思いを、否定するのではなく、了解しようとする、わかろうとする姿勢が大切だ。
第五段	38・7「このように…」〜39・8「…大切なのだろう。」	理解するとは、わからないままに身をさらし合う果てしないプロセスである。自分のことをわかろうと相手に関心を持ち続けていることを確認できたとき、人は「わかってもらえた」と感じる。
第六段	39・9「私には…」〜終わり	エピローグ 閉所恐怖症の妻の恐怖をわからないままに、傍らを去らないですつと一緒に移動する夫の行為が、彼女への確かな理解になっていたのではないか。

〔段落分けについて〕

教科書36ページに一行の空白があり、前後に分かれている。前半をⅠ、後半をⅡとすると、Ⅰは『全人的理解』の不可能性について、Ⅱは「他者を理解すること」について書かれ、全体を「自分には他人の痛みがわからない」と小見出しがついている。

●展開図



●語句・文脈の解説

●第一段（初め〜33・2）「…発言が好きだ。」の要旨
プロローグ 「私には他人の痛みがわからない」という率直な発言が好きだ。

「33ページ」

題 他者 教科書41ページ「テーマを深めるために 私とは、他者とは」に詳しい。同ページの「語句の解説」にもある通り、他者とは「あるものに対する他のもの」あるいは「自己に対する何ものか」という意味であるが、「自己に対する何ものか」とは、「我々」で括られないものをさす。「男」が「男」に「男らしくしろ」と言う時、発言者は相手を「他者」として認めず、「男」という概念の枠の中に相手を収めようとしている。「高校生らしい」「日本人らしく」などの発言も同様である。他者とは「自分の従っているルールを共有しない人」であり、家族や友人でも他者である。

題 理解 物事の道理や筋道が正しくわかること。意味・内容をのみこむこと。他人の気持ちや立場を察すること。「わかる」こと一般の意味でよく使われる。哲学的には「理解」の概念は複雑になる。ドイツのディルタイ (W. Dilthey) の提唱した「生の哲学」では、「文化的、歴史的なものを生の表現とみなし、その生を追体験によって把握すること」とされている。筆者の使う「理解」の概念はディルタイのものに近いが、ここではその説明は割愛する。

1 私はこの率直な発言が好きだ 「こういう」は「私には他人の痛みというのがどうしてもわからないです……」という言葉を目指す。通常「他人の痛みがわかる」ことは、人間性や道徳性の基本として重要視されているが、筆者は「他人の痛みがどうしてもわからない」という発言を「率直」だと評価し、「好きだ」と述べる。見落としてならないのは、「どうしても」の表現である。ここには、他人の痛みをわかろうとして努力を重ね、それでもわからない、という本人の痛みが表明されている。裏を返せば、「人の痛みがわかる」ということに対して筆者が疑問をもっていることも感じさせる。

指導の要点

・冒頭における筆者の言葉の真意を考える。

発問・脚問

「33ページ」

問 題名の「他者」とはどのような意味か。
答 自分以外の人。

解説 本来は、「他者」とは単に他人という意味ではなく、自分とは異なる存在として立ち現れるものであるが、ここではまだ「他人」くらいに捉えていてもいいだろう。
問 なぜ筆者は「こういう率直な発言が好き」(1)なのだろうか。予想してみよう。

答 例「他人とはわかり合えないと考えている人だから」「わからないのにわかったふりをする人が嫌いだから」「正直な人が好きだから」など

解説 ここでは筆者の考えの「予想」ということで、「本文を読み進めるうちにどうしてそう思うのか、わかってくるだろうか？」と、読解に興味をつなげたい。

問 「他者を理解する」という題名なのに、なぜ「他人の痛みがわからない」という発言を「好きだ」と述べることから始まるのか。
答 読者に意外に思わせて、本文に興味を抱かせるため。

解説 文章展開に関する問いであり、最後まで読まなければわからない問いであるから、ここも予想する範囲でよい。

●第二段(33・3「ケアについて…」34・5「…されているからだ。」)の要旨
 「全人的理解」とは
 ケアにおいて「全人的理解」が要請されるが、それは他人と同一の気持ちになるということではない。

〔33ページ〕

- 3 ケア care 注意、用心。心づかい、配慮。世話すること、介護や看護。既に日本語として定着した感のある「ケア」という言葉は、「ヘアケア」(髪の手入れ)、「アフターケア」(①病後の生活指導や、快復期の治療など。②服役者の出獄後の指導や監督。③アフターサービス)など、さまざまな場面で使われている。「手当て」、「手入れ」、「介護」、「看護」などの意味をもっている。単独でケアという場合には「放っておけないものへの手当て」のニュアンスが強い。
- 3 「全人的理解」 「全人的」とは、対象とする人間の全体像を理解すること。人を、身体や精神などの一側面からのみ見るのではなく、人格や社会的立場なども含めた総合的な観点から取り扱うさまをいう。本文では「誰かを、その人が置かれている状況とそこでの思いを含め、丸ごとしっかりと理解する」と記されている。教育界では「全人教育」を標榜する学校も多い。医療関係では、「全人的医療」と言い、身体的な治療に終始しない総合的医療を意味する語として用いられる。このことについては、次ページに「全人的理解」が看護で求められるようになった背景についての叙述がある。
- 4 理解する? 「ここで?」がついているわけは、一般的に好ましい看護のあり方として広がりを見せた「全人的理解」に関して、筆者が疑問をもっているからである。その疑問の具体的内容は、次の文からすぐに述べて述べられる。

〔34ページ〕

- 1 感情伝染 emotional contagion 身近にいる他者の感情を感じ取って、自分自身も同じ感情状態になること。
- 1 (語句) 不意 思いがけないこと(さま)。だしぬけ。突然。
- 2 天啓 天の啓示。天の導き、神の教え、などの意味。
- 3 (語句) 共振 振動体の固有振動がその物体に加えられた振動の周波数と一致するか、正数倍の関係にあるとき、振動の幅が大きくなる現象。ここでは、他者の感情に自分の感情が共鳴して、自分の感情が揺れている状態を指すと考えてよい。

- 3 他者 傍点がついているのは強調のためである。感情伝染のように感情が共振して相手の気持ちになっっている(と思っっている)時は、自分自身の気持ちが変わっているのだから、自分とは違う「他者」の気持ちを理解しているのではない。相手と自分を同一視することは、自分とは違う「他者」の理解とは違うので、ここで「他者」を強調している。
- 4 自他の間の隔たりというものが消去されている 自分と相手が違う人間であり、それぞれを違う人間としてその存在と尊厳を尊重し認められた時に、はじめて「他者の理解」が成立する前提に立つことができる。

〈板書例〉

ケア(看護)

全人的理解

要請の背後

- ①技術先行 感情の通いあわない関係への反省
- ②主体—客体関係への反省
- ③病を患部・局所的と考えることへの反省

≠ 同じ気持ち? 感情伝染、感情の共振

理解 自他の隔たりが消失(他者の不在)

指導の要点

・冒頭における筆者の言葉の理由を捉える。

発問・脚問

〔33ページ〕

問 「その人が置かれている状況とそこでの思いも含め、丸ごとしっかりと理解する?」(4)と、「?」がついているのはなぜか。

答 ・筆者が「全人的理解」について、十分に納得していないから。
 ・全人的理解について、そんなことではあるはずがないと筆者が考えているから。

解説 「?」の表現効果についての問いである。疑問符なので「どういうこと?」と、とまどっているニュアンスが加味されていればよいのだが、次の文の冒頭から「しかしもし…」と始まっているので、ここでは反語的ニュアンスも含まれることに気づきたい。

〔34ページ〕

問 筆者が「他者の理解ではない」(3)というのはなぜか。

答 「他者の理解」が成り立つ前提である自他の間の隔たりが消去されているから。
 解説 筆者の「他者の理解」観については、本文の後半部(第四段以降)で詳しく語られることになる。
 問 なぜ「他者」(3)に傍点がついているのか。

答 他人と同じ気持ちになることがあるとしても、それは感情の共振のように、自分自身の気持ちが変わったのであって、自分と違う相手を理解したわけではないということ強調するため。

●第三段(34・6「それに…」～36・7「…ほんとに」)の要旨
 「全人的理解」の不可能性
 人は一個の全体として捉えられるほどまとまった存在ではない。人は自分のことも自分では「全体」として理解できない。それなのに他者についてその全体を知ることなどできるだろうか。

〔34ページ〕

6 異論がある 異論は、他と違った意見や議論、異議、反対意見のこと。「異論がある」はあることについて、納得できず、違った意見をもっているということ。ここでは、「全人的」という人間の捉え方自体に反対の意見をもっている、ということ。

8 わからなくてもいい、筆者が異論をもつ「全人的理解」だが、それが看護の場において必要とされよう請されたことには、筆者は一定の理解を示している。

9 患者を看護の一個の対象として見る 患者とは何らかの病や怪我で苦しんでいる人のことだが、その人の生活や人間関係、家族、置かれている状況、感情などを切り捨て、病氣や怪我を治すべき看護する対象としてのみ見ることを指す。そこから「技術先行の、感情の通い合わない関係」が生じる。

10 医療現場の反省 病や怪我を負った人間を身体をもった機械のように見て、その不具合を治すために手術をしたり、投薬したり、熱や血圧を測って状態を把握したりする。そのような医療では患者は救われないということが、長年の研究や医療現場の経験から明らかになり、患者を「対象物」であるかのように扱うことへの反省が生まれたというのである。

11 〈主体―客体〉の関係へとゆがめられ 〈主体―客体〉の関係は、デカルトに始まる自然科学の研究姿勢に起源をもつとされることが多い。対象を自分から切り離して観察する、または、はたらきかける自分を「主体」として、観察対象である自然や数学、社会(本文の場合は患者)などを、自分がはたらきかける「対象物」として客観的に自分の主観を入れずに捉える姿勢を言う。

13 ともに手を携えて病に向かうという過程が欠落しがち 現在では、医療行為において医者などの医療従事者が主体となり対象である患者に一方的にはたらきかけて病気を治す、という認識は取らない。患者の主体性を重視し、患者と医療従事者が一緒に医療に向かっていくという考え方になっている。

〔35ページ〕

1 人の身体の局所的なできごととして捉えてしまうこと この捉え方も、身体機械論から来ていると言

える。「悪いところがあれば治してしまえばいい」という発想であり、患者が生身の人間だという観点が抜けている。そのことへの反省から、「全人的理解」が要請されたというのである。

3 「全人的」というのは過酷な要請である 前段落では「全人的理解」が要請された背景に理解を示していた筆者だが、ここからは「全人的理解」批判を展開していく。なぜ「過酷な要請」なのかは、以降に述べられていく。

3 人はまず一つの完結した全体として捉えうるようなものではない 平野啓一郎「自分を捉え直す」では「分人」という捉え方が提唱されていたが、人の全体像が一つの「キャラクター」では捉えきれない複雑なものであることは、二十世紀の心理学・哲学等の研究で探求され、明らかにされてきた。

4 外傷(トラウマ) trauma 古代ギリシア語で「傷」の意味。心理的に大きな打撃を与え、その影響が長く残るような体験。心的外傷。典型的な原因としては、虐待、暴力、戦争、犯罪、事故、いじめ、ハラスメントなどに加え、深刻な自然災害など、体験した本人が身に危険を感じるようなできごとがあげられる。通常、「心的外傷」と言うが、身体的外傷(ケガ)と混同されにくい場合には単に「外傷」という場合も多い。

6 いわゆる「たち」「たち」とは、生まれつきもっている性質や体質。資質。また、物事の性質を指す。「質」の字を充てる。ここでは、自分ではどうしようもない自分自身の性格や性向、行動や認識の傾向などを指している。「たちが悪い」や「辛抱強いたちだ」などの「たち」であるが、人の行動や性質を簡単に「たち」と言い切れることはその人の実際に合わないことも多く、「いわゆる」をつけ、さらに傍点を振っている。

6 判然としない「判然」ははっきりわかること。「判然としない」なので、「はっきりとはわからない」という意味。

7 〈生〉 その人が生きてきたすべてのあり方を指して「生」と表現している。「人生」というと、歴史的な側面が強調されるが、「生」には、本文の直前にあるような「なぜそうなるのか自分でも判然としない」ものも含まれる。実際には自分の生きていくさまは、自分自身ではどうしようもないあり方の部分がかなりあるように思われるもので、それらすべてを含めて「生」と呼び、「全人的」のように、世間的によく使われる通俗の意味と分ける意味で「生」をつけていると考えられる。

7 フロイト 精神分析の始祖であり、無意識の提唱など、その後の心理学に決定的な影響を与えたとされる。

発問・脚問

問 「患者の『全人的理解』ということが看護においてしきりに要請(7)されるようになった理由を、本文から三つあげよ。

答 ①患者を看護の一個の対象として見る、技術先行の感情の通わない関係への反省。
 ②患者を受け身の存在の中に押し込めて、患者と看護者がともに手を携えて病に向かう過程が欠落することへの反省。
 ③病を身体の局所的なできごととして捉え、患者の生活や人生の全体との関連で捉えないことへの反省。

解説 教科書34ページ後半をまとめればよい。筆者は「全人的理解」は不可能だと考えながらも、それが要請されたことに関しては理解を示している。①は「冷たい医療」②は「一方的関係」、③は「機械修理的医療」とでもまとめられるだろう。

〔35ページ〕

脚問 「全人的」というのは過酷な要請である(3)のはなぜか。

答 人は「一つの完結した全体」として捉えうるようなものではなく、自己ですらまとまった像を描くことができないのに他者の「全体」を知ることなどできるのか、疑問だから。

解説 脚問部分の直後にある「まず」以降をおさえた後、「自己のいうものまとまった像など、誰も思い描くことはできない」(35・14)、「自分のことですらそうなのに、はたして他者についてその『全体』を知るといふことなどできるものだろうか」(36・4)とある点をおさえた上で、筆者が「過酷」と述べる根底には疑問があることを理解していききたい。

問 「記憶一つとっても鵜呑みにはできない」(9)とのなぜか。

答 人は、本当に大事なものを隠すためにどうでもいいことばかり覚えていくというようだが、人の記憶には隙間や暗がりがあるから。

解説 この問いの前に「本当に大事なものを隠すためにどうでもいいことばかり覚えていく」(8)について、語句の解説にあるようなことを補足するとよい。記憶とは、自分にはどうしようもない方法で選ばれたものであり、自分の過去のすべてを記憶から理解することは不可能である。

問 「地平」(11)とは何か。

答 ①大地のなだらかな広がり。遠くまで続く、起伏の少ない大地。
 ②「地平線」の略。

8 本当に大事なものを隠すためにどうでもいいことばかり覚えていて、トラウマには、意識されるトラウマと、意識できないトラウマがある。例えば、あまりにつらい心的外傷の原因となったできごとは無意識のうちに記憶の暗部に押し込めて思い出せない状態になっていて、代わりに些細な日常の中のほんの一コマを覚えていたりといったことが想定される。本人の現在を規定している真の原因を思い出せないで、自分の精神状態がなぜ現状のようになったのか、本人にはわからない。

9 そんな隙間や暗がりがいっぱいある。人は過去のすべてを公平に覚えているのではなく、重大だと思われることであるにもかかわらず、思い出せないことも多いということ。

11 その地平はいわゆるがみだらけ、穴だらけ。記憶には隙間や暗がりが多く、しかもそれが自分にとって重要なものだった場合でも思い出せないことがある。そんな自分の「意識」が描く自分像は、本当の自分とはかけ離れた、「ゆがんだ」ものになっているかもしれないし、また意識の届かない部分が多いので「穴だらけ」なのかもしれない。

12 意識の地平 物事を考えたり判断したりする際の、思考の及ぶ範囲。ここでの「地平」とはドイツの哲学者フッサールの提唱した現象学の用語としての意味合いであろう。

12 複数のそれが複雑に絡み合い、すれ違い、交差し、錯綜している。「それ」とは「意識の地平」のこと。人の意識は、思考の及ぶ範囲や思考の現れ方が矛盾のないすっきりした強固な単一のものではなく、ある側面では非常に冷静であっても、ある側面では感情的であったり、果断に富む場合と優柔不断な場合があったりと、複雑で矛盾に満ちたものだということ。

13 錯綜 物事が複雑に入り組んで混乱していること。

15 魂 生きものの体の中に宿って、心のはたらきを司ると考えられるものの意。パスカルの『パンセ』からの引用。人の魂とは、自分の心の中心として自分自身の存在の核となるもの、と考えられる。

15 性向 性質の傾向、あり方の特徴のこと。

「36ページ」

1 魂ほどの対象に対しても単一なものとしては現れない。「どの対象に対しても」とあるので、特定の一人の人に対しても、また、あるできごと（例えば降雨など）に対しても、単純で単一なものとしては現れないというのである。ある人に対しての感情が常に一つの気持ちで百パーセントということはないし、雨が降ってきたことに関しても、「今、濡れると困るなあ」という人がいる一方で、「畑の作物にはありがたいなあ」と思う人もいるなど、さまざまな気持ち、あり方をしているということである。

ろう。また、続けて「人は同一のことで、泣いたり笑ったりする。」とあるように、ある人やあるできごとに関しても、人は複雑で、時として矛盾した反応を同時にする。

4 ブレーズ・パスカル 教科書の注で紹介されている他にも、哲学者でもあり、自然哲学者、キリスト教神学者、発明家、実業家でもある。三九歳で早逝。『パンセ』は没後の一六七〇年に刊行された。十歳にならないうちに三角形の内角の和が二直角であることを証明したり、十六歳で「円錐曲線試論」を発表したり、十九歳で機械式の計算機を発明・完成させたりと、若い頃から多方面に才能を発揮し、「パスカルの原理」や「パスカルの三角形」など、多数の功績を残した。

6 (語句) 頓挫 勢いが急に弱まること。また、計画や事業などが途中で遂行できなくなること。ここでは看護という行為が成立しなくなるということ。

6 頓挫してしまうほかないのだろうか、ほんとうに この文末表現は反語的疑問になっている。筆者は看護において「全人的理解」が要請されたこと自体は肯定するが、他者について全体を知ることが不可能であり、「他者の理解」がなければ看護ができないとする発想は間違いだと考えている。そもそも全人的にまとまりがあつて矛盾のない人などいないのだから、ある人をすべて理解すること自体が不可能なのである。

〈板書例〉

「過酷」①人は一つの完結した全体として捉えうるものではない

← ②自分でもわからない自分の性向がある

← ③記憶にはゆがみや空白がある

← ④意識の地平も複数が複雑に絡み合い交錯している

自己のまとまった像など誰も思い浮かべることができない・全人的理解は不可能

↓看護も頓挫？

指導の要点

・冒頭における筆者の言葉の理由を考える。

③ (比喩的に)物事を考えたり判断したりする際の、思考の及ぶ範囲。

解説 「地平」の比喩的な意味を調べ、理解しておく。比喩的な意味での「地平」は哲学的評論などでないと出てこないことが多いが、「他者」などと並んで重要語である。

問 「複数のそれ」(12)とは何のことか。

答 「意識の地平」のこと。

解説 意識の地平とは、文脈と地平の意味から、「意識が及ぶ範囲」「思考の際に自分で意識できる範囲」等の意味となる。

問 「複雑に絡み合い、すれ違い、交差し、錯綜している」(12)とはどういうことか。

答 自分自身のことでも、ある場合には意識はこのように働き、またある場合には、意識の及ぶ範囲は別のようになる、などのように、統一されず、矛盾にみちた状態であるということ。

解説 「同じ言葉を言われて、自分のよい時には許せたが、イライラしていて許せなかったことではないか」などの質問をして、一人の人間であっても常に同じ気持ちでいるわけではないことに思い当たらせたい。

「36ページ」

問 「魂ほどの対象に対しても単一なものとしては現れない」(1)とは、どういうことか。

答 人は誰に対しても、その人の前に、ゆるぎのない固定的な一つの人格としては現れないということ。

解説 パスカルの引用部分前後はかなり難しい。学習者たちには、具体的なシーンを思い浮かべさせ、あてはめて想像させてみるのがわかりやすいだろう。例えば「相手が家族や友達の時と、好きな人の時とは、話し方や質問の答えなどが変わったらしい？」など、問いを言い換えて具体化するとよい。

問 「人間は常に分裂し、自分自身に反対している」(2)とはどういうことか。

答 人はいつでも矛盾した気持ちを抱え、完全に一つの気持ちになるといったことはないということ。

解説 適宜、具体化して問いをアレンジすると、答えやすくなるだろう。

問 「看護というものは頓挫してしまう」(6)とはどういうことか。

答 看護という営みが、うまくいかなくなり、成り立たなくなってしまうということ。

●第四段(36・8「裁判所で…」～38・6「…」とても不思議だ。)」の要旨

理解が成り立つために大切なこと
理解するということは、感情の一致、意見の一致をみるのではない。自分には了解したい思
いを、否定するのではなく、了解しようとする、わかれようとする姿勢が大切だ。

〔36ページ〕

8 調停 争いをしてる者の間に入り、それをやめさせること。仲裁。裁判における解決方法の一つ。
裁判所における調停手続きとは、当事者どうしでは自主的な解決が望めない場合に、裁判官と一般市
民から選ばれた調停委員などが間に入り、当事者の自主的な紛争解決の手助けをする制度を指す。

9 (語句) 万策尽きる 「万策」とは、できる限りのありとあらゆる方法のこと。それが尽きるという
のであるから、打つべき手段を全て打っても改善せず、他に何も手段がない状態を指す。

10 ようやくと 「ようやく」と「やっと」の合成語とも言われる。かろうじて。やっとのこと。

12 一致をみる 初めは異なっていたものが、食いちがいなく同じようになるということ。

〔37ページ〕

2 他者としての他者、「題」の項で述べたように、「他者」とは、単に他人という意味だけでなく、自分
とは違う存在という側面が強調されている。「他者としての他者」とは、相手を今の自分の理解できる
枠の中に収めようとせず、自分とは違う、理解できないものとして認識することを指す。傍点はその
ことを強調するために付されている。

5 そのわかれようとする姿勢にこそ他者はときに応える 段落冒頭にあるように、「他者の理解」とは相
手と「同じ思いになることではない」。他者と同じ思いになれない、または他者の思いが自分にはと
ても了解したいものだとして、それを否定するのではなく、それでも了解しようとする、その姿勢、
その行為が「他者の理解」につながるのだと筆者は述べている。「ときに応える」とは、その理解しよ
うとする姿勢が、相手に伝わることもある、ということである。

7 言葉を受け取ってくれたという感動のほうが、主張を受け入れてくれたということよりも意味が大き
い 例えば、嫌がらせなどに苦しむことを訴えた時、加害者が、形式だけの謝罪をするよりも、相手
がその行為でどれだけ苦しんだかをわかれようとするほうが、被害者にとって救いになることがあると
いう。

11 わかれ、たまるか、という思いがある。人の悩みや苦しみは常に個別で唯一の経験なので他人には
容易にわかるはずがなく、安易に「わかる」と言われると、聴き手の中にもとあつた何かにあて
はめて処理されただけのように感じられる。「わかられたまるか」は理解されたくないというより
も、簡単にわかつたつもりになってほしくない、という気持ちだと解釈したほうがよいだろう。
14 どうしてもわかりたくない、というシチュエーションもあるだろう 相手の話を聞いていて、ここでわ
かつたと言ってほしいと相手が思っていることを強く感じるが、了解したくない場合があるというこ
と。例えば、相手の主張に一定の正当性があつたとしても、自分にとって大切なものを傷つけるよう
な内容を含む場合には、簡単に同意することはできないだろう。

〔38ページ〕

6 この非対称 非対称とは、互いに対応せず、つりあっていない状態。聞く側の時は「わかっているか
わからない」と思うのに、話す側に回ると「わかってもらえた」と思ってしまう心のありようを指し
ている。

6 とても不思議だ 話す側と聞く側に生まれる「非対称」に対する筆者の感慨。理解が二人の間に成り
立つものならば同時に「通じ合った」と感じてもよいはずなのに、そうならないのが不思議というこ
とである。

〈板書例〉

理解するとは、感情の一致・意見の一致ではない。
他者の他者性にふれる …わかられたまるか
わかりたくない
↑
他者の思いにふれて、自分の枠に収めようとしな

指導の要点

・前段をふまえた筆者の主張を捉える。

発問・脚問

〔37ページ〕

脚問 「他者としての他者」(2)とはどのようなものか。

答 自分にはわからない、自分とは違う考え方や感じ方をしてる、自分とは違う人として他人という意味。

解説 語句・文脈の解説参照。学習者のもつ語彙で「自分とは違う」、「自分にはわからない」というニュアンスを捉えさせたい。

問 「他者の理解」(3)に大切なことはどのようなことか。

答 相手の気持ちが変わらなくても、否定することなく理解しようとする。

問 「それがそれとして肯定された」(10)とは具体的にどのようなことか。

答 自分の言葉が、わかれようとしている相手に、そのまま受け入れられたということ。

解説 二つの「それ」はともに「(自分の)言葉」を指す。

〔38ページ〕

問 「さういふこと」(1)とはどのようなことか。

答 話す側が「わかられたまるか」と思い、聴く側が「どうしてもわかりたくない」と思うようなこと。

解説 語句・文脈の解説参照。それぞれ具体

的にどんな場合か、想像させてみるとよい。
脚問 なぜ「不思議」(6)なのか。

答 聞き手側の時は「わかってもらえてうれしい」と言われても自分の理解に納得がいけないものなのに、話し手側の時は「わかってもらえた」と確信のようなものがしつかり生まれるから。

解説 理解が二人の間に成り立つものならば、相手と気持ちを共有して、二人が「通じ合った」と同時に感じてもいいものなのに、そうはならないのが実際である。その非対称性が不思議だということである。

●第五段(38・7)「このように…」(39・8)「…大切なだろう。」()の要旨
理解するとは、わからないままに身をさらし合う果てしないプロセスである。自分のことをわ
かろうと相手に関心を持ち続けていることを確認できたとき、人は「わかってもらえた」と感じる。

「38ページ」

7 このように見てくると 前段までの考察を指す。

7 合意とか合一といった到着点を目がけるのではなく、わからないままに身をさらし合う果てしな
いプロセスなのではないか 筆者は「理解」について、合意のように同一のゴールを指すのではなく、
ゴールにたどり着けないうちにひたすら相手を理解しようとし続ける過程こそ意味があると考え
る。

9 一致よりも不一致、伝達よりも伝達不能、それを思い知ることこそが、理解においては重要な意味を
もつ 相手のことを他者として認めるなら、自分の中の枠組みに無理やり相手をあてはめて「わかっ
たつもり」になることはできない。誠実にわかろうとするほど、相手との不一致や思いの伝達の不可
能性につづかり、こんなにも理解は難しいのかと思ひ知る。そのつらさから逃げるために「わかつた
ことにする」誘惑は世に満ちているが、そのつらさに踏みとどまるべきだと、筆者は言うのである。

10 「あのときはわからなかったけれど、今だったらわかる。」ということも起こる ここで筆者が言っ
ているのは、理解には長い時間がかかるということである。理解しようとし身をさらけ出す過程をずっと
繰り返すことで、「今だったらわかる」ということが起こりうるのである。

12 私自身が変わったのだ 自分とは違う他者を理解するためには、自分が変わらないといけない。「他
者を理解する」ということの中には、…これまでとは違ったふうに自分を感じられるようになること
いうできごとが起こることが含まれている」(38・14) (39・2) とあるように、他者を受け入れ
るには自分を変えざるをえない。変わることに よってはじめて相手と共通の何かをもてるようになる
可能性が開けるのである。

14 理解は常に時間的なので、ことでもあるのだ 他者としての相手を否定せず、わからないまま、わか
らうとし続けることによってしか、理解が得られないのだとすれば、理解は確かに時間的に長い長い
きごとだと言える。

「39ページ」

5 人は「わかってもらえた」と感じるのだろう 筆者は人が「わかってもらえた」と感じるのは、「自
分のことをわかろうと相手が自分に関心を持ち続けていてくれることを相手の言葉やふるまいのうち
に確認できたとき」と述べる。それは、「自分との関係が」どうであるか、また、自分の言ったこと
が承認されるかどうか、関係なく、「理解」は成立する。

7 理解においてはいちばん大切 筆者は「理解できないからといってこの場から立ち去らないこと」
(6)そして「それでもなんとかわかろうとすること」(7) だと言う。理解が過程においてしか成り
立たないなら、わかりあえないつらさに耐えて、立ち去らず、わかろうとすることをやめないことが、
理解を成立させるために最も重要な条件となるだろう。

〈板書例〉

相手がわかってくれたと言っても理解した確信がない
 了解したい相手の思いを否定せず、了解しようとする。
 なんとかわかりたいという気持ち
 他者を受け入れることで自分が変わる
 相手をわかろうと関心を持ち続ける

理解 …わからないままに身をさらし合う果てしないプロセス

相手や言葉のふるまいのうちに確認 ↓ わかってもらえたという確信

指導の要点

・これまでの展開をふまえて筆者の主張の中心を捉える。

発問・脚問

「38ページ」

問 「そついう苦い過程」(10)とはどういうこ
とか。

答 一致よりも不一致、伝達よりも伝達不能
なことを思い知ること。

問 「そついう過程」(12)とはどのようなもの
か。

答 相手を理解しようとし、長い時間苦い経験。
問 「そついうできごと」(12)とはどういうこ
とか。

答 「あのときはわからなかったけれど、今
だったらわかる。」ということ。

解説 筆者は理解には時間がかかることを考えて
おり、その場ですぐに理解することはほほ
ありえない(その場でわかる気になるのは、
共振であって理解ではない)と考えている。
時間をかけて理解しようとした結果、自分
が変わって、理解できたと思える時がある
場合もある。ここで筆者が重視しているの
は、「自分が変わった」ということである。

「39ページ」

問 筆者が「理解においてはいちばん大切」
(7)だと考えることは何か。

答 相手が理解できないからといって自分か
ら離れることなく、なんとかわかろうとし
てくれること。

解説

筆者は、相手と「自分との関係がどう
こうということ」を離れて「(3)と書いてい
る。つまり、相手の言うことを了承するこ
か、例えば謝罪するか、認めてほめると
か、相手の言う要求を叶えるとかいったこ
とは別に、相手がわかろうとし続けてく
れていることを感じられることが、理解さ
れたと思うことの重要な要件なのである。

●第六段(39・9)「私には…」(終わり)の要旨
エピソード

閉所恐怖症の妻の恐怖をわからないままに、傍らを去らないですっと一緒に移動する夫の行為が、彼女への確かな理解になっていたのではないか。

「39ページ」

9 「私には他人の痛みというのがどうしてもわからないんです……。」この言葉は本文冒頭で掲げられた言葉であり、本文の終章で再度登場している。本文冒頭では「こういう率直な発言が好きだ」と言うのみであったが、ここで、誰のどういうことについての発言だったかが明かされる。

13 (語句) 失調 医学用語で、ある機能が調節を失うこと。運動失調、自律神経失調症、統合失調症などがある。「神経に失調をきたし」とあるので自律神経失調症のことか。

14 閉所恐怖症 恐怖症の一つ。閉ざされた所にいると異常な強迫感を感じるもの。

「40ページ」

4 そのこと 妻の閉所恐怖症の恐怖がどんなものか理解できないが、新幹線の箱の中に一時間もいられない妻に付き合っつて、ずっと傍らを去らずに一緒に居続けていること。

4 彼女へのたしかな「理解」になつていたのではないかと、私は思う 本人は「痛みと言うのがわからない」と言っているが、筆者はそもそも「わかる」とは「わかるうとし続けること」だと捉えている。

また、相手が「わかってももらえた」と思っても、自分ではわかっただかどうか確信がもてない「非対称」が理解というものにはある、とも述べていた。その考え方でいけば、この知人の行為こそが「理解」であったと言える。鷺田清一が考える理解とは、相手を自分にはわからない他者として認め、相手を拒絶せず、相手の傍から立ち去らず、時間をかけて、わかるうとし続けること、その過程こそが、「理解」なのである。

指導の要点
・冒頭の筆者の言葉の真意を確かめる。

発問・脚問

「40ページ」

脚問 「そのこと」(4)とは何か。

答 妻の閉所恐怖症の恐怖がどんなものか理解できないが、新幹線の箱の中に一時間もいられない妻に付き合っつて、ずっと傍らを去らずに一緒に移動していること。

脚問 「そのこと」は文脈から答に示したように、エピソードの中の「彼」の行動である。

脚問 「たしかな『理解』になつていた」(4)と言えるのはなぜか。

答 筆者は「理解」というものを、「相手の気持ちに手が取るようにわかる」というものではなく、わかるうとし続けるその過程にあると考えていて、その行為自体が「理解」の本質だと考えているから。

脚問 「理解する」とは、合意とか合一といった到達点を目指すものではなく、わからないままに身をさらし合う果てのしないプロセスなのではないか」(38・7)と考えている。つまり、わかつた状態が理解のゴールではないのである。

「学習活動」「情報を整理するために」の解説

学習活動1 「それは感情の共振ということであっても他者、理解ではない」(34・3)のはなぜか、その内容を明らかにして説明しよう。

「ねらい」

物理用語の哲学的使用や、哲学用語を含む抽象的、比喩的表現を文脈上から理解し、自分のもつ語彙にあてはめて理解することができるようになる。

【解答例】

「感情の共振」とは、他人の話を聞いている時に、不意にその相手と同じ感情に捕らえられて、ある人の感情が伝染するかのよう他人にも伝わっていく感情伝染のような場合である。しかし、それは他者の理解ではない。なぜなら、相手は自分と違う人間である、という自他の間の隔たりがそこにはなくなつてしまつているため、自分とは違う存在の他者を相手とは違う存在である自分が理解しているということが成立していかないからである。

【解説】

ややくどい解答例になつてしまつたが、「内容を明らかにして」説明するとこのような形になろう。補足すると、共振は自分が相手に反応して震えだす(同じ感情になる)ということであり、いわば相手に触発されたものの、共振しているのは自分自身の感情である。したがつて、相手を理解したわけではないということになる。

文章全体を読んだ上で考えると、筆者が考える「理解」は「理解しようとし続ける過程を指す」ことがわかるが、ここではそこまで答えなくてもよい。

学習活動2 「わかる、理解する」というのは、感情の一致、意見の一致をみるということではない」(36・12)とはどういうことか、筆者の考えをまとめよう。

「ねらい」

通常考えられている「理解」と、筆者が本文で述べている「理解」との違いを捉える。

【解答例】

わかる、理解するということは、相手と同じ気持ちになつたり、同じ意見をもつようになったりすることではなく、自分にはとても理解できそうにない相手の思いを否定するのではなく、それでも了解しようと思つこと、そのわかるうとする姿勢が大切だということ。

【解説】

「『〜ない』とはどういうことか」という問いであるから、何が違うといつているのか、その「ない」の前の「〜」の部分の先に捉える。その上で、「ない」というのなら、どういふことなのかを捉えていけばよい。

教科書36〜37ページを読むと、筆者が主張している「理解」とは「相手の感情との同一化」や「相手の意見との一致」という目標が達成された状態のことではなく、相手を理解しようとする過程を重視し、わかり続けようとする姿勢であることがわかる。「結果↑↓過程」「一致↑↓不一致」の対比をつかむとよい。

学習活動3 「わからないままに身をさらし合う果てしないプロセス」(38・8)とは何か、説明しよう。

【ねらい】

本文のキーセンテンスについて、他の箇所からその内容を換言・詳説している箇所を関連付けて捉え、内容と構成の理解を図る。

【解答例】

相手の言っていることや相手の気持ちがわからなくても、相手を否定せずにそれでも了解しようと思うこと、あるいは、相手との不一致、互いの気持ちの伝達不能を思い知り、苦い思いをしながらも、相手から立ち去らずになんとかかわらうとし続けるような過程のこと。

【解説】

本文の「他者を理解する」ということの主題を言い切った文を一つ選ぶなら「理解するとは、合意とか合一といった到着点を目がけるものではなく、わからないままに身をさらし合う果てしないプロセスなのではないか」(38・7)である。しかし、「わからないままに身をさらし合う果てしないプロセス」という表現は比喩的表現であり、この表現理解のためには解釈が必要となる。

「プロセス」は過程のこと。理解とは「過程」であるとして、具体的にどのような過程かということになる。「わからないままに身をさらし合う」とはどういうことか、が書かれた場所を探すとよい。すると「理解できないからといってこの場から立ち去らないこと、それでもなんとかかわらうとすること」(39・6)が見つかる。

また、「彼女の傍らを去らないで、ずっと一緒に行動する……」(40・3)とあるので、「わからうとする過程」が「さらし合う」過程になり、それは「常に時間的なできごと」(38・14)、つまり時間が途方もなくかかるので、「果

てしないプロセス」ということになる。

情報を整理するために

・「私には他人の痛みというものがどうしてもわからないんです……」
という言葉が二度も引用されている理由について話し合ってみよう。

【ねらい】

額縁構造のように、文章の初めと終わりに配置された言葉の表現効果を理解することを通して、文章全体の構成を理解に役立てる。

【解答例】

文章初めの「私には……」(33・1)の言葉は、人の痛みや気持ちを理解することのできない人の悩みであるかのように見え、その言葉に続いて「私はいかに率直な発言が好きだ。」(33・1)とあることから、「人の気持ちがわからない」ということの誠実性を述べるのかと思わせ、タイトルと合わせて、「他者の理解」の難しさについての考察を期待させる。

文章の終わり近くの「私には……」(39・9)は、それまで述べてきた筆者の論をふまえ、その言葉を発した筆者の知人の例を述べて、その言葉こそが筆者の考える「他者の理解」を成り立たせている知人の妻への姿勢を表していることを明らかにして、最後に筆者の「理解することへの考え」を実例を通して説得力豊かに読者に伝え、文章を締めている。

同じ言葉を使いながら、最初は疑問符として読者を文章の問題意識へと誘う役割を果たさせ、最後に再び現れた時は、筆者の論の具体的理解へとつなげる役割をもたせて、読者への文章の説得力を増している。

【解説】

解答例のようにまとまった形でなくてもよい。「前後に同じ言葉を並べて強調する効果」や「同じ言葉の意味が文章前後で変わること」で、筆者の主張を印象づける効果、「抽象的な議論を、最初と最後に具体的、現実的な場面に

参考資料

教材研究・授業研究のための文献

- ・二枚腰のすすめ 鷺田清一の人生案内(教養みらい選書) 鷺田清一(二〇二〇年・世界思想社)
- ・「他者と生きる」磯野真穂(二〇二二年・集英社新書)
- ・「他者と「共にある」とはどういうことか」藤井真樹(二〇一九年・ミネルヴァ書房)

読書指導・発展学習のための文献

- ・「だんまり、つぶやき、語りい」じぶんをひらくことば 鷺田清一(二〇二一年・講談社)
- ・「岐路の前にいる君たちに」鷺田清一式辞集 鷺田清一(二〇一九年・朝日出版社)
- ・「他者を感じる社会学」好井裕明(二〇二〇年・ちくまプリマー新書)

落としてわかりやすくする効果」のように断片的でもよいので、学習者に話し合わせ、それらの意見を教室で共有し検討していくことで、前後に具体的な、同じ言葉を置いた効果を考えさせたい。

大切なことは、初めと終わりで、同じ言葉の意味が「理解できない」から「それが理解である」というように逆転していることである。知人本人は「彼女の恐怖がどういうものか、よくわからない」(40・2)が、それでも「むしろ、それだからこそ——理解が成立したと言える、というのが筆者の考えだということである。」

論点を整理する

情報を整理する

採録のねらい

●資質・能力の観点から

本教材は、「学習指導要領」の「論理国語」の「書くこと」の指導事項「ア 実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決めること。」に対応する教材であり、単元の冒頭（教科書18ページ）にある導入の活動とリンクした内容となっている。

ラジオパーソナリティーになること自体はリスナーの質問に対して回答する形式の活動であり、話すことに属するものであるが、ここでは回答作成の段階、リスナーの問いに対する回答を作成する場面に着目した。原稿の作成を通して「自己」に関する筆者の見解をまとめるプロセスを導入し、筆者の考えをまとめ、要約することを通して、現代社会において「自己」をいかに考えるのかをまとめ、その内容を実際にどう話し、相手を説得していくのかを意識した学習を目的とした活動である。「リスナーの問いに対する回答」という目的や意図を十分に考慮し、状況や相手、場面を意識することで、自分の意見をどう表明するのか、教材の内容をいかに引用・加工し、説明・説得するのかという点に着目した書く活動を組織したい。

学習指導のポイント

・情報を整理し、伝えたいことに対して適切な情報を構成する。

●テーマの観点から

本単元は、意識的であろうとなかろうと、いつの世も若者たちの関心事であろう「自己」をめぐる問題を軸にしながら、情報収集のために行う読書および収集した情報を整理することを目指して設定されている。現代社会に関わる話題や問題に幅広く関心をもち、生涯にわたる読書習慣の一端として、情報収集のための読書に向き合わせることは重要なことである。また社会人として、考えやものの見方を豊かにすることを目指す意味でも、読書習慣の形成を目指したいところでもある。

若者たちは、常に「自分とは何者か」という問いに向き合ってきた。「個性とは何か」「自分らしさとは何か」という問題は、近代以降において問われ続けてきた、古くて新しい問題でもある。ただし、本教材／活動は、直接的に自分の自己観を剥き出しにするものではない。誰かの論をもとに、自己の考え方との共通点や相違点を見いだし、自らの自己観あるいは自分のあり方を見つめ直しつつ、自己というテーマに向き合って自分なりの考えをまとめることを目指したい。

学習指導のポイント

・さまざまな筆者の自己観に触れ、それらの共通点と相違点を整理した上で、自分の考えにしつくりくるものをまとめる。

学習指導の展開

●学習指導要領の指導事項

知識及び技能

言葉イ 論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。

思考力、判断力、表現力等

書くア 実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決めること。

◆言語活動例

書くア 特定の資料について、様々な観点から概要などをまとめる活動。

論点を整理する

情報を整理する

採録のねらい

●資質・能力の観点から

本教材は、「学習指導要領」の「論理国語」の「書くこと」の指導事項「ア 実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決めること。」に対応する教材であり、単元の冒頭（教科書18ページ）にある導入の活動とリンクした内容となっている。

ラジオパーソナリティーになること自体はリスナーの質問に対して回答する形式の活動であり、話すことに属するものであるが、ここでは回答作成の段階、リスナーの問いに対する回答を作成する場面に着目した。原稿の作成を通して「自己」に関する筆者の見解をまとめるプロセスを導入し、筆者の考えをまとめ、要約することを通して、現代社会において「自己」をいかに考えるのかをまとめ、その内容を実際にどう話し、相手を説得していくのかを意識した学習を目的とした活動である。「リスナーの問いに対する回答」という目的や意図を十分に考慮し、状況や相手、場面を意識することで、自分の意見をどう表明するのか、教材の内容をいかに引用・加工し、説明・説得するのかという点に着目した書く活動を組織したい。

学習指導のポイント

・情報を整理し、伝えたいことに対して適切な情報を構成する。

●テーマの観点から

本単元は、意識的であろうとなかろうと、いつの世も若者たちの関心事であろう「自己」をめぐる問題を軸にしながら、情報収集のために行う読書および収集した情報を整理することを目指して設定されている。現代社会に関わる話題や問題に幅広く関心をもち、生涯にわたる読書習慣の一端として、情報収集のための読書に向き合わせることは重要なことである。また社会人として、考えやものの見方を豊かにすることを目指す意味でも、読書習慣の形成を目指したいところでもある。

若者たちは、常に「自分とは何者か」という問いに向き合ってきた。「個性とは何か」「自分らしさとは何か」という問題は、近代以降において問われ続けてきた、古くて新しい問題でもある。ただし、本教材／活動は、直接的に自分の自己観を剥き出しにするものではない。誰かの論をもとに、自己の考え方との共通点や相違点を見いだし、自らの自己観あるいは自分のあり方を見つめ直しつつ、自己というテーマに向き合って自分なりの考えをまとめることを目指したい。

学習指導のポイント

・さまざまな筆者の自己観に触れ、それらの共通点と相違点を整理した上で、自分の考えにしつくりくるものをまとめる。

●評価規準

知識・技能

・論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。

思考・判断・表現

・実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決めている。

主体的に学習に取り組む態度

・論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしたり、実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決めたりすることに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。

第1時限		時間
		目標
		・論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにする。
評価規準	展開1	導入
思考・判断・表現 ・論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。	5 共通点と相違点を明らかにした上で、情報を整理する。 4 自分なりにリスナーの問いに対する回答を構想する。 3 ここまで読んできた文章の内容をそれぞれ要約する。(学習活動1) 2 リスナーの悩みのポイントを捉える。	1 学習目標と学習の流れを確認し、学習の見通しをもつ。 2 リスナーの悩みのポイントを捉える。
	5 伝えたいことを明確にした上で、自分の意見が説得力を増すように引用を加え、回答を完成させる。 4 ジグソー的な展開の中で、三者の見解をまとめていく。 3 教科書42ページにある「要点・要約・要旨」の違いを整理し、実際に文章を要約した後、各自で要約した文章をグループで読み合い、要約文を整える。要約が難しい場合は、筆者が伝えたいことが最も集約された言葉を選び、その理由を書く。 2 教科書18ページのリスナーからの投稿を読み、悩みのポイントを捉える。 1 ラジオパーソナリティーになり、リスナーの問いに対する回答を実際に構想することを伝える。	学習活動と指導内容
		指導上の留意点

●学習指導の展開例(3時間扱い)

学習指導案			
○○高等学校国語科 ○年○組 授業者 ○○○○			
1. 学習活動 ラジオパーソナリティーになって答えよう！-情報を整理し、引用し、説得する。			
2. 教材名 「情報を整理し活用する」・その他の関連資料			
3. 学習目標 書き手の立場や論点などのさまざまな観点から情報を収集、整理し、説得力のある文章を書く。			
4. 学習活動の評価規準			
評価規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにする。 (言葉イ)	実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決める。 (書くア)	論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしたり、実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決めたりすることに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。
評価の実際	筆者の論点を明確に物語る言葉を正確に抜き出すことができる。 (記述の点検)	本文から必要な箇所を正確に抜き出しながら、要約し情報を整理している。 (記述の点検)	目的と相手に合わせて適切な箇所を引用し、構成や展開を工夫して説得しようとしている。 (記述の点検)
5. 学習活動の展開 (3時間)			
時	学習活動	評価	
1	・「学習活動1」に取り組む。	筆者の論点を明確に物語る言葉を正確に抜き出すことができる。 (知識・技能、記述の点検)	
2	・「学習活動2」に取り組む、書いたものを相互評価し合いながら完成させる。	本文から必要な箇所を正確に抜き出しながら、要約し情報を整理している。 (思考・判断・表現、記述の点検)	
3	・完成させた内容を発表し、聞き手からの意見をもとに書き直し、説得力を高める。	目的と相手に合わせて適切な箇所を引用し、構成や展開を工夫して説得しようとしている。 (記述の点検)	

●学習指導案例

第3時限		時間
<p>・論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしたり、実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決めたりするに、自らの学習を調整しようとする。</p>		<p>・論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしたり、実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決めたりするに、自らの学習を調整しようとする。</p>
<p>評価規準</p>	<p>まとめ</p>	<p>学習活動と指導内容</p>
<p>知識・技能</p> <p>・論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしたり、実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決めたりするに、自らの学習を調整しようとしている。</p>	<p>1 グループに分かれ、実際にラジオパーソナリティーとしての回答を発表する。</p> <p>2 発表後に、聞き手からの意見をもとに発表原稿を書き直し、より説得力のある文章に仕上げる。</p> <p>3 学習目標を再確認し、学習を振り返る。</p>	<p>指導上の留意点</p> <p>1 聞き手の評価の観点は「説得的な発表になっていたか」であり、説得性としての要素としては「想定した場や他者に応じた説明の仕方になっているか」ということ、さらに「適切な引用により説得力のある構成となっているか」が中心となる。</p> <p>2 表現の工夫や、場に応じた話し方、発表を聞いての感想、発表者に対する理解などについて、話し合わせる。</p> <p>3 「読み手（聞き手）の理解、そして納得を得られるよう」「文章の構成や展開を工夫」という点を再確認させる。要約する際の注意点を自分なりにまとめる。</p>

第2時限		時間
<p>・実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決める。</p>		<p>・実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決める。</p>
<p>評価規準</p>	<p>展開2</p>	<p>学習活動と指導内容</p>
<p>思考・判断・表現</p> <p>・実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決めている。</p>	<p>1 「学習活動2」に取り組み。</p> <p>2 各自で構想したりリスナーに対する回答について、グループで相互批評し合う。</p> <p>3 相互批評で出た意見も参考に、ラジオパーソナリティーとしての回答を完成させる。</p>	<p>指導上の留意点</p> <p>1 前時に記述した回答について、目的と、想定した他者を考えさせながら、内容を取捨選択したり、並べ替えたりして、回答を作成させる。</p> <p>2 教科書44ページにある回答に対して、実際に平野啓一郎の文章の引用をどこに入れるのが適切かを考え、より説得力のある回答を作成させる。</p> <p>① 「リスナーに聞いてもらう」内容になっているか、「リスナーが納得できる」ような構成になっているか、などを確認させる。</p> <p>② 各自が書いた回答がリスナーに聞いてもらえるような、説得力のあるものになっているのかをグループで批評し合う。</p> <p>③ コメントの相互批評に際しては、教科書45ページの「批評・評価する時の言葉」を参考にすることを伝える。</p> <p>「より説得力を増す」という観点で原稿を完成させる。</p>

学習の具体と教材の解説

【第1時限】

●導入

1 学習目標と学習の流れを確認し、学習の見通しをもつ。

単元の導入時に既に回答を作成しているが、三つの読むこと教材の読解を終え、考え自体を変容させたものもいることが想定される。そのため、まずは学習者一人一人に自身の回答を振り返らせること、そして自分の回答を修正することから始めたい。

2 リスナーの悩みのポイントを捉える。

悩み相談に対する答えとしては、まずは何よりも悩みの内実に向ることが求められる。

リスナーからの悩み相談のポイントとしては、以下の通りである。

(1)「本当の私って何?」

①自分をつくることの違和感

その場、その時、あるいは他者によって異なる私の存在

②常に誰かの目を気にする私という存在の希薄さ

演じることで疲れる私

(2)嫌われない私でいること

①複数の私という存在

②本当の私とはそもそも何か?

以上のように、リスナーの悩みの根源を読み取ることで、そしてそれにしっかり答えていくことが求められていることを確認していくことを基本とした。

●展開1

3 ここまで読んできた文章の内容をそれぞれ要約する。(学習活動1)

「読むこと」の教材で学んだことをもとに、実際に三つの文章を要約させる学習を行う。ただし、三つとも要約することは難しく、時間もかかることから、特に気に入った教材、あるいは自分の回答に引用できそうなものだけを要約することにするのを勧めたい(各教材の二〇〇字要約例を参照)。

引用自体が難しい場合は、特に印象に残った言葉を取りあげ、その理由を記述させるような取り組みを行うとよい。その際、基本的なことをまとめさせるようにしたい。例えば、書名や筆者名、ページ数などは、最低限確認させたい。このことは、本から必要な情報を収集する際の基本的な「作法」でもあり、徹底したいことである。

取りあげたい本

- ・筆者名：鷺田清一
- ・書名：他者を理解する

筆者のこの言葉

- ・「とりあえずそのまま受け入れられた」(37ページ)

この言葉を取りあげる理由

他人に、「わかった」と言ってもらいよりも、受け入れられた、肯定された感触が大切なのだという筆者の考えには納得する。他者としての他者の存在に接するという考えには納得できた。特に、自分の理解の枠に収めようとしなかったことが重要である。「わかり合えない」という前提を大切にしているところには納得させられたから。

〈気に入った言葉を取りあげるワークシート例〉

【第2時限】

●展開2

1 「学習活動2」に取り組み。

まずは、目的や相手に応じた書き方、説明の仕方を確認させることを目的として、原稿自体の見直しをさせたい。発表原稿例を参考に、原稿作りの際に気を付けたことをまとめ、何を書くのか、それをどう表現するのかを意識させていきたい。例えば左のように、教科書44ページのコメント例に対して、内容的な過不足や適切さ、あるいは表現として、適切な語り口になっているのかを批評させた上で、書き換えをさせるとよい。

4 共通点と相違点を明らかにした上で、情報を整理する。

三者の意見については、それぞれ異なっている。三人の筆者の文章を要約することで、その違いは明らかになるものと考えられるが、これを個々人で行うことには労力がかかりすぎてしまう。

そこで、まずはここまでの展開を参考に、自分の回答に使えそうなものに絞って要約させ、その要約したものをもとにして、共通点と相違点を発見させるとよい。とりわけ、共通点については、三人の筆者が「現代人が自己のあり方や他者との関係の結び方に問題意識をもっている」という点を確認する程度でよく、主眼としては相違点を見いだすことにあると言ってもよいだろう。

5 自分なりにリスナーの問いに対する回答を構想する。

ここでも、やはりリスナーという他者を意識しながら、説得力のある文章になるよう意識づけさせたい。

自分って何かって悩む人は多いと思うよ。

内容的に悩み自体が真っ当なものであり、表現としても同調するような語りかけになっているからいい!

でも、それって青春している証拠だよ。きっと自分の大切な誰か

思っている以上にいろんな人と出会っていて、

に出会ったときに、「あ、この人といるときは幸せだな」って感じられるはずだよ。でも、そういう人といつ出会えるかはわからない、そういうすてきな人も出会えていないはず。

んだから、これからの出会いの一つ一つを大切にしていけばいいかな? いんじゃないのかな?

き、「幸せを感じることができる人」に出会えるようにしていけばいい。

ひょっとしたらもう出会っているかもしれないけどね。

〈回答にコメントを入れた例〉

2 各自で構想したリスナーに対する回答について、グループで相互批評し合う。

各自で作成したリスナーに対する回答により説得力をもたせるため、三人の文章のうち「誰の」文章を「どこに」引用するかを考えさせる。その上で、実際に完成稿を作成させる。その後、グループごとに、よりよく伝わる文章にしていくために共同推敲をさせていきたい。

こうした活動を展開していくためにも、教科書44ページのコメント例に、実際に平野啓一郎の文章の引用をどこに入れるのが適切かを考え、より説得力のある回答を作成させるような取り組みを行うことで、引用の意味や説得的な言い回しを実感的に理解することが期待できよう。

回答例を参考にしながら、引用箇所の適切さを批評させていくような展開を行いたい。さらに、「引用は文章中のどこでよいのか」などの問いを準備し、批評活動を通じて、説得的にしていくための方略について、学習者たちの認識を深めていくことを目指したい。ただし、「リスナーに聞いてもらう」ことを前提としていることから、リスナーという他者を具体的に設定し、理解してもらえらるること、さらに「リスナーが納得できる」ような構成になっているのかを批評させていきたい。

なお、コメントの相互批評に際しては、教科書45ページの「批評・評価する時の言葉」を参考にして、学習者どうしが批判し合うのではなく、よりよくしていくために補足したり、付け足したり、さらに具体的な書き方をグループの仲間に提案していくような生産的な議論、取り組みとなるよう、指導していくことが望まれる。

【第3時限】

●まとめ

1 グループに分かれ、実際にラジオパーソナリティーとしての回答を発表する。

ラジオパーソナリティーとして作成した回答を発表し合うことで、聞き手として各自が作成した回答をいかに受け止めたのかを理解し、どう納得したのかなどについて、発表者も含めて積極的に交流させるようにしたい。とりわけ、「感想を交流する」ことを通じて、聞き手としても一度質問したいことや、「発表者からさらに納得してもらうためには、どういうことが必要になると思いますか」などの問いを交流していくことで、発表者・聞き手とも、どのように書いたり説明したりすればよいかを考えさせるようにしたい。また、必要に応じて質問例を追加していくことで、学習者間の活発な交流をもたらしようなことも仕組みたい。

さらに、聞き手には「もったいなかったらよいのではないか」という批評と提案をさせるような交流をしかけるようにしたい。聞き手の役割として、発表者の発表内容を受け止めることも重要であるが、それ以上に、発表をより説得的なものにしていくためにどうしていけばよいのかを発表者と協働して探究していくことが重要となる。発表内容を聞き手として聞きながら、より説得的なものにしていく提案ができるということは、本単元で身につけさせたい資質・能力を育成することにもつながっている。

2 発表後に、聞き手からの意見をもとに発表原稿を書き直し、より説得力のある文章に仕上げる。

本単元の目的は、説得的に書くとはどういうことかを理解することである。実際にリスナーに対する回答を作成し発表実践を行ったことにより、発表者としては、ラジオパーソナリティーとして「よりよく伝えることができたか」という自己評価だけではなく、「もう少しこうしたらほうがよかった」などの具

自分って何かって悩む人は多いと思うよ。

でも、それって青春している証拠だよ。私たちは、思っている以上にいろんな人と出会っていて、「あ、この人といるときは幸せだな」って感じられる、そういうすてきな人も出会っているはず。そういう人といつ出会えるかはわからない。だから、これからの出会いの一つ一つを大切にいき、「幸せを感じることができる人」に出会えるようにしていけばいいのではないかなと思うけどね。

例えば、平野啓一郎という人がこんなことを言っているんだけど、「人間にはいくつもの顔があり、相手との相互作用の中で、さまざまなキャラを演じているに過ぎない。個人の中に『複数の分人』が存在しているのであり、唯一無二の自分なんかいない、『本当の自分』なんて発想は幻想である」と。

平野さんの言いたいことは、「『私』という存在は単独で存在しているわけではなく、他者との相互作用の中にしか存在しない。」ということです。だからこそ、「誰かといる時の自分は好きだとか言えるはず」だし、「好きな自分でいられる他者といる時の自分を肯定すべきだ」と主張しているんだよね。

そういう人に、ひよっとしたらもう出会っているかもしれないけど、「本当の自分って何か」と悩むよりも、全て「本当の自分」であって、この人といる時の自分は好きと言えるようになればいいんだと思うよ。

〈コメント例を推敲した例〉

3 相互批評で出た意見も参考に、ラジオパーソナリティーとしての回答を完成させる。

相互批評を通じて提示された提案をもとに、書き換えを行う。ダメ出しではなく、よりよくしていく、より説得的なものにしていくことを目的とした作業であり、学習者たちが納得して書き換えることが重要となる。

さらに、自分自身がもらったアドバイスをどう受け入れたのか、なぜ受け入れたのかを振り返らせながら書き換えができると、よりわかりやすく、説得的な書き方への方法的な認識を形成させることにもつながるはずである。

体的な修正点などが浮かぶはずである。また、このことは、聞き手との話し合いを通じても意識されることになったはずである。

こうしたポイントを自分自身で整理し、まとめておくことは重要である。「活動をしました」というだけではなく、活動を振り返り、内容的にいか修正するかを具体的に記述することで、説得的に書くためにはどう工夫が必要なのかを言語化してまとめていく作業をさせていきたい。

3 学習目標を再確認し、学習を振り返る。

文章の一節を引用したり、書いた文章を見直し、段落を入れ替えたり、文を入れ替えたり、説明の仕方を変えたりすることによって、文章の説得力は大きく変化する。単に書き換えたという経験をさせるだけではなく、どう書き換えたのか、なぜ書き換えたのかを考えさせ、書くコツとしてまとめさせることによって、子どもたちの書く力の定着を目指したい。

参考資料

参考

引用のコツ

引用の目的は、自分の主張の正当性・信頼性を補強する点にあります。何かを主張したい、断言したい、その後にその根拠をバックアップしてくれる引用文を配置すれば、「何もしなければ信じてもらえなかった主張」も信じてもらえる可能性が高まります。

当然、「その道の専門家」の言葉を引用することによって、説得力は高くなります。さらに、公的機関のデータや統計等を引用できれば、より強力に主張を後押ししてくれるものになります。

では、正しい引用の仕方や書き方について整理しておきましょう。

①自分の文章と引用する文章に関連があること

原則として、自分の文章と引用する文章には関連が必要です。自分の論をより説得的にいくために引用するのだということを理解した上で、「簡にして要」を肝に銘じて、効果的な引用に心がけましょう。ただら引用しても長くなるだけです。読み手として、読みたくならぬいですよね。

②文章中で、自分の文章と引用文章が明確にわかるようにすること

引用した文章は他者の書いたものです。当然のことですが、自分が書いた文章かのように記述してはいけません。引用の仕方は、引用した部分にかき括弧をつける、改行する、さらに引用タグを使う、太字、斜体、色付けするなど、何かしらの方法で区別する方法があります。

③引用文章を改変しない

引用文は、改稿したりしてはいけません。記述そのままを引用することが基本となります。「こうした方がわかりやすいかな」などの勝手

な理由で改変してはいけません、引用したい箇所が長い場合は、前略・中略・以下略などと記せばよいのです。長々引用しても、これまた読み手として読みたくありませんよね。読み手のためと思いつつも、読み手のためにならないことを理解して適切な使用を心がけましょう。

④自分の文章がメインであることを忘れずに！

引用文は自分の主張を支えるものです。引用が主になってはいけません。文章の中で、引用文が占める割合を考えることも重要です。

⑤出典と出所を明らかにすること

書籍なら、著者、タイトル、出版年、出版社、引用ページまでを記載しなければなりません。タイトルと著者だけでは、引用と認められませんが、サイトなどであれば、URLと閲覧日を掲載するようにするといいでしょう。

参考)『Q&A引用・転載の実務と著作権法 第5版』北村行夫・雪丸真吾

(二〇二一年・中央経済社)

『レポート・論文をさらによくする「引用」ガイド』佐渡島紗織、ディ

エゴ・オリベイラ他(二〇二〇年・大修館書店)

「文を見直す」という行為について

作文をするというとき、個人にいかにか書かせるのかということに意識が向きがちである。とりわけ、「子どもたちは書けない」という実態的な状況認識に基づき、実践現場では書かせるための工夫について考えることが多くなる。ただし、短い文章やツイッターなど、子どもたちは書くということに対して、ネガティブになっているわけではない。むしろ、個人で書くというよりも、全体で書く、共同で書くということに意識的になることでよりよく書けるはずである。

挑戦的な試みではあるが、共同思考行為として、共同で書く過程を組織していくことは可能であろう。例えば大村はまは、その実践の中で、他者と作

文を交換し読み合うという活動を積極的に取り入れた実践を報告している。

さらに、「共同推敲」や「共同批評」という言葉は使用していないものの、「作文を読み直す」という経験をさせ、子どもたちに作文の書き方やよりよい書き方について意識化させようとしていたのは事実である。

また、近年では、富士原紀絵(二〇一五)が、「国語教育の作文指導過程における「文を見直す」行為に関する一考察——指導に用いられる用語の整理を通して——」(『お茶の水女子大学人文科学研究』第11号)を発表し、共同で書く、共同で見直すということの意義について、実践自体を歴史的に捉え直したり、理論を再整理しながら、その意義について提起したのも存在している。

こうした先人の挑戦を受け継ぎながら、よりよい書き手として子どもたちを育成していくことを目指したい。

参考)『大村はま国語教室6 作文学習指導の展開』大村はま(一九八

三年・筑摩書房)

教材研究・授業研究のための文献

・『Q&A引用・転載の実務と著作権法 第5版』北村行夫・雪丸真吾(二〇

二一年・中央経済社)

・『レポート・論文をさらによくする「引用」ガイド』佐渡島紗織、ディエ

ゴ・オリベイラ他(二〇二〇年・大修館書店)

読書指導・発展学習のための文献

・『コピペと言わないレポートの書き方教室…3つのステップ』山口裕之

(二〇一三年・新曜社)

総ページ数も少なく、手軽に読める。実際のレポートを具体例にあげて説明がなされており、どういった部分に気をつけていけばいいのかわかりやすく解説してあるため、理解しやすい。さらに、この具体例自体を教材として活用することもできるだろう。

「振り返る」の解説1

思考力・判断力・表現力

読む

●「若者に友達プレッシャー」「自分を捉え直す」「他者を理解する」を読み、それぞれの筆者の自己や他者に関する考えを整理して、共通点や相違点をまとめてみよう。

「読むこと」の資質・能力の振り返りを意図した課題であり、「読むこと」の指導事項「ア」の「内容や構成、論理の展開などを的確に捉え」ること、「論点を明確にしなが重要旨を把握する」ことの定着を目指した「振り返り」である。

三つの資料から読み解くことのできる共通点と相違点をまとめていくことで、それぞれの筆者の自己や他者に対する見方や考え方の整理につながることを意図している。また、こうした学習を「振り返り」として学習過程の中に顕在化することは、単に教材の内容をまとめるだけでなく、現代社会で自己や他者をめぐる問題の議論の推移を整理することにもなるはずだ。そして、「個性」や「自分らしさ」を考える契機としても位置づくことになるはずである。

現代人の悩みの一つである「私とは何か」という問題を深く考察していくきっかけとして、三人の筆者の考え方を捉え直していく活動を行いたい。

書く

●自分の考えを説得的にするために、「若者に友達プレッシャー」「自分を捉え直す」「他者を理解する」から一つを選び、要約した上で適切に引用できたか確かめてみよう。

●目的や課題に応じて情報を整理する方法の一つとして、要約の仕方を整理してみよう。

「書くこと」の資質・能力の振り返りを意図した課題であり、「書くこと」の指導事項「ア」の「書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理」すること、そして「目的や意図に応じた適切な題材を決める」といった能力の形成の確認を行うための「振り返り」である。

ラジオパーソナリティーになるという活動を通じて学習者は、「読むこと」の学習で学んだ三人の筆者のいずれかの考えに共感し、その文章の一部を引用しながら、書き手として投稿文に対する解答を作成したはずである。解答作成の過程においては、引用した文章が自分の言いたいことを論じるために適切なものであることを検証し、確認することが重要である。そのために、引用を用いることで自分の言いたいことや主張したいことが明確になっているか、主張がしっかりと位置づくものになっているか、文章全体が説得的なものになっているか、などを観点として引用文自体を検証し、適切性を確認していききたい。そのように、書き手の情報の収集のあり方を検証した上で、自分が三人の文章をどのように整理（＝分類したり、比較したり、関連づけたり）したのかを見直し、情報収集と整理のあり方について確認していくことを目的とした課題設定となっている。

また、共通点や相違点をふまえて比較・分類し、論点を整理するなどとして、同じテーマを取りあげていてもそれぞれの筆者にもその見方や考え方が存在し、異なる立場から主張を展開していることを、少し立ち止まって見つめ直させたい。そうすることによって、多種多様な情報を的確に整理するためには、情報収集と整理のためには要約や要旨を捉えることが有効な方法であることを確認させたい。

知識・技能

●「若者に友達プレッシャー」「自分を捉え直す」「他者を理解する」で、筆者の考えを述べるために取りあげられている事例とその役割について、それぞれ解説してみよう。

本単元の知識・技能の振り返りを目指した課題であり、言葉の特徴や使い方に関する事項「ウ」の「文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めること」を目指した「振り返り」である。

学習者は「読むこと」の三本の教材文の学習を通じ、筆者がそれぞれの立場から論じた自己や他者の問題を読解してきたわけだが、当然ながら文章ごとに事例として取りあげられている「もの」や「できごと」は大きく異なっている。筆者は、読者が納得できるように、あるいは自説を主張するのに適切な説明ができるような、わかりやすい事例を準備している。それぞれの文章について、どのような事例が取りあげられているのかに着目して読み、その事例を用いた筆者の説明を通して、主張と事例のつながりや適切さについて情報と情報との関係から読み解き、検証していくことで、説得的技法や説明の仕方を学ばせていきたい。

学びに向かう力、人間性

●「若者に友達プレッシャー」「自分を捉え直す」「他者を理解する」の筆者の考えを比較して共感できるもの、あるいは自分が最も納得させられたものを取りあげ、その理由を説明してみよう。

学習者たちは、「読むこと」そして「書くこと」の学習を通じて、三人の筆者のものの見方や考え方を深く理解してきたはずである。その深い理解の過程を、(内容的な議論ももちろんのこと)説得的技法や論証過程について検証し直して、学習者個々が共感した論、あるいは納得した論を指摘させてい

くことが目的である。とりわけ、表現に着目したり、説得的技法や論証過程、さらには事例の用い方について理由を挙げて批評したりしていくことができれば、「振り返り」としては十分である。

また同時に、こうした批評活動を行う中で、さまざまな観点から新たな問いが生じる可能性もあるだろう。そうした新たな問いをもとに、よりよい書き方や説得的仕方などを構想することができれば、より深い学びにつながる可能性もある。単に筆者から学ぶ、あるいは筆者の方法に学ぶだけでなく、それらをもとにして、より深く学ぶ姿勢を身につけることを目指したい。

学びを深める

身体(の)疎外

◆黒崎政男

採録のねらい

●資質・能力の観点から

本単元の目標は、「論点を整理することにある。したがって指導の上では、まずは筆者が言う「デカルト的身体疎外」と「電脳的身体疎外」のそれぞれを、時代の流れと内容を関連して理解することが重要である。そして、ドナーという生命倫理の問題の具体例から、二十世紀後半における「私」と身体をめぐってどのような考え方が見えてきているかをまとめさせたい。後半では、二十一世紀に登場した「バイオメトリックス認証」のどのような点が「奇妙」なのかを考えさせることで、結論に向けての理解を深めていきたい。最終段階では、「身体(の)疎外」という言葉の内容を理解させ、全体の構成を理解させる。

学習のまとめとして、私たちの生きている時代の特徴とそこでの生き方について考えさせ、本文を通じて筆者がどのようなことを主張しているかをふまえて、思考を深めたい。適宜、図書室などを利用して、「バイオメトリックス認証」に関するさまざまな資料を調べ、発表や報告を行えると、なおよいだろう。

学習指導のポイント

- ・「デカルト的身体疎外」や「電脳的身體疎外」などの内容を理解しながら思想的な流れを整理して構成を把握する。
- ・構成を的確に把握し、筆者の主張を捉える。

●テーマの観点から

デジタル情報の進化に伴いセキュリティ強化のために、「バイオメトリックス認証」と呼ばれる、身体的特徴によって個人を特定して認識するシステムが用いられることが増えている。例えばスマートフォンなどは、指紋によって所有者であることが認証され、個人情報が入った画面に進むことができる。またマンシヨンの入口などには、瞳の虹彩によって自動的に住民であることが認証されてドアが開く仕組みが導入されていることがある。ここでは、「私」が「私」であることを認識するのは、指紋であり、虹彩であり、掌の静脈の形であるという身体的な特徴である。

つまり、「私」が「私」であると認識されるかどうかは、他者の眼が「私」をどのように認識しているのか、という点にかかっている。この場合の他者の眼とは、指紋認証装置であり、入口で私の眼の虹彩を見つめるカメラのレンズである。「私」とは他者の眼によってはじめて存在する、という認識について理解を深めたい。

学習指導のポイント

- ・筆者がこの評論で指摘する、現代の「バイオメトリックス認証」や脳科学の発展における問題点について考える。
- ・「精神」と「身体」のかかわり方の変遷を論旨にそって時代ごとにまとめ、筆者の主張を通して現代という時代について理解を深める。

概要

●筆者

黒崎政男(くろさきまさお)

一九五四(昭和二九)年。哲学者。宮城県の生まれ。東京大学文学部哲学科、同大学院哲学専攻博士課程修了。現在東京女子大学現代教養学部人文学科教授。専門はカント哲学、人工知能・電子メディア論。インターネットを中心とする電子メディアの問題に早くから関心を持ち、また生命倫理などの現代的な課題に対しても伝統的哲学に立脚し原理的に捉えていることとする視点から論考を深め、各メディアで発言を続け、「哲学者クロサキ」として知られている。一九九七(平成九)年よりN T T オープン・ラボ客員研究員を兼務し、「メディアの受容と変容」探求グループリーダーとして活躍。グループにはコアメンバードとして柏木博(評論家)、香山リカ(精神科医)、村上陽一郎(科学哲学・科学史研究者)などがあり、その成果の一部は『情報の空間学』として発表された。一九九八(平成一〇)年より二〇〇三(平成一五)年まで、朝日新聞文化欄「科学をよむ」の執筆を担当した。

主な著書に、『哲学者はアンドロイドの夢を見たか』、『ミネルヴァのふくろうは世紀末を飛ぶ』、『カント「純粹理性批判」入門』、『身体にきく哲学』、『哲学者クロサキの哲学超入門』などがある。

●出典

『身体にきく哲学』(二〇〇五年・N T T 出版)より、「第一章 バイオメトリックス認証と身体」による。

教科書掲載にあたり、筆者の承諾を得て文章と表記の一部を改めた。

●要約

【二〇〇字以内】

デカルトは、意識こそ人間の本质と考え、身体を副次的なものとした。二十世紀においては、コンピュータの発達により、人間存在のうち、神経系の部分が拡張され、身体と齟齬をきたし、新たな身体の状態が生まれた。しかし二十一世紀のテクノロジーは、私の意識とは無関係なところで、顔や虹彩といった身体的特徴で私を認証するようになり、現代はまさに身体が逆に私を疎外していく時代に入りつつあるのかもしれない。(一九五字)

【二〇〇字以内】

身体は近世哲学においてデカルトの疎外を受け、二十世紀に電脳的疎外を受けた。しかし身体的特徴で私が承認される二十一世紀のテクノロジーによって、逆に身体が私を疎外していく時代に入りつつあるのかもしれない。(二〇〇字)

●表現の特色

本教材は演繹法を多用している。演繹法とは、命題や結論を先に述べて、その正当性を例証によって後に示す記述の仕方である。二十世紀後半の「身体(の)疎外」状況や、二十一世紀の「身体(の)疎外」については豊富な例示による説明があり、すべて演繹法に準拠した記述だ。

ところが、「身体(の)疎外」という表題は、定義されることもなく、その謎は放置されたまま話は進行する。謎は本文を読み進めていって、最後にやっと解けるのである。つまり、表題の部分だけは帰納法になっていることだ。評論文の読解は、時に探偵小説のような謎解きになっており、学習者にはそれを楽しむことを学んでもらいたい。

学習指導の展開

●学習指導要領の指導事項

知識及び技能

情報ア 主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めること。

思考力、判断力、表現力等

読むキ 設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりすること。

◆言語活動例

読むウ 学術的な学習の基礎に関する事柄について書かれた短い論文を読み、自分の考えを論述したり発表したりする活動。

●評価規準

知識・技能

・主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めている。

思考・判断・表現

・設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりしている。

主体的に学習に取り組む態度

・主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めたり、設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりすることに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。

●学習指導案例

学習指導案

〇〇高等学校国語科 〇年〇組
授業者 〇〇〇〇

1. 学習活動 筆者の主張をとらして現代社会の課題について考える。
2. 教材名 「身体(の)疎外」・その他の関連資料
3. 学習目標 本文を読解するとともに、扱われている話題について調べるなどして、「自己」や「他者」などについて、考えを広げたり深めたりする。

4. 評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めている。(情報ア)	設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりしている。(読むキ)	主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めたり、設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりすることに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。
評価の実際	教材文の構成に注意して、筆者の主張の中心を捉えている。(記述の確認)	筆者の主張をもとに、他の資料なども参照しながら、自分の考えを広げている。(記述の確認)	調べたことを交流することをおして、自分の考えを広げたり深めたりしている。(記述の分析)

5. 授業の展開 (2時間)

時	学習活動	評価
1	・「読みナビ」の1～3項目の課題に取り組む。	教材文の構成に注意して、筆者の主張の中心を捉えている。(知識・技能、記述の確認)
2	・「読みナビ」の4・5項目の課題に取り組む。 ・考えたこと相互に交流する。	筆者の主張をもとに、他の資料なども参照しながら、自分の考えを広げている。(思考・判断・表現、記述の確認) 調べたことを交流することをおして、自分の考えを広げたり深めたりしようとしている。(主体的に学習に取り組む態度、記述の分析)

●学習指導の展開例(2時間扱い)

第1時限		時間
		目標
		・主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深める。
		導入
		1 本教材についての導入を行う。
		2 「デカルトの身体疎外」と「電脳的身体疎外」の内容を理解する。
		3 二十世紀後半の生命倫理の問題を理解する。
		4 「バイオメトリックス認証」について理解し、問題点を考える。
		展開1
		1 具体的な質問を行う。「私」や「身体」がなぜ哲学的な問題になるのか、具体的にイメージさせられる質問を工夫する。
		2 デカルトの「われ思う故にわれあり」について補助的に説明を加え、考えさせる。「にっちもさっちもいかなくな」った二十世紀末の身体的状況がどのようなものか、具体的に考えさせる。
		3 臓器移植と自己決定権のかわりと問題点を具体的に例示して考えさせる。
		4 これまでの、例えば印鑑による本人認証と「バイオメトリックス認証」との根本的な違いはどのような点にあるか、考えさせる。新たなテクノロジーによる「電脳的身體疎外」と「バイオメトリックス認証」との違いをまとめさせる。
		評価規準
		知識・技能 ・主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めている。
		学習活動と指導内容
		指導上の留意点

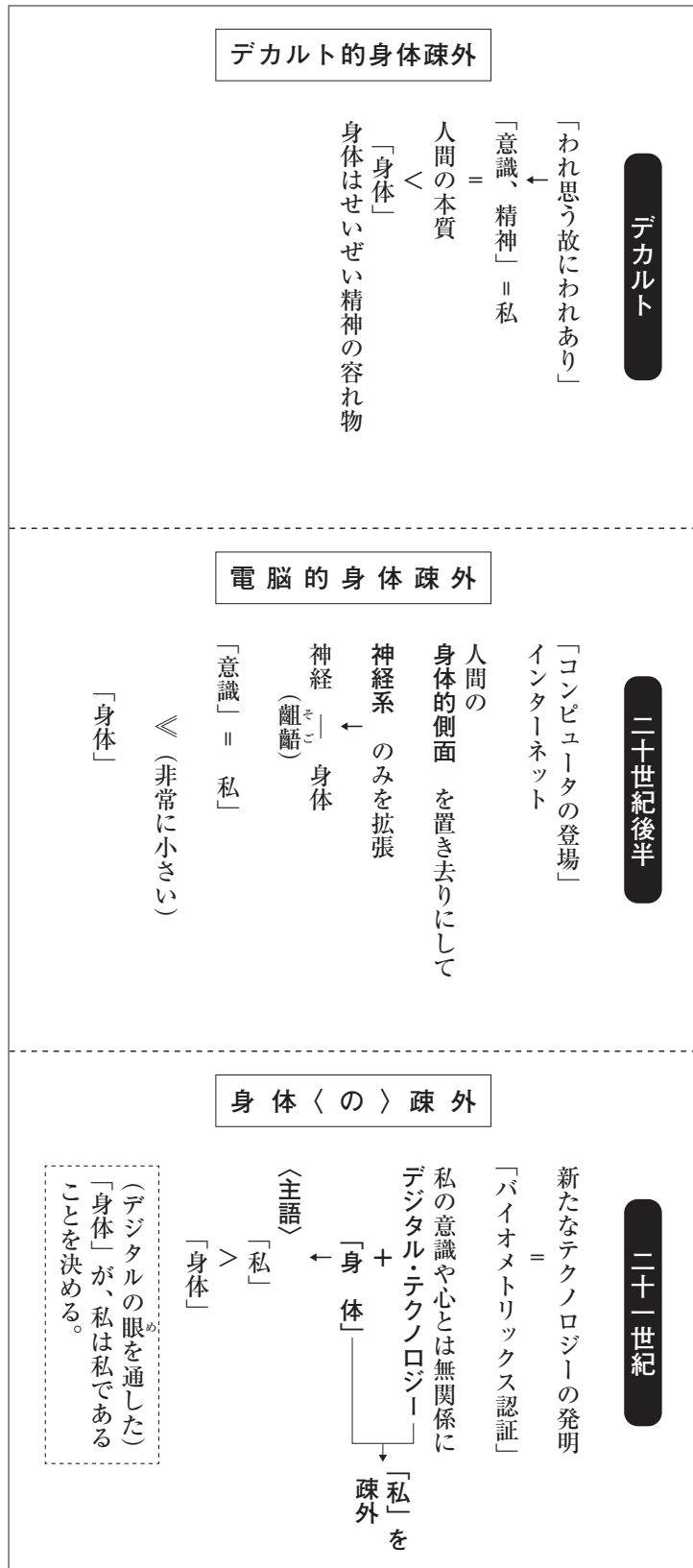
第2時限		時間
		目標
		・設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりする。
		展開2
		1 前時に整理した内容を確認する。
		2 「身体(の)疎外」の意味を理解する。
		3 学習を振り返る。
		まとめ
		1 前時でのまとめに加え、「バイオメトリックス認証」によって、具体的にどのような怖い事態が考えられるか、想像して答えさせてもよい。
		2 現代の脳科学と「バイオメトリックス認証」との間にはどういう共通点があるか考えさせる。「デジタルの眼を通した『身体』とは具体的にどのようなものか、指摘させる。
		3 主語が「私」から「デジタルの眼を通した『身体』」へと変化した点に注意しながら「読みナビ」の五項目に取り組み、他者との自己との関わりなどについても考えさせる。
		評価規準
		思考・判断・表現 ・設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりしている。 主眼的に学習に取り組む態度 ・主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めたり、設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりすることにに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。
		学習活動と指導内容
		指導上の留意点

学習の具体と教材の解説

●全体の構成

段落	ページ・行	要旨
第一段	初め〜49・上1「…いえるだろう。」	心による身体(の)疎外 哲学にとって「身体」は重要でやっかいな問題である。デカルトが「われ思う故にわれあり」で身体に対する心の優位を主張し、これを「デカルト的身体疎外」とも呼ぶとすると、二十世紀にはコンピュータの発達に伴い、脳や神経系を拡張して身体を置き去りにする、いわば「電脳的身体疎外」という状況が生まれた。
第二段	49・上2「ところで、…」 50・上11「…ということだ。」	身体は私に從属する 臓器提供において、その決定権がドナー・カードによって確認される本人の意志にあるように、二十世紀には私が私である所以は私の主体的な意志にあり、身体は意識に從属するものとされた。ところが二十一世紀に発達したバイオメトリックス認証のようなテクノロジーは、意識とは無関係な身体的特徴から私を判断し、身体が私を決定するような事態を生じさせている。
第三段	50・上12「これまでの…」 52・上7「…不安でもある。」	身体による私の疎外 バイオメトリックスのような認証のもとではモノとしての身体が逆に私を疎外し、身体と私をめぐる関係の齟齬が生じるだろう。
第四段	52・上8「繰り返して…」 〜終わり	デジタルの眼と身体 新しい脳科学が目指しているのは、さまざまなテクノロジーによって、私の脳の状態から私の意識を測ろうという方向であり、現代は、「私」が主語ではなく、それは逆に、デジタルの眼を通した「身体」が主語となり、デジタルの眼と結託して主導権を握っていく、そういう時代に入りつつあるのかもしれない。

●展開図



● 語句・文脈の解説

● 第一段(初め〜49・上1「…いえるだろう。」の要旨)
心による身体(の)疎外
哲学にとって「身体」は重要でやっかいな問題である。デカルトが「われ思う故にわれあり」で身体に対する心の優位を主張し、これを「デカルト的身体疎外」とでも呼ぶとすると、二十世紀にはコンピュータの発達に伴い、脳や神経系を拡張して身体を置き去りにする、いわば「電脳的身体疎外」という状況が生まれた。

「48ページ」

上1 哲学にとって「身体」は、重要なテーマであると同時に、常にやっかいな位置を占めてきた。哲学にとつての「身体」の「重要性」と「やっかいさ」とは、この評論全体の論旨に関わるものである。次の形式段落で紹介される「われ思う故にわれあり」のデカルトの哲学においては「精神」が重んじられ「身体」はいわば置き去りにされるが、二十世紀になると今度はメルロ＝ポンティらが「身体」の復権を叫ぶようになるなど、哲学史の中でも振れ幅の大きい「やっかいな」問題の一つである。

上3 デカルト René Descartes 一五九六年〜一六五〇年。フランスの哲学者・数学者・自然科学者。考える主体としての自己(精神)とその存在を定式化した「われ思う故にわれあり」(Cogito, ergo sum. コギト・エルゴ・スム)は哲学史上最も有名な命題の一つである。

上3 近世哲学の出発点を「われ思う故にわれあり」に設定した。筆者は、教科書本文が所載された「身体にきく哲学」の第二章「身体(の)哲学史」の中でデカルト哲学について次のように述べている。「二十世紀までを支配していた人間観は、デカルトの心身二元論であった。近世になって自然科学的な知見が出てくる中で、デカルトは物体と心的なものとの直接的な相互関係を排除し、両者を完全に独立なものとする物心二元論を提出したといっている。」「デカルトの二元論をこのように見てくると、西洋近世で起こっている事態が、実によく説明できる。一方では自然科学によって世界を機械論的法則で一義的に決定していくような世界観が生まれる。(中略)他方、心(精神)の世界では、それがほとんど純化されてゆき、人間の精神こそが何ものにも囚われない自由なものとなされ、さらに自然を支配するような存在へと変貌していく。デカルトの二元論は、現代が現代であるための不可欠なというか、根本的な世界観だったのである。」

上9 メルロ＝ポンティ Maurice Merleau-Ponty 一九〇八年〜一九六一年。フランスの哲学者。従来のデカルト的・二元論では「思惟する意識」と「対象としての身体」の二つに分離されていた心身問題に統一の契機として「わたしの身体」を提唱し、わたしが身体を認識する唯一の方法は「自らそれを生きていること」であり「わたしとはわたしの身体である」として、哲学における身体(の)復権を唱えた。

上11 疎外 哲学・経済学用語。ヘーゲルが『精神現象学』(一八〇七年)で提示した概念で、自己の本質を自己の存在の外に出し、自己と対立する他者としてしまうこと。マルクスはヘーゲルのこの概念を経済学に転用して、『資本論』(一八六七年)において労働が人間を疎外する過程を説明した。二十世紀にはハイデガーやサルトルなどが、文明による人間の疎外を批判した。疎外からの人間の回復は二十世紀後半の課題であり、現在もなお争点となっている。

下5 人間存在全体のうち、脳の部分、神経系の部分だけが急激に拡張 コンピュータやインターネットの普及により、人々の世界や環境への関わり方が、身体を介さずデジタル画面の情報を通じたものに急速に変化していったこと。インターネットの中では、「身体」は不要であり、「私」は情報ネットワークの中の一点となつて光速に近いスピードで世界中とつながることができる。

下9 私はネットワークの網の目の一点となり コンピュータ・ネットワークの網の目(ウェブ空間)を利用すれば、その空間の中の一点として、身体(の)移動も接触もなしに世界中の他者と関われる。

下10 パリのルーヴル美術館とつながり インターネットでルーヴル美術館のオフィシャル・サイトにアクセスすれば、瞬時に日本語も含む各国語で膨大な収蔵品の美しい画像や情報を見ることが出来る。

下13 齟齬 物事が食い違うこと。

下14 癒やし 現代社会におけるストレスや鬱病傾向など過度の緊張や慢性的な心的疲労を蓄積させている人に、さまざまな手法で、一時的あるいは中短期的なストレス軽減のための手段を提供する行為。例えばアロマセラピーは、花や木など植物に由来する芳香成分(精油)を用いて、心身の健康や美容を増進する技術もしくは行為のこと。ほかに、ヒーリング・ミュージック、森林浴等がある。

下14 呼吸 「呼吸法」のこと。「呼吸法」とは呼吸によって心や身体(の)機能を向上させることを目指す訓練方法。呼吸は生命維持活動に不可欠な人体の活動で、ヨガや気功において行法の基本となる重要なものでもある。仏教においても修行され、空手の型やマラソン等のスポーツでも独特の呼吸がある。『ジョジョの奇妙な冒険』『鬼滅の刃』などのマンガ作品でも、呼吸が重要な役割を果たしている。

発問・脚問

「48ページ」

問 「哲学にとって『身体』は、重要なテーマであると同時に、常にやっかいな位置を占めてきた(上1)とあるが、どのような点が「重要」で「やっかい」なのか、第一段全体から考えて答えよ。

答 「身体」が、心(精神)の対立物として、哲学の中心的な問題として常に取り上げられ、捉え方やその位置が時代によって変化してきている点。

解説 「心」の科学的な定義が難しいように、「身体」を捉えることもまた難しい。二元論で「心」と「身体」とを分離し別物とすれば、「私」という意識は物質的身体と無関係な、魂のようなものになるしかない。逆に「身体」が「心」に全く影響を与えないという考え方にも無理が生じる。

問 「精神(心)こそが私の私たる所以」(上4)と同様の表現を文中からあげよ。

答 「意識、精神こそ人間の本質」(上6)。

問 「その代表的試み」(上10)の「その」は何を指すか。

答 哲学の分野で唱えられるようになった「身体(の)復権」。

問 「(A) 精神による身体(の)疎外」とはまた

(B) 別の意味での、身体(の)疎外が始まったともいえる」(上11)とあるが、A B それぞれの「疎外」を別の部分で何と呼んでいるか、答えよ。

答 A 「デカルト的身体疎外」(48・下2)

B 「電脳的身体疎外」(48・下18)

解説 二種類の「疎外」をしっかりと把握させたい。「精神による身体(の)疎外」は48ページの「上段」、「別の意味での、身体(の)疎外」は下段で、それぞれ説明されている。

問 「それ」(下4)は何を指すか。

答 二十世紀後半に進行した、デカルト的な意味とは違う身体(の)疎外。

問 「私はネットワークの網の目の一点となり、身体(の)なしで、パリのルーヴル美術館とつながり、世界中の他者(と)つながる」(下9)とはどういうことか。

答 身体を移動しなくても、インターネットを経由すればルーヴル美術館の情報を得たり、世界中の人と電子メール等でコミュニケーションしたりできるということ。

解説 「ネットワークの網の目の一点」という表現から、世界を網目のように覆うインターネットの様子をイメージさせたい。

問 「こんな中で」(下12)とはどういう状況を指しているのか。

答 コンピュータ・ネットワーク(インター

〈板書例〉

近世哲学の出発点 … デカルト「われ思う故にわれあり」に設定

精神(心) ↓ 疎外 ↓ 身体

私の私たる所以 自動機械

人間の本质 (精神の容れ物)

A 「デカルト的身体疎外」

… 「右のAとは違った意味で身体の疎外が急速に進行した」こと。

→ 「それは コンピュータ(・ネットワーク)によって

← 「脳・神経系だけが拡張するという事態」
(身体なしで他者とつながる)

神経系 ↓ 疎外 ↓ 身体性
(齟齬)

B 「電脳的身體疎外」

指導の要点

・ 本文における筆者の主張の前提となる事柄を捉える。

●第二段(49・上2)「ところで、…」50・上11「…ということだ。」の要旨

身体は私に從属する

臓器提供において、その決定権がドナー・カードによって確認される本人の意志にあるように、二十世紀には私が私である所以は私の主体的な意志にあり、身体は意識に從属するものとされた。ところが二十一世紀に発達したバイオメトリックス認証のようなテクノロジーは、意識とは無関係な身体的特徴から私を判断し、身体が私を決定するような事態を生じさせている。

「49ページ」

上3 生命倫理の問題群 この文章で取り上げられている「臓器移植」では、人体のどの部分まで移植が許されるのか、また、生体移植ではなく、死後の移植の場合、より生体に近い臓器を移植させるため、従来の「心臓死」よりも早い段階の「脳死」を「死」と認定できるかどうかなどの問題が生じており、いずれも人間の生命にかかわる重大な倫理的問題として議論を呼んでいる。また、臓器移植以外の生命倫理にかかわる問題として、「遺伝子診断」「男女の産み分け」「人工授精」「安楽死 尊厳死」「終末医療」「クローン技術」などがある。

上5 「自己決定権」 本来「自己決定権」という用語は法律用語であり、単に個人が自分の行動を決定する権利をもつこととは区別する必要がある。しかし一般には「自己決定権」とは、「個人が一定の私的事柄について、公的権力から介入・干渉されることなく、自ら決定することができる権利」とみなされている。現代社会では当然に見えるが、歴史的に考えれば近代以前の共同体社会では、個人の意思よりも集団の決定権が優位にあった。「自己決定権」が権利と見なされるようになったのは近代(明治)以降のことである。二〇〇四年に戦火のイラクでボランティア活動を行い、人質に取られた青年や女性の事件では、「自己決定」と表裏にある「自己責任」という言葉が国家責任とのかかわりで議論になったが、現代においても他者から独立した完全な個人というものはありえず、私たちが関係性の中で生きていく以上、例えば終末医療や臓器移植における「ドナー・カード」などの意思表示が他者との関わり合いの中で本当に皆の思いにかなうものとなっているかどうか、法律用語でいえば「公共の福祉」に適合するものなのかどうかについては、検証の必要があるだろう。

上8 脳死 脳幹を含めた脳機能が完全に失われた状態。大脳のはたらきが人間の本质であると考えれば、脳死をもって「人間の死」と見なすことができることになる。現代においては、免疫抑制薬の発

ネット)の普及で、人間の身体を置き去りにして神経系のみが拡張される状況、

問 「私という身体的側面に目を向けなければ、にっちもさっちもいなくなる」(下16)状況が生まれてきたのはなぜか。

答 インターネットなどの発達により、人間存在全体の中で身体を置き去りにして拡張した脳や神経系と、生命として存在している身体性との間に齟齬が起こったから。

問 「デカルト的身体疎外と電脳的身體疎外」(下18)の共通点と相違点をあげよ。

答 共通点 … 身体を疎外している点。
相違点 … 「デカルト的身体疎外」では、デカルトの思想に典型的に見られるように、「意識、精神」が人であるための主体とみなされ、身体は単なる従属物とされていたが、「電脳的身體疎外」では、身体を疎外するものはコンピュータ・ネットワークによって拡張した「神経系」とみなされている点。

解説 共通点は「疎外」をキーワードに、その対象が身体であることを確認しておきたい。相違点は、「デカルト的身体疎外」の時点で存在しなかった、インターネットの急速な発展を足掛かりに考えさせたい。

問 「二十世紀末の身体的状況」(下19)とはどのようなものか。

答 デカルト的身体疎外と電脳的身體疎外。

発問・脚問

「49ページ」

問 「脳死」(上8)と普通の「死」の違いは何か。

答 一般的に医師は、呼吸、脈拍、対光反射の消失(瞳孔が開く)を確認して死亡を診断する。脳死は、脳のすべての機能が回復不可能な段階にまで失われた状態をいう。つまり脳死では、ヒトの生命の本体を「脳」の機能と考えるのに対し、一般に「死」では身体全体を考える点に大きな違いがある。

解説 多くの人は「心臓機能の停止→脳機能の停止」というプロセスをたどるのに対し、脳死では「脳機能の停止→心臓機能の停止」という逆の流れになる。

問 「それ」(上10・13)とはどのようなことを指すか。

答 死後、あるいは脳死後に、臓器を提供すること。

問 「こ」(上15)が受けているのはどのようなことか。

答 臓器提供は、「私」が意思表示した場合に限って行われ、決定権が「私」にあるということ。

解説 直前の形式段落全体の内容を受けている。「こ」に特徴的に表れているように」と

達などにより、臓器移植が治療法のひとつとして可能になった。しかし、多くの臓器が死んでから移植したのでは機能を失ってしまう。脳死の段階で摘出すれば生体に近い状態で移植ができるため、一九九七(平成九)年、「臓器の移植に関する法律」が施行され、本人の書面による意思表示と、家族の同意を条件に、法的に脳死がヒトの死と認定され、脳死段階での移植が可能となった。

上10 それについては現在いろいろ議論がある。「それ」は臓器移植のことを指す。日本で最初の心臓臓器移植は、一九六八(昭和四三)年、札幌医科大学の和田壽郎教授によって行われたが、移植患者は八十三日後に死亡し、その際の心臓提供者の脳死判定や、そもそも患者に移植の必要があったかどうか等、多くの問題が噴出し、和田教授が殺人罪で刑事告発されるなど、話題になった。その後、一九九七年に施行された「臓器の移植に関する法律」では、移植のための法的規程が定められたが、家族の同意だけで移植可能な欧米やアジアと比べて本人の意思表示が必要で、十五歳未満の子どもの臓器移植も認められていなかったため、海外へ移植目的で渡航する者は後を絶たなかった。これに対して、二〇一〇年に全面施行された改正臓器移植法では、生前に書面で臓器を提供する意思表示を示している場合に加え、本人の臓器提供の意思が不明な場合も家族の承諾があれば臓器提供が可能になり、十五歳未満の子どものからの脳死後の臓器提供も可能とされた。しかし、移植を希望する人が多い一方で、脳死をヒトの死とすることへの疑問や脳死判定基準への批判、また臓器移植自体を医療として認めないという声も多く、この法律に対する反対運動も依然としてある。医療の高度化が、ヒトの生命自体を問う領域に踏み込んだ結果といえよう。

上11 ドナー・カード「臓器提供意思表示カード」のこと。脳死判定に従い、脳死後に自分の臓器を移植用に提供する意思、心臓死後に臓器を提供する意思、または逆に臓器を提供しない意思などを表示できる。保健所や役所等で入手可能で、登録の必要はなく、自分で必要項目を記入し携帯する。

下2 犯罪において責任をもつて判断できないような人格は、裁判で罪を問えず、無罪になるわけである。刑事では、刑法三九条第一項に「心神喪失者の行為は、罰しない」とある。心神喪失者とは、精神の障害等により、事物の理非善悪を弁識する能力、または弁識に従って行動する能力が欠如している者のことを指す。責任能力が問えないために、捜査段階では不起訴、裁判では無罪となる。さらに、刑法三九条第二項には「心神耗弱者の行為は、その刑を減輕する」とある。心神耗弱者とは精神の障害等により、事物の理非善悪を弁識する能力、または弁識に従って行動する能力が減退している者のことを指す。服薬、飲酒による心神喪失や心神耗弱は判例では認められていない。また、心神喪失が

裁判で認められることは少なく、二〇〇九年の『検察統計年報』によると心神喪失による不起訴は全体の〇・二七%に過ぎない(ただし、事件としては凶悪犯罪が多い)。民事では、民法七二三条に「精神上の障害により自己の行為の責任を弁識する能力を欠く状態にある間に他人に損害を加えた者は、その賠償の責任を負わない。ただし、故意又は過失によつて一時的にその状態を招いたときは、この限りでない」として、民法上でも心神喪失者の賠償責任の免除を規定している。もともと、故意、過失による心神喪失状態(例えば、服薬、飲酒をするなどして)は免責されない。

下6 二十世紀を特徴づけた「私(わたし)観」 第一段のデカルト哲学に見られた「意識」「精神」中心の考え方から、二十世紀後半の臓器移植に関する「自己決定権」の思想に至る、「私の私たる所以」を「意識」だけと考える身体を疎外した精神中心の「私」の見方。

下7 バイオメトリックス認証 指紋や眼球の奥の虹彩、声などの身体的特徴から本人を確認する方法のこと。前段落にあるように、コンピュータ・ネットワークの発達は私を世界中に広がるネットワークの網の目の一点となし、身体性を失わせた。コンピュータへのアクセス時の本人確認は主にIDとパスワードが用いられるが、よりセキュリティレベルが高いのが指紋や顔の形、虹彩・静脈の形などを利用したバイオメトリックス認証である。現在、日常生活のさまざまな場面で、鍵やカードなどからこのバイオメトリックス認証へと、解錠の方法は置き換わりつつある。

下10 静脈の形から判定 手の甲や手のひらを通る静脈のパターンを上から赤外線を当てて読み取り、認証する。指紋と比べ、破損しにくいという有利な点がある。

下11 虹彩の形から判定 虹彩とは瞳孔の大きさを調節する眼の中の筋肉で、この模様が個人ごとに違うパターンであることが一九八〇年代に発見された。

下14 そこで勝手な交通を行っているのである 私の意識とは関係なく、私の身体とバイオメトリックス認証が結託して、私が私であることを取り決めて、そのまま通過させてしまう。

下19 さらに複雑な、奇妙な次元の問題が持ち込まれようとしている 心と身体は二十世紀後半に神経系と身体は組みへと移行したが、精神が身体を従属下に置く点では共通している。だが、二十一世紀に登場した新たなテクノロジは、この枠組みを超え、身体が逆に精神を従属下に置くようにしている。この点、今までの考え方から見れば奇妙で複雑なものなのである。

「50ページ」
上1 次元 ものの見方や考え方の立場、または、それらを支えている思想や学識などの水準。

あるが、二つ前の段落の最後にも、「生命倫理」的な発想がいちばん特徴的に表れている「自己決定権」という考え方(49:上4)とあるので、「ここ」が「自己決定権」にかかわるものだとこのことが言える。

問 「犯罪において責任をもつて判断できないような人格(下2)が裁判において無罪になる理由は何か。

答 直前の段落で、私が私であるのは、「主体的な私、責任をもつことができる私」(上17)によると述べられているので、例えば「多重人格」であったり、精神的な障害によって主体的な判断ができず、責任を取れなかったりするような人格の場合、「私」である所以(理由)が存在しないため、法的な責任を取る「私」も存在しないことにならないから。

問 「二十世紀を特徴づけた私(わたし)観」(下6)とはどういうものか。

答 「読みナビ」の二項目の解説を参照。

問 「アイデンティファイ」(下9)に近い日本語の単語を本文中から抜き出せ。

答 認証(下7)
問 「勝手な交通」(下14)とは具体的にはどういうことか。

答 「私」の身体から何らかの情報を機械が読み取り、私が私であることを判定し、決定

していくこと。
解説 「交通」とは本来相互に行き来することであるが、ここでは「勝手な」とあるように、交通が「私」の意識を経由しない一方的なものになっているのである。
問 「取り決め」(下15)とは具体的にはどういうことか。

答 私が私であるかどうか判定し、私である、あるいは私ではないと、決定すること。
問 「さらに複雑な、奇妙な次元の問題」(下19)とは何か。

答 デジタル・テクノロジに絡め取られた私の身体が、私の意識とは無関係に、逆に私を疎外し始める点という問題。

解説 第一段では、インターネットというコンピュータ・ネットワークが神経系を拡張し、ヒトの身体を疎外していくプロセスが語られていたが、ここではバイオメトリックス認証というデジタル・テクノロジが、身体を疎外するのではなく、絡め取ることで逆にヒトの「意識」を疎外していくことが語られており、その点を「奇妙」といつているのである。

上9 端的 遠回しでなく、はっきりと表すさま。

上10 私が私であるのは私の身体によってである、という事態が生じ始めている。二十一世紀の新しいテクノロジーが誕生するまでは、私が私であることを決めるのは、他でもない私の精神であった。ところが、今やテクノロジーは身体に直接はたらきかけて、身体を通して私が私であることを決めてしまふ、といった事態が進行しつつあるのだ。

〈板書例〉

二十世紀後半の人間観
 ……私の身体に関しては私が決定権
 ⇔
 二十一世紀のバイオメトリックス認証
 ……顔の形、静脈、眼の虹彩などから私を判定
 ←
 〈私と身体〉をめぐる問題
 ……心と身体(デカルト的疎外)、神経系と身体(電脳的疎外)に加え、
 「物質としての身体」による私の疎外 が生じ始める

指導の要点

- ・ 前段で述べられた二つの「疎外」に加え、新たに表れつつある「疎外」について捉える。
- ・ 本文における筆者の主張の、最初の根拠となる事柄が示されていることを理解する。

●第三段(50・上12「これまでの…」～52・上7「…不安でもある。」)の要旨

身体による私の疎外

バイオメトリックスのような認証のもとではモノとしての身体が逆に私を疎外し、身体と私をめぐる関係の齟齬が生じるだろう。

〔50ページ〕

上18 押捺 印や指紋などを押すこと。

下2 バイオメトリックス認証は、それとは異なり、私の意思とは無関係のところ、私が私であるかどうかをアイデンティファイしようとする動きである。従来の印鑑やサインといった本人認証では、私の意思の関与が必要であった。しかしバイオメトリックス認証は、私の意思は関係なく、網膜の虹彩のような私の身体の一部に直接関わって、本人認証(つまり私が私であるかどうかのアイデンティファイ)を行うのである。

下12 デジタル以前のアナログ・テクノロジー デジタル技術では顔の形や虹彩等の形などを数値化したデータで保存して認証に利用するが、アナログの場合、例えば顔の形をカメラで撮影し、同一人物かどうかを目視で確認するなど、同一性確認のプロセスに多くの手間と人手、装置が必要となる。

下18 決定的に重要な問題 筆者が決定的に重要な点といっているのは、「私の意識や意思とは無関係」なところで私が認証されていく、という点である。次の駐車場の例でも、自分が知らないうちに何ものが車のナンバープレートを読み取り私の車であると判断していることに、不気味さや監視されているという感じを受ける、と述べている。筆者が感じるこの不安は、私たちの身体による認証においてさらに「決定的な齟齬」を生じ始め、この評論のテーマに連なっていく。

〔51ページ〕

下7 徹底的に管理されている、徹底的に監視されているというあの感じ 本文の駐車場の例のように、私の意思に関係なく、私が頼んだ覚えもないのに、勝手に私の情報を読み取り、その情報から私というものが勝手に構成されてしまうことがある。例えば、インターネットで買い物をするとき「あなたへのおすすめ商品」が次々と紹介されることがある。購入履歴から私がどんな商品に興味があるのかを特定して商品を選んで勧めてくるわけだが、その「おすすめ商品」は必ずしも自分の興味に合うわけではない。家族や友人に頼まれて購入したようなものであっても、私が好きな商品として勝手に認知

発問・脚問

〔50ページ〕

問 「これまでの本人認証」(上12)「印鑑やサインによる」とバイオメトリックス認証との共通点は何か、また違いは何か。

答 「共通点」印鑑やサインなど、私そのものではないものによって行われる点。
 「違い」バイオメトリックス認証には押印やサインと違って私の意思の関与がなく、私が知らないところでアイデンティファイされてしまうことさもある点。

問 「これ」(上13)は何を指すか。

答 従来でも、私が私であることをアイデンティファイするのは印鑑やサインなどであって、私の意識はアイデンティファイには役立っていなかったということ。

問 「それ」(上18)は何を指すか。

答 印鑑やサインなどの、これまでの本人認証。

問 「そんなこと」(下14)とは何か。

答 顔の形や眼の虹彩、声紋などを使って本人認証をすること。

問 同じ新たなテクノロジーによる「電脳的疎外」と「バイオメトリックス認証による疎外」との違いは何か。

答 「電脳的疎外」の場合、神経系の拡張によって身体が疎外されていくのであるが、

されてしまうからだ。しかし、インターネット上での「私」はその「おすすめ商品」を好むような人間として勝手に決められてしまっているのである。しかも、その情報は別のウェブサイトにも流されているかもしれない。私が考えている私ではない、インターネット上の「私」が存在していることに、気味の悪さを感じることもあるだろう。さらに、他人が私への「おすすめ商品」を見た時、それは私に対する一つの判断材料となる。そうなれば、現実の私がインターネット上の「私」か、どちらの私か本当の私かわからなくなる。これが監視の気味悪さである。

下11 **それが今度は、我々の生体について起こる**。「それ」は前の形式段落全体の内容を受けて、ビルの駐車場で知らないうちに車のナンバープレートが読み取られているように、私たちに関する情報は、実は至るところで私たちが知らない間に読み取られていることを指す。そして、そのことが私たちの生体(生身の身体)においても起こる、と述べられているのである。この認証に関する要点は次の二点である。①認証に使われる「虹彩の特徴」「顔の特徴」は、ナンバープレートのようにもともと人に読まれるためについているものではなく、自然に存在しているものである点。②私の意識が関与しないところでアイデンティファイ(認証)が行われている点。

下11 **生体** 生きている生物のからだ。

「52ページ」

上1 **そこに、身体と私をめぐる関係の決定的な齟齬のようなものが生じ始めるだろう**。「そこ」とは、私の意識や意思が関与しないところで、私のアイデンティファイ(認証)が行われたり、拒否されたりするところ。「齟齬」は食い違い。その齟齬がもたらす不安が次の形式段落三行に書かれている。「デジタルな眼」が私の身体を認識し、主体は「身体」の側に、それも「デジタルな眼」が捉えた「物質としての身体」の側に移ってしまう。「意思」「精神」としての私は、客体となってそれを受け入れられない。その主体の移譲が引き起こす食い違いに対して本質的な不安が生じるのである。

上4 **私の身体が私を裏切ったらどうしよう。そういう不安** 私たちは日常生活の中で、私が私であることとの確認をどのように行っているのだろうか。他者に確認してもらう場合は、まず顔や姿形など、身体的な要素を確認し、さらに会話などのコミュニケーションを通じて、他者との交流の中で「心」「意識」を通してアイデンティファイがなされていく。しかし、バイオメトリックス認証の場合、「デジタルな眼」が認識するのは「物質としての身体」だけであり、その認証プロセスに「私」という意識が全く関われない点にこういう不安が生じるのである。

上6 **デジタルな眼の総体が私として認識するのか、という不安** 認識される「身体」に対して、認識の主体は「デジタルな眼」そしてそれを統括するコンピュータシステムであり、ネットワークである。デジタルな眼の認証がネットワークとして広く行われるようになり、もしそこで私が私として認証されないという事態が生ずれば、それは、私が社会に受け入れられないことを意味してしまう。不安の対象はシステムから社会全体へと無限に拡大していくのである。

上6 **総体** 全体・すべて。

〈板書例〉

(教科書51ページのイラストを活用して、バイオメトリックス認証の仕組みと、そこから生じる「私が私かどうかを機械が判断することへの不安」を確認する。)

指導の要点

- ・ 前段の内容について具体例を用いて掘り下げて説明していることを捉える。
- ・ 筆者が何に対してどのような問題意識をもっているのかを理解する。

「バイオメトリックス認証による疎外」の場合、逆にデジタルな眼が私とは無関係に私の身体を認証し、私を疎外していく点が異なる。

解説 教科書49～50ページにわたって「バイオメトリックス認証」について論じられており、「私」の身体から「私」を一方的に認証するということをさまざまな具体例を出して繰り返し説明される。「私」とは無関係に、一方通行に、という点が「バイオメトリックス認証」の特徴であり、それによって「私」を疎外していくことを理解させる。

「51ページ」

問 「それが今度は、我々の生体について起こる(下11)とあるが、「それ」とは何かを明らかにして説明せよ。

答 「読みナビ」の三項目めを参照。

問 「バイオメトリックス認証」の特徴つける二つの重要な要素とは何だろうか。

答 一つは自然に存在している私の身体的特徴が認証に使われる点。もう一つは私の意識、意思が関与しないところで行われる点。

●第四段(52・上8「繰り返して…」〜終わり)の要旨
デジタルの眼と身体

新しい脳科学が目指しているのは、さまざまなテクノロジーによって、私の脳の状態から私の意識を測ろうという方向であり、現代は、「私」が主語ではなく、それとは逆に、デジタルの眼を通じた「身体」が主語となり、デジタルの眼と結託して主導権を握っていく、そういう時代に入りつつあるのかもしれない。

「52ページ」

上12「身体(の)疎外」「身体(の)疎外」という場合、意識中心で身体(を)疎外してきたから、身体を回復しようということになるが、バイオメトリックス認証のような現代の状況は、(の)は主格として、「身体」(が)逆に「意識」を疎外していくという意味になる。

上17「脳科学の進展」直前に「例えば」とあるが、ここでは脳科学もまた「身体(の)疎外」の例としてあげられている。そして次の段落で、脳科学が意識を「私」の側の意識として見るのではなく、脳を物質、意識をもその脳の反応として、「私」ではなく物質の側から見る点を「本当に逆転なのである」といつているのである。近年、技術の発展に伴って、生きている人間の脳の形や働きを画像として観察することが可能になり、人間が考えたり動いたりしているときの脳の働きや、脳神経細胞の働きの悪い場所の有無などを、観察することができる。その結果、私たちの脳を活発に働かせて脳の老化を防いだり、発達させたりするためにはどうしたらよいかなどが、少しずつ明らかになってきた。

下5「だから、本当に逆転なのである」私は私の身体を統御している精神であり、私が私であるのはその精神によるものだ、というのが基本的な私のアイデンティファイの仕方である。ところが、脳科学は脳という物質から、私の意識や判断を外から見ようとしている。もしこれが完成すれば、私というのは脳から測られることになり、私が私だという精神の優越は失われて、身体から私は判断されてしまう。まさに逆転である。

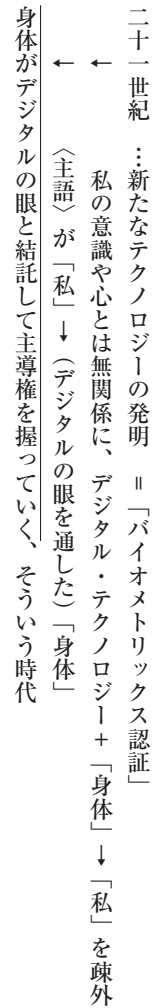
下7「デジタルの眼を通じた「身体」が主語になり、身体がデジタルの眼と結託して主導権を握っていく。そういう時代に入りつつあるのかもしれない」デカルトの二元論的な見方による「意識」「精神」を主、「身体」に従とする考え方が逆転し、「身体」が主となる時代(↓発問)。しかしその身体は、「私」の身体、というような形の、心身一体の身体ではなく、デジタル機器の眼の対象となる物質的な

第三者的な眼から見た身体である。デジタル時代における「私」とはいったい何であろうか。筆者の論を本文所載の『身体にきく哲学』の別の部分(第一章「バイオメトリックス認証と身体―私と身体をめぐる新たな問題」の「(私)はどこへいく?」)から引用しておく。

ところで、二十一世紀はデジタル・テクノロジーによるパノプティコン(一望監視装置)の時代であると考えることができる。それは(意識する私)(主體的に判断する私)(私の思惑)を超えて、第三者的に見られた私の行為、私のあらゆる行動が電脳空間に記憶・蓄積されることによって成立していく。(中略)電話の通話記録、クレジットカードやATM使用、街中の監視カメラなど、(私)の行動は今日、電脳空間に記録され蓄積されている。デジタル時代は匿名性を許さず、むしろ管理・監視こそ、その特徴である。

下8 結託 互いに心を通じて力を合わせ、不正などの悪事を働くこと。

〈板書例〉



身体(の)疎外

指導の要点

- ・ 標題に込められた筆者の主張を捉える。
- ・ 本文がどのような論理の構成や展開によって結論を導いているかを捉える。

発問・脚問

「52ページ」

問 デカルト的な「身体(の)疎外」(上8)と、筆者のいう「身体(の)疎外」(上12)の違いは何か。

答 デカルト的の身体疎外では、「私」が身体(を)疎外するが、筆者のいう「身体(の)疎外」とは、身体(が)「私」を疎外する、という違いがある。

問 「脳科学」(上17)のどういう点が筆者のいう「身体(の)疎外」と共通するのか。

答 「私」を見るのに、意識とは無関係に、まず身体としての脳とその働きを見る点。

問 何と何とが「逆転」(下6)したのか。

答 「私」と「身体」。

解説 脳科学というものが、心の働きに関わる脳を身体として捉え、「私」を測ろうとする点で、デカルト的な意識を中心とした身体疎外とは、心身に関する主体が完全に逆転しているのである。

問 「身体がデジタルの眼と結託して主導権を握っていく。そういう時代に入りつつある」(下8)とあるが、どういう時代になっていくのだろうか。

答 身体がデジタルの眼によって勝手に認証され、「私」が客体化してすべてを受け入れなければならないような、そういう不気味

な時代に入ると。

解説 筆者は本文の出典である『身体にきく哲学』の他の部分で、来るべき二十一世紀の新時代の姿を「デジタル世界において私とは何か。それは、電脳記録を大成した、その蓄積としての私が私であって、私が主體的にどう考えているかとか、私の意思といったこととは別な(私)が成立している。それは行為することが観察された私、であって、そこでは私の意識よりは身体性のほうがフォーカスされている。このような変化は確実に起こってくるだろう」と予測している。

「読みナビ」の解説

□「デカルト的疎外と電脳的疎外の二つが、二十世紀末の身体的状況だった」(48・下18)とあるが、「身体(の)疎外」について、次の二つの言葉を説明してみよう。

●デカルト的疎外 ●電脳的疎外

【ねらい】

導入部の第一段では、近世哲学の出発点であり科学的な方法の出発点ともなったといわれるデカルトの哲学から始まり、二十世紀のコンピュータ社会まで、形こそ違え、「身体」が従として扱われ(疎外され)てきた、その身体的状況について論じられている点を整理する。

【解答例】

●デカルト的疎外 …有名な「われ思う故にわれあり」では、「思う」という精神的な部分に「われ(私)」が存在する根拠が設定されており、人間の本質を「意識」「精神」であるとして、「身体」をせいぜいその容れ物にすぎないと、従属物として置き去りにしてしまったこと。

●電脳的疎外 …コンピュータ・ネットワークの発展により、脳や神経系のみが拡張し、身体が置き去りにされたこと。

【解説】

「デカルト的疎外」については形式段落の二つめ、「電脳的疎外」については形式段落の三つめの要旨をまとめる。

□「二十世紀を特徴づけた『私(わたし) 観』」(49・下6)とはどのようなことか、まとめてみよう。

【ねらい】

第二段の前半の要旨である二十世紀の「私観」を端的にまとめる。

【解答例】

1. デカルト哲学に見られた「意識」「精神」中心の考え方から、二十世紀後半の臓器移植に関する「自己決定権」の思想に至る、私の私たる所以を「意識」だけと考え、身体を疎外した「私」の見方。

2. 「私」の本体とは私の意識であり、私がどう考えていたか、主体的にどう思うかということが私の「私(わたし)たる所以」であるような私観。

【解説】

「1」はオーソドックスな解答例である。筆者は、二十世紀までの「私」観を、二十一世紀のそれと対比する形で論を展開している。第二段までの「身体(の)疎外」と、第三段以降の「身体(の)疎外」の逆転関係を捉えさせるためにも、前半の結語である、この文をきちんと捉えさせておきたい。

「2」は「1」をまとめた解答であるが、もうすこし詳しく説明させたい。問いに「二十世紀を特徴づけた」とあるので、本論で語られる二十世紀全体の「私観」をまとめてさせる。二十世紀の「私観」はデカルトの身体を置き去りにした「私」からはじまっていることをまず述べ、臓器提供の例を通して論じられている「二十世紀後半においては、私の身体は、私という意識に支配され、それに従属しているとされる。」(49・上15)という一文の内容も含め、解答としてまとめるよう指導したい。

□「それが今度は、我々の生体について起ころ。」(51・下11)とあるが、どうということか。「それ」の内容を明らかにして説明してみよう。

【ねらい】

本文における筆者の問題意識の中心を捉える。

【解答例】

□筆者の提示した「身体(の)疎外」を、私たちの身のまわりや社会から見つけ、発表してみよう。

【ねらい】

本文で紹介された技術などを手がかりに具体例を調べることとおして、技術によって「私(自己)とは何か」という哲学的な命題が、身体的な要素によって個人を識別する技術的な問題に置き換わっていることを確かめつつ、単元の話題である「他者」についても認識を深める。

【解答例】

○バイオメトリックス認証(生体認証)

バイオメトリックス認証とは、指紋、眼球の虹彩、静脈、顔、声紋など、人間の身体的特徴などから本人確認を行うものである。

例えば、「静脈認証」では、手のひらや指先の静脈パターンから本人確認を行う。静脈パターンは人によって違い、生涯変化しない。身体の内蔵にあるため、体表にある指紋などより偽造が困難である。銀行が預金者の本人確認に採用している例がある。

また、「顔認証」では、撮影した顔の画像データから、目の中心や唇の端の位置などを計測し、その特徴データと照合して本人を特定する。他のバイオメトリックス認証に比べて、本人の顔を撮影するだけでよいので、効率的で負担も少ない。電子商取引や入室管理に応用が期待されている。

バイオメトリックス認証の弱点として、怪我や病気などによって、指紋・眼球などの生体情報が失われてしまうと、個人認証ができない、という問題がある。顔認証や声紋も、怪我や病気、加齢などによって変化してしまうと、個人認証が難しくなる。

○遺伝子(DNA鑑定、遺伝子診断・遺伝子検査)
現在、犯罪捜査や身元確認、血縁鑑定などで、DNA鑑定が使われている

「それ」とはビルの駐車場で、知らないうちに車のナンバープレートが読み取られていることを指し、それが私たちの身体に関しても起こるということ。すなわち、私たちが知らない間に、顔の形や静脈の形など私たちの身体の特徴が何ものかによって読み取られ、私が私であることが勝手に認証されてしまうということ。

【解説】

まず「それ」の内容を明らかにし、そのことが何を意味するのかを考えさせる。私たちの身体的特徴が認証されるということだけでなく、意識や意思が関与しないところで一方的に認証され拒否することができない、ということとまでを含めて理解させたい。

□「身体(の)疎外」という表現には筆者のどのような考えが示されているか、まとめてみよう。

【ねらい】

この評論のテーマについてまとめる。

【解答例】

「身体(の)疎外」という場合、意識中心で身体(を)疎外してきたから、身体を回復しようということになるが、現代のバイオメトリックス認証のような場合(への)は主格として、「身体」(が)逆に「意識」を疎外していくという意味になり、現代に対する筆者の考え方が示されている。

【解説】

「身体」(を)「疎外」する、という形から「身体」(が)疎外するという形への転換を両方含まれる形で「身体(の)疎外」という題名をつけ、現代の時代的な特徴を表した筆者の思いを理解したい。

(一般的には、DNAの塩基配列の繰り返し回数によって個人を識別する。しかし、すべての個人でこの型が異なるわけではなく、「約四兆七千億人に一人の割合で一致する」とされる)。だ液(口腔粘膜細胞)、毛髪(毛根)、爪、血液・血痕などが試料として使われ、歯ブラシや吸い殻、ガムなどからもDNA採取が可能である。

また、近年、遺伝子診断・遺伝子検査が普及しつつあり、個人の遺伝子を調べることで、特定の病気の発症リスクなどを判定できるようになってきた。今後、遺伝子診断や遺伝子治療が今より一般的になれば、幼少時から「将来肥満や高血圧になりやすい」などと判定されることが普通になるかもしれない。そうなれば、遺伝子は人間の個性の一つとして認識され、遺伝子で人間同士がグループ分けされたり、互いに区別しあつたりするようになるだろう。通常、自分の遺伝子を目で見たり、他者との差異を意識したりすることはできないが、個人の心や意識を置き去りにする身体(の)疎外の一例となる可能性がある。

【解説】

身体(の)疎外としてわかりやすいのは、筆者も本文中であげている「バイオメトリックス認証」の例だろう。発表例では「遺伝子」についても取り上げている。他にも「身体が疎外する」という筆者の定義に沿った例はないか、探させる。

こうした「身体(の)疎外」という状況について、筆者は否定しているわけではない。二十世紀後半の人間観では、「意識」「主体的な私」が人間の本質として捉えられてきた。しかし二十一世紀になって、そうした人間観が変化しつつある。人間の「意識」「精神」がかかわらないところで、「身体」が私として認識される。そうした変化が何をもたらすのか、今後どのような影響が生じてくるかについて、考えさせたい。

参考資料

教材研究・授業研究のための文献

- ・デカルト著作集 増補版(全四巻) (一九九三年・白水社)
- ・デカルト「われ思う」のは誰か(シリーズ・哲学のエッセンス) 斎藤慶典(二〇〇三年・日本放送出版協会)
- ・「デカルトII 哲学のすすめ」小泉義之(一九九六年・講談社現代新書)
- ・「知覚の現象学 1・2」M・メルロー・ポンティ、竹内芳郎・小木貞孝訳(一九六七〜七四年・みすず書房)
- ・「精神としての身体」市川浩(一九九二年・講談社学術文庫)
- ・「デジタルを哲学する 時代のテンポに翻弄される〈私〉」黒崎政男(二〇〇二年・PHP新書)

読書指導・発展学習のための文献

- ・「身体にきく哲学」黒崎政男(二〇〇五年・N T T出版)
- ・「よくわかる生体認証」日本自動認識システム協会編(二〇一九年・オーム社)
- ・「私」は脳ではない」マルクス・ガブリエル、姫田多佳子訳(二〇一九年・講談社選書メチエ)